

茨城県教育財団文化財調査報告第135集

北関東自動車道(友部～水戸)建設地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

矢倉遺跡
後口原遺跡

平成10年3月

日本道路公団東京第一建設局
財団法人 茨城県教育財団

2.10.23 /
I 11
NK

茨城県教育財団文化財調査報告第135集

北関東自動車道（友部～水戸）建設地内
埋蔵文化財調査報告書 I

矢倉遺跡
後口原遺跡

平成10年3月

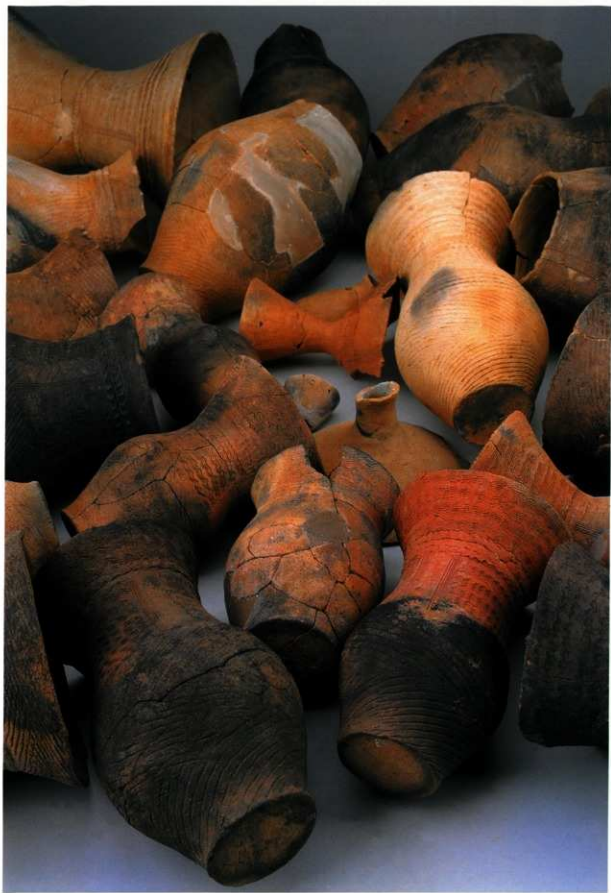
日本道路公団東京第一建設局
財団法人 茨城県教育財団



98613004



第14号 住居跡出土遺物（十王台式土器）



矢倉遺跡出土遺物

序

北関東自動車道は、北関東3県の主要都市と常陸那珂港を結ぶ高速道路です。また、東京から放射状に延びる3本の高速道路を横断的に結ぶことにより、均衡のとれた交通体系の整備を図るとともに、太平洋側と日本海側を結ぶ高速道路として北関東地域における総合的な発展を推進する基盤施設であります。

北関東自動車道（友部～水戸）建設予定地内には、埋蔵文化財の包蔵地である矢倉遺跡、後口原遺跡が確認されております。

財団法人茨城県教育財団は、日本道路公団から北関東自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査事業について委託を受け、平成7年10月から平成8年3月にかけて、上記2遺跡の調査を実施してまいりました。

本書は、矢倉遺跡及び後口原遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が、研究の資料としてはもとより、郷土の歴史の理解を深めると共に、教育、文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理を進めるにあたり、委託者である日本道路公団からいただきました多大な御協力に対し心から御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、茨城町教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力をいただきましたことに、衷心より感謝の意を表します。

平成10年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 橋 本 昌

例 言

1 本書は、日本道路公団東京第一建設局の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成7年10月から平成8年3月まで発掘調査を実施した、欠倉遺跡、後口原遺跡の発掘調査報告書である。

なお、2遺跡の所在地は次のとおりである。

欠倉遺跡 東茨城県茨城町大字前田字荻本松1,223番地ほか

後口原遺跡 東茨城県茨城町大字野宮字北山1,608番地～2ほか

2 上記2遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理事長	橋本 昌	平成7年4月～	
副理事長	小林 秀文	平成6年4月～平成8年3月	
	中島 弘光	平成7年4月～	
	齋藤 住郎	平成8年4月～	
常務理事	一木 邦彦	平成7年4月～平成8年3月	
	齋藤 紀彦	平成9年4月～	
事務局 長	齋藤 紀彦	平成7年4月～平成8年3月	
	西村 敏一	平成9年4月～	
埋蔵文化財部長	安藏 幸重	平成5年4月～平成8年3月	
	沼田 文夫	平成8年4月～	
埋蔵文化財部長代理	河野 佑司	平成6年4月～	
企画管理課	課 長	水創 敏大	
	課長代理	河崎 孝典	
	主任調査員	根本 達夫	平成7年4月～
		清水 薫	平成9年4月～(平成8年4月～平成9年3月係長)
		海老澤 稔	平成6年4月～平成8年3月
小高五十二	平成8年4月～		
経理課	課 長	小幡 弘明	
	主任調査員	鈴木 三郎	
		田所多佳男	
	課長代理	大高 春夫	
	主任	小池 孝	
		宮本 勉	
		軍司 浩作	
小西 孝典			
調査第一課	課長(部長兼務)	安藏 幸重	
	調査第二班長	沼田 文夫	
		萩野谷 悟	
	主任調査員	長岡 正雄	
		江幡 良夫	
		宮崎 修士	
	副主任調査員	飯島 一生	
整理課	課 長	小泉 光正	
	主任調査員	飯島 一生	

- 3 本書に使用した記号等については、凡例を参照されたい。
- 4 本書の作成にあたり、炭化材の同定分析は、バリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
- 5 発掘調査及び出土遺物の整理に際して御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。
- 6 遺跡の概略

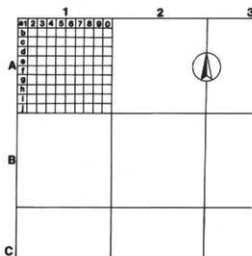
ふりがな	きたかんとうじどうしゃどう (ともべ〜みと) けんせつじぎょうちないまいぞうふんかざいちようさほうこくしょ						
書名	北関東自動車道(友部〜水戸)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書						
副書名	矢倉遺跡・後口原遺跡						
巻次	I						
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告						
シリーズ番号	第135集						
著者名	飯島 生						
編集機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL029-225-6587						
発行機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL029-225-6587						
発行年月日	1998(平成10)年3月20日						
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
矢倉遺跡	茨城県東茨城郡茨城町大字前田字志本松1.223番地ほか	08302-109	36° 28' 16"	140° 20' 40"	19951001 ～ 19960331	9.430㎡	北関東自動車道(友部〜水戸)建設事業に伴う事前調査
後口原遺跡	茨城県東茨城郡茨城町大字野曾字北山1.608番地の2ほか	08302-	36° 28' 16"	140° 20' 40"	19951101 ～ 19960331	6.476㎡	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
矢倉遺跡	生活跡	縄文時代	陥し穴1基		縄文土器片		標高27〜29m。
	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡31軒 土坑2基		弥生土器(竇高坏) 土製品(土玉・勾玉)		弥生時代後期の集落後。土製品、鉄器等の出土もみられる。
	生活跡	不明	土坑11基、溝8条				
後口原遺跡	生活跡	縄文時代	陥し穴1基				
	散布地	奈良平安時代	溝6条土坑49基		須恵器(坏・甕) 土師器(甕)		標高24〜26m。

凡 例

- 1 遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし、矢倉遺跡は $X = +34,720\text{m}$ 、 $Y = +53,640\text{m}$ の交点を、後口原遺跡は $X = +33,960\text{m}$ 、 $Y = +49,000\text{m}$ の交点をそれぞれ基準点とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C・・・、西から東へ1、2、3・・・とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa、b、c・・・j、西から東へ1、2、3・・・oとし、位置を表示する場合は、大調査区の名称を冠し、「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。



第1図 調査区呼称方法概念図

- 2 遺構、遺物及び土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 住居跡-S I 土坑-S K 溝-S D 埋葬施設-M

遺物 土器・陶器-P 土製品-D P 石製品-Q 金属製品・古銭-M 拓本土器-T P

土層 攪乱-K

- 3 遺構・遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。



- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

- 5 遺構・遺物実測図の作成方法及び掲載方法については、次のとおりである。

- (1) 遺跡の全体図は矢倉遺跡、後口原遺跡ともに200分の1、住居跡や土坑は60分の1に縮尺し掲載した。
- (2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては、個々に $S = 1/\bigcirc$ と表示した。
- (3) 「主軸方向」は、炉を通る軸線を主軸あるいは長径方向を主軸とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 $N-10^\circ-E$)。なお、[] は推定値である。
- (4) 土器の計測値は、A-口径 B-器高 C-底径 D-高台径 E-高台高 F-つまみ径 G-つまみ高 H-頸部最小径 I-胴部最大径とし、単位はcmである。現存値は()で、推定値は[]を付して示した。なお、本文中における広口壺の器高の分類については、(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社「武田理 鈴木素行 1994」を参考資料とし、次のように表示した。
大形…器高が明らかに50cm以上 中形…23cm以上50cm未満 小形…23cm未満

- (5) 遺物観察表の備考の欄は、土器の残存率、実測（P）番号、出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。
- 6 遺構番号については、調査の過程において遺構の種類ごとに調査順に付したが、整理の段階で遺構でないと判断したものは欠番とした。

目 次

序	
例言	
凡例	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 矢倉遺跡	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	9
1 堅穴住居跡	9
2 土坑	101
3 溝	105
4 遺構外出土遺物	110
第4節 まとめ	115
第4章 後口原遺跡	123
第1節 遺跡の概要	123
第2節 基本層序	123
第3節 遺構と遺物	127
1 土坑	127
2 溝	136
3 埋葬施設	138
4 遺構外出土遺物	145
第4節 まとめ	148
附 章 矢倉遺跡出土炭化材樹種同定分析結果	149

……パリノ・サーヴェイ株式会社……

插图目次

第 1 图	调查呼称方法概念图	第 26 图	第 12 号住居跡出土遺物	
第 2 图	周辺遺跡分布图	实测·拓影图	36	
第 3 图	欠倉遺跡地区設定	第 27 图	第 13 号住居跡実測图	39
第 4 图	欠倉遺跡基本土層图	第 28 图	第 13 号住居跡出土遺物	
第 5 图	第 1 号住居跡実測图	实测·拓影(1)	40	
第 6 图	第 1 号住居跡出土遺物	第 29 图	第 13 号住居跡出土遺物実測图(2)	41
实测·拓影图	11	第 30 图	第 14 号住居跡出土遺物実測图(1)	42
第 7 图	第 2 号住居跡実測图	第 31 图	第 14 号住居跡実測图	43
第 8 图	第 2 号住居跡出土遺物	第 32 图	第 14 号住居跡出土遺物	
实测·拓影图	14	实测·拓影图(2)	44	
第 9 图	第 3、6 号住居跡実測图	第 33 图	第 15 号住居跡実測图	46
第 10 图	第 3 号住居跡出土遺物	第 34 图	第 15 号住居跡出土遺物	
实测·拓影图	17	实测·拓影图	47	
第 11 图	第 4 号住居跡実測图	第 35 图	第 16 号住居跡実測图	49
第 12 图	第 4 号住居跡出土遺物	第 36 图	第 16 号住居跡出土遺物	
实测·拓影图	19	实测·拓影图(1)	50	
第 13 图	第 5 号住居跡実測图	第 37 图	第 16 号住居跡出土遺物実測图(2)	51
第 14 图	第 6 号住居跡出土遺物	第 38 图	第 17 号住居跡実測图	53
实测·拓影图	21	第 39 图	第 17 号住居跡出土遺物実測图(1)	54
第 15 图	第 7 号住居跡実測图	第 40 图	第 17 号住居跡出土遺物	
第 16 图	第 8 号住居跡実測图	实测·拓影图(2)	55	
第 17 图	第 8 号住居跡出土遺物	第 41 图	第 18 号住居跡実測图	57
实测·拓影图	24	第 42 图	第 18 号住居跡出土遺物	
第 18 图	第 9 号住居跡実測图	实测·拓影图	58	
第 19 图	第 9 号住居跡出土遺物	第 43 图	第 19 号住居跡実測图(1)	60
实测·拓影图(1)	27	第 44 图	第 19 号住居跡実測图(2)	61
第 20 图	第 9 号住居跡出土遺物	第 45 图	第 19 号住居跡出土遺物実測图(1)	62
实测·拓影图(2)	28	第 46 图	第 19 号住居跡出土遺物	
第 21 图	第 10 号住居跡実測图	实测·拓影图(2)	63	
第 22 图	第 11 号住居跡、出土遺物実測图	第 47 图	第 19 号住居跡出土遺物	
第 23 图	第 12 号住居跡実測图	实测·拓影图(3)	64	
第 24 图	第 12 号住居跡出土遺物実測图(1)	第 48 图	第 19 号住居跡出土遺物	
第 25 图	第 12 号住居跡出土遺物	实测·拓影图(4)	65	
实测·拓影图(2)	35	第 49 图	第 20 号住居跡出土遺物実測图	68

第 50 図	第 20・21 号住居跡実測図	69	第 76 図	第 2 号土坑・出土遺物実測図	101
第 51 図	第 21 号住居跡出土遺物 実測・拓影図	70	第 77 図	第 5 号土坑・出土遺物実測図	102
第 52 図	第 22 号住居跡出土遺物 実測図(1)	71	第 78 図	第 1・3・4・6・7・8・9・10 号 土坑実測図	104
第 53 図	第 22 号住居跡実測図	72	第 79 図	第 11・12・13・14 号土坑実測図	105
第 54 図	第 22 号住居跡出土遺物 実測・拓影図(2)	73	第 80 図	第 1・2・3・4・5・6・ 7・8・9・10 号溝土層実測図	108
第 55 図	第 23 号住居跡実測図	75	第 81 図	第 2・3・5・6 号溝 出土遺物実測図	109
第 56 図	第 23 号住居跡出土遺物 実測・拓影図	76	第 82 図	遺構外出土遺物実測・拓影図(1)	111
第 57 図	第 24 号住居跡実測図	78	第 83 図	遺構外出土遺物実測・拓影図(2)	112
第 58 図	第 24 号住居跡出土遺物実測図(1)	79	第 84 図	遺構外出土遺物実測・拓影図(3)	113
第 59 図	第 24 号住居跡出土遺物 実測・拓影図(2)	80	第 85 図	第 3・12・13 号住居跡遺構図	115
第 60 図	第 24 号住居跡出土遺物 実測・拓影図(3)	81	第 86 図	炉跡実測図	116
第 61 図	第 24 号住居跡出土遺物実測図(4)	82	第 87 図	土台式土器にみられる 底部文様構成	116
第 62 図	第 25 号住居跡実測図	85	第 88 図	欠倉・団子内・髭釜遺跡出土遺物 実測図	117
第 63 図	第 26 号住居跡実測図	85	第 89 図	第 19・24 号住居跡出土遺物実測図	119
第 64 図	第 26 号住居跡出土遺物 実測・拓影図	86	第 90 図	器高による壺形土器の分布	120
第 65 図	第 27 号住居跡実測図	88	第 91 図	胴部最大径による壺形土器の分布	120
第 66 図	第 27 号住居跡出土遺物 実測・拓影図(1)	89	第 92 図	後口原遺跡基本土層図	123
第 67 図	第 27 号住居跡出土遺物 実測・拓影図(2)	90	第 93 図	後口原遺跡地区設定図	124
第 68 図	第 28 号住居跡実測図	91	第 94 図	後口原遺跡全体図	125・126
第 69 図	第 28 号住居跡出土遺物 実測・拓影図	92	第 95 図	第 1・2・3・4・5・6・ 7・9・10・11・12 号土坑実測図	129
第 70 図	第 29 号住居跡実測図	94	第 96 図	第 13・16・17・20・21・22・23・ 24・25・26・27 号土坑実測図	130
第 71 図	第 29 号住居跡出土遺物 実測・拓影図	95	第 97 図	第 28・29・30・31・32・33・34・ 35・38 号土坑実測図	131
第 72 図	第 30 号住居跡実測図	96	第 98 図	第 36・37・39・40・41・42・43・ 44・45・46・47 号土坑実測図	132
第 73 図	第 30 号住居跡出土遺物実測図	96	第 99 図	第 48・49・50・51・52・53・54 号 土坑実測図	133
第 74 図	第 31 号住居跡実測図	98	第 100 図	第 1 号埋葬施設実測図	136
第 75 図	第 31 号住居跡出土遺物 実測・拓影図	99	第 101 図	第 1 号埋葬施設出土遺物実測図	136
			第 102 図	第 2 号埋葬施設実測図	137
			第 103 図	第 2 号埋葬施設出土遺物実測図	138

第104図	第1号溝Ⅰ・Ⅱ区実測図……………139・140
第105図	第1号溝Ⅰ・Ⅱ区出土遺物実測図 ……141
第106図	第4号溝出土遺物実測図 ……143
第107図	第5号溝出土遺物実測図 ……144
第108図	第2・3・4・5号溝上層 エレベーション実測図 ……145

第109図	旧石器時代調査エリア内遺物 出土状況図 ……145
第110図	旧石器時代調査エリア内 出土遺物実測図 ……146
第111図	遺構外出土遺物実測・拓影図 ……147

表 目 次

表 1	矢倉・後口原遺跡周辺遺跡一覧表 ……6	表 3	矢倉遺跡土坑一覧表 ……103・104
表 2	矢倉遺跡住居跡一覧表 ……100	表 4	矢後口原遺跡土坑一覧表 ……127・128

写 真 図 版 目 次

P L 1	矢倉遺跡遠景		
P L 2	後口原遺跡遠景		
P L 3	矢倉遺跡遺構確認状況(1)、矢倉遺跡遺構確認状況(2)、第1号住居跡、第1号住居跡遺物出土状況(1)、第1号住居跡遺物出土状況(2)、第2号住居跡、第3号住居跡、第8号住居跡		
P L 4	第8号住居跡遺物出土状況、第9号住居跡、第9号住居跡遺物出土状況(1)、第9号住居跡遺物出土状況(2)、第12号住居跡、第12号住居跡遺物出土状況(1)、第12号住居跡遺物出土状況(2)、第12号住居跡遺物出土状況(3)		
P L 5	第12号住居跡遺物出土状況(4)、第12号住居跡遺物出土状況(5)、第12号住居跡遺物出土状況(6)、第12号住居跡遺物出土状況(7)、第12号住居跡炉、第12号住居跡炉上層、第13号住居跡遺物出土状況(1)、第13号住居跡遺物出土状況(2)		
P L 6	第14号住居跡遺物出土状況、第15号住居跡、第15号住居跡遺物出土状況、第16号住居跡、第16号住居跡遺物出土状況(1)、第16号住居跡遺物出土状況(2)、第16号住居跡炉、第17号住居跡		
P L 7	第17号住居跡遺物出土状況、第17号住居跡		
			炉内遺物出土状況、第18号住居跡、第18号住居跡遺物出土状況(1)、第18号住居跡遺物出土状況(2)、第18号住居跡上層、第19号住居跡
P L 8	第19号住居跡遺物出土状況(1)、第19号住居跡遺物出土状況(2)、第19号住居跡遺物出土状況(3)、第20・21号住居跡、第20・21号住居跡遺物出土状況、第22号住居跡、第22号住居跡遺物出土状況(1)		
P L 9	第22号住居跡遺物出土状況(2)、第22号住居跡遺物出土状況(3)、第15・16・17号住居跡、第23号住居跡、第23号住居跡遺物出土状況(1)、第23号住居跡遺物出土状況(2)、第23号住居跡遺物出土状況(3)、第24号住居跡遺物出土状況(1)		
P L 10	第24号住居跡、第24号住居跡遺物出土状況(2)、第24号住居跡遺物出土状況(3)、第24号住居跡遺物出土状況(4)、第24号住居跡遺物出土状況(5)、第24号住居跡炉上層、第26号住居跡		
P L 11	第26号住居跡遺物出土状況(1)、第26号住居跡遺物出土状況(2)、第27号住居跡、第27号住居跡遺物出土状況、第28号住居跡、第28号住居跡遺物出土状況、第28号住居跡炉		

- P L 12 第29号住居跡, 第29号住居跡遺物出土状況(1), 第29号住居跡遺物出土状況(2), 第29号住居跡遺物出土状況(3), 第30号住居跡, 第30号住居跡遺物出土状況, 第31号住居跡, 第31号住居跡遺物出土状況
- P L 13 第2号土坑, 第5号土坑, 第5号土坑土層, 第7号土坑土層, 第4号溝(1), 第4号溝(2), 第5号溝, 第5号溝土層
- P L 14 第1・2・3・4・6・8号住居跡出土遺物
- P L 15 第8・9・12号住居跡出土遺物
- P L 16 第12号住居跡出土遺物
- P L 17 第13・14・15号住居跡出土遺物
- P L 18 第16・17号住居跡出土遺物
- P L 19 第17・18・19号住居跡出土遺物
- P L 20 第19号住居跡出土遺物
- P L 21 第19号住居跡出土遺物
- P L 22 第22・23号住居跡出土遺物
- P L 23 第24号住居跡出土遺物
- P L 24 第24号住居跡出土遺物
- P L 25 第24・26・27号住居跡出土遺物
- P L 26 第27・28・29号住居跡出土遺物
- P L 27 第30・31号住居跡, 第2・5号土坑, 第2・3号溝出土遺物
- P L 28 遺構外出土遺物, 出上土製品(1)
- P L 29 出上土製品(2), 出上石製品(1)
- P L 30 出上石製品(2)
- P L 31 出上石製品(3), 出上金屬製品
- P L 32 第19・21号住居跡出土遺物
- P L 33 出上土器片(1)
- P L 34 出上土器片(2)
- P L 35 出上土器片(3)
- P L 36 完掘全景, 第20号土坑, 第31・32・33・34号土坑, 第36・37・44号土坑, 第1号埋葬施設遺物出土状況(1), 第1号埋葬施設遺物出土状況(2), 第2号埋葬施設遺物出土状況(1), 第2号埋葬施設遺物出土状況(2)
- P L 37 第1号溝(1), 第1号溝(2), 第1号溝遺物出土状況, 第2号溝, 第3・5号溝, 第4号溝, 第4号溝遺物出土状況, 旧石器時代調査区内遺物出土状況
- P L 38 第1・2号埋葬施設, 第1号溝出土遺物
- P L 39 第1・4・5号溝, 遺構外出土遺物, 旧石器時代調査区内出土石製品(1)
- P L 40 旧石器時代調査区内出土石製品(2), 遺構外出土土器片

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

茨城県中部と近隣都県を結ぶ主要幹線道路は、現在、国道6号線と常磐自動車道である。建設省と日本道路公団は、近年の物流の増加や常陸那珂港開発に伴い、北関東3県を横断し均衡ある高速交通ネットワークを形成すべく、北関東自動車道の工事を進めている。

工事に先立ち、日本道路公団は、平成6年2月10日に茨城県教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会した。茨城県教育委員会は、平成6年4月に現地踏査を実施し、平成7年3月3日に日本道路公団あてに北関東自動車道建設工事予定地内の茨城町大字前出地区内に矢倉遺跡(9,430m²)が存在している旨回答した。平成7年3月9日から日本道路公団東京第一建設局と茨城県教育委員会は、文化財保護の立場から北関東自動車道建設工事予定地区内における埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。

また、茨城県教育委員会は、平成7年5月に野曾地区においても試掘を実施したところ、同地区内に後口原遺跡(6,476m²)が存在している旨回答した。その結果、矢倉遺跡・後口原遺跡を現状保存することが困難であると判断し、記録保存とする旨を日本道路公団に回答し、調査機関として財団法人茨城県教育財団が紹介された。茨城県教育財団は、日本道路公団東京第一建設局と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び、平成7年10月1日から矢倉遺跡、11月1日から後口原遺跡の調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

矢倉遺跡、及び後口原遺跡の発掘調査を、平成7年10月1日から平成8年3月31日までの6か月にわたって実施した。以下、調査経過について、その概要を月ごとに記述する。

矢倉遺跡(9,430m²)

10月 発掘調査を開始するため、現場事務所や倉庫の設置、調査器材の搬入等の諸準備を行った。9日から調査補助員を雇用し、諸施設の整備、遺跡内の清掃作業を開始した。13日には、発掘調査の円滑な推進と作業の安全を顧みて撤入れ式を挙行し、下草刈り・グリッド試掘を開始した。

試掘調査の結果、調査区西部を中心に弥生土器片及び石器などの遺物が出土した。同時に重機による表土除去を調査区南部から開始し、遺構確認作業を行った。

11月 9日から、方眼杭打ち測量を実施し、13日から遺構調査を開始した。

下旬には、重機による表土除去及び遺構確認作業を終了した。その結果、弥生時代後期の集落跡の存在が確認され、竪穴住居跡31軒、土坑20基及び溝7条を確認した。

12月 継続して調査区南西部の竪穴住居跡、土坑の遺構調査を行った。南部は、かなりの部分が耕作により擾乱されていた。

1月 調査区中央部から北部にかけて、竪穴住居跡や土坑及び溝の遺構調査を行った。北部は、遺構が確認しにくいので、トレンチを入れながら調査を進めた。

2月 調査区の東部の遺構調査を実施した。10日には、現地説明会を実施し、遺構、遺物を公開した。29日には、完備全景の航空写真撮影を実施した。

3月 旧石器時代の調査及び補足調査を実施した。14日から撤収作業を始め、安全対策を含め31日には、一切

の現地調査を終了した。

後口原遺跡 (6,476m²)

- 11月 発掘調査を開始するために、現場事務所や倉庫の設置、調査器材の搬入等の諸準備を行った。13日から調査補助員を雇用し、諸施設の整備、遺跡内の伐倒作業・グリッド試掘を開始した。
20日には、発掘調査の円滑な推進と作業の安全を願って鎮入れ式を挙行了た。
- 12月 試掘調査の結果、調査区内に土坑、溝等の存在を確認したため13日から重機による表土除去と、遺構確認作業を行った。14日には、方眼杭打ち測量を実施した。
- 1月 10日には、重機による表土除去を終了し、遺構調査を開始した。
- 2月 継続して土坑や溝等の遺構調査を行いながら、旧石器調査区のエリアを設定し調査を行った。
下旬には、遺構調査を概ね終了し、29日には、完掘全景の航空写真撮影を実施した。
- 3月 補足調査を実施し、14日から撤収作業を始め、安全対策を含め31日には、一切の現地調査を終了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

矢倉遺跡は、東茨城郡茨城町大字前田字杓木松1,223番地ほかに、後口原遺跡は、東茨城郡茨城町大字野曾字北山1,608番地の2ほかに、それぞれ所在している。

茨城町は、茨城県中央部よりやや東に位置し、東部は潤沼を隔てて東茨城郡大洗町、鹿嶋郡旭村に、南部は東茨城郡美野里町、小川町、鹿嶋郡鉦田町に、西部は東茨城郡内原町、西茨城郡友部町、同官問町に、北部は水戸市に接している。町域は、東西約17km、南北約14km、面積約121km²で、人口は36,021人、世帯数は10,088戸（平成9年3月現在）である。町の中央を南北に国道6号が通じ、それと並行するように常磐自動車道が西に隣接する友部町を通過している。北部では、東西に通じる北関東自動車道の建設が進められている。

茨城町の地形は、町のほぼ中央部を東流する潤沼川の氾濫原と、その東に展開する潤沼（面積約9.35km²）の低湿地によって、台地が南北に二分されている。北部の台地は、標高25～30mの東茨城北部台地の先端部にあたり、北西から潤沼前川を含む大小の支谷が潤沼に南面して開口している。南部に発達する台地は、東から大谷川、寛政川が潤沼に流入し、その間に大小無数の支谷が台地深くまで侵入し、北部台地に比べて起伏も多く一層複雑な地勢を形成している。これらの河川流域の沖積低地は、水田として利用され、台地は畑地・樹園地として利用されている。

町の基幹産業である農業は、稲作に施設園芸・果樹栽培・養豚・酪農などを取り入れた複合経営が行われている。県都水戸市に接する地の利から、県立の上業・食品等の各試験場や警察・消防などの各学校施設が設置され、県央の中核田園都市としての役割を果たしている。

地質をみると、台地を形成している最も古い地層は新生代、第三紀の地層で、岩質は泥岩で水戸層と呼ばれている。水戸層の上に第四紀の地層が不整合に堆積している。粘土・砂からなる見和層、礫からなる上市層、灰褐色の常態粘土層、関東ローム層の順に堆積しており、これらの地層はいずれもほぼ水平層である。

矢倉遺跡は、茨城町の北西部の前田地区にあり、西部を南流する赤穂川と南部を東流する潤沼前川とに挟まれた舌状台地の東側丘陵部に位置している。標高は、27～29mであり、現況は畑地・荒地である。南部の水田との比高は、12～14mである。

後口原遺跡は、茨城町の北西部の駒渡地区にあり、東流する潤沼川左岸の標高24～26mの河岸段丘上に位置し、遺跡の南側は潤沼川と沖積低地が広がり、低地は水田として利用されている。現況は畑地・果林であり、水田との比高は、12～14mである。

参考文献

- ・蜂須紀夫 「茨城県 地学ガイド」 1986年11月
- ・舟川書店 「日本地名大辞典 8 茨城県」 1983年3月
- ・茨城町史編さん委員会 「茨城町権現峯遺跡」 1988年3月
- ・茨城町教育委員会 「小幡北山埴輪製作遺跡」 1989年2月
- ・茨城町史編さん委員会 「茨城町上ノ山古墳」 1994年3月
- ・茨城町史編さん委員会 「茨城町史 通史編」 1995年2月
- ・茨城町史編さん委員会 「茨城町史 地誌編」 1995年2月

第2節 歴史的環境

茨城町には、縄文時代から中世にかけての遺跡が数多く存在している。当町周辺は、酒沼をはじめ、酒沼川、酒沼前川など水運に恵まれ、古代から人々が生活を営む場としては絶好の舞台となってきた。ここでは、久倉・後口原遺跡周辺の主な遺跡について時代を追って述べることにする。

旧石器時代の遺跡は、東山遺跡(7)と向地南遺跡で、打製石斧や槍先尖頭器が出土している。

縄文時代の遺跡は、町内全域に113か所みられる。早期の遺跡として、酒沼南岸の台地上に沈線土器が出土している中落遺跡がある。前期になると遺跡数が増加し、酒沼前川流域には、大戸下郷遺跡(8)、宮後遺跡(9)、シッペイ沢遺跡(10)、東畑遺跡(11)、東山遺跡が、寛政川流域には、神谷遺跡(12)、神谷東遺跡(13)、西台遺跡(14)が、酒沼周辺は最も多く、権現峯遺跡や前野遺跡をはじめ10数遺跡が存在している。酒沼川流域には、奥谷遺跡(16)をはじめ、南小瀬遺跡(3)、赤坂南坪遺跡(17)、台畑遺跡(18)、権現堂遺跡(4)などが存在している。また、縄文海進にともなって権現峯遺跡、シッペイ沢遺跡、越安貝塚(19)など8か所に貝塚が形成されている。中期になると、さらに遺構は増加し天古崎遺跡(20)や大道西遺跡(21)など、町内全域にみられるようになる。後期に入ると、遺跡数は減少し始める。この頃、小堤貝塚(22)が形成される。晩期になるとさらに遺跡数は減少し、下土師遺跡(23)、小堤貝塚、神谷遺跡など10か所を数えるほどである。晩期の遺跡は、ほとんどが後期から続く遺跡である。

弥生時代の遺跡は、現在41か所確認されており、中期後半以降である。中期後半のものと思われる土器片が神谷東遺跡、柴崎遺跡古墳(中1号)、西台遺跡などで採集されている。また、後期前半の遺物としては、東中根式並行の土器片が人瀬遺跡(24)から採集されている。後期後半には、標式土器となった長岡式土器が、長岡遺跡(25)と昭和61年度に当教育財団が発掘調査した奥谷遺跡、小鶴遺跡(26)の3遺跡から出土している。

今回調査した久倉遺跡は、これらの時期に続く十王台式期(後期後半)の集落であり、他に大畑遺跡、大戸下郷遺跡、台畑遺跡などからも、十王台式土器片が出土している。また、町内(近藤、上飯沼地区)から弥生時代を代表する遺物として有角石斧も2点出土している。

古墳時代になると遺跡数が増加する。奥谷遺跡からは、古墳時代前期の豪族居館跡の溝や住居跡が確認され、酒沼周辺の神谷遺跡、神谷東遺跡、西台遺跡、権現峯遺跡などからも、前期の土師器や住居跡が確認されている。昭和60年に扇塚の調査を行い、茨城町地方では最も古い時期に位置づけられた前方後方墳(4世紀末から5世紀初頭)である宝塚古墳(27)をはじめ、中期から後期にかけての古墳が61基ほど確認されており、茨城町で唯一の前方後方墳である上ノ山古墳(28)からは、南へ4kmほど離れた位置にある小幡北山埴輪製作遺跡(30)で造られたものと思われる埴輪(6世紀後半頃)が出土している。

律令制下の奈良・平安時代の茨城町は、那賀郡八部郷、茨城郡烏田・安良・白川郷、鹿高郡宮前郷に所属していた。この時期の遺跡は、町内全域に確認されている。奥谷遺跡からは、百数十点の墨書土器のほか片面硯や刀子が出土している。特に、墨書の「曹司」は、宮中・官衙などの庁舎・宿直所・局・部屋などの意味があり、当時の奥谷遺跡が官衙的あるいは公共的な施設を含む集落であったことを示している。而山遺跡(31)からは、「土師神主」と書かれた墨書土器が、宮後遺跡からは、片面硯や磁片器がそれぞれ出土している。

中世の遺跡は、主に城館跡である。現存する町内の城館の中では、酒沼南岸の台地上に位置する宮ヶ崎城跡、小幡城跡(32)などがある。奥谷遺跡からは、地下式塚、土坑、井戸、堀が確認され、土師質土器や陶器が出土している。前田地区の万東山からは、13世紀前半と思われる「菅白磁蓮牡丹文梅瓶」が出土している。

近世になると、町の中心部を南北に走る水戸街道に沿って、長岡、小幡は宿駅として発展した。海老沢、網

掛は水上交通の要所としても栄え、水戸藩をはじめ、仙台藩など奥州諸藩と江戸を結ぶ輸送経路の中継として極めて重要な役割を果たしていた。

※ 文中の〈 〉内の番号は、表1、第1図の該当番号と同じである。

註

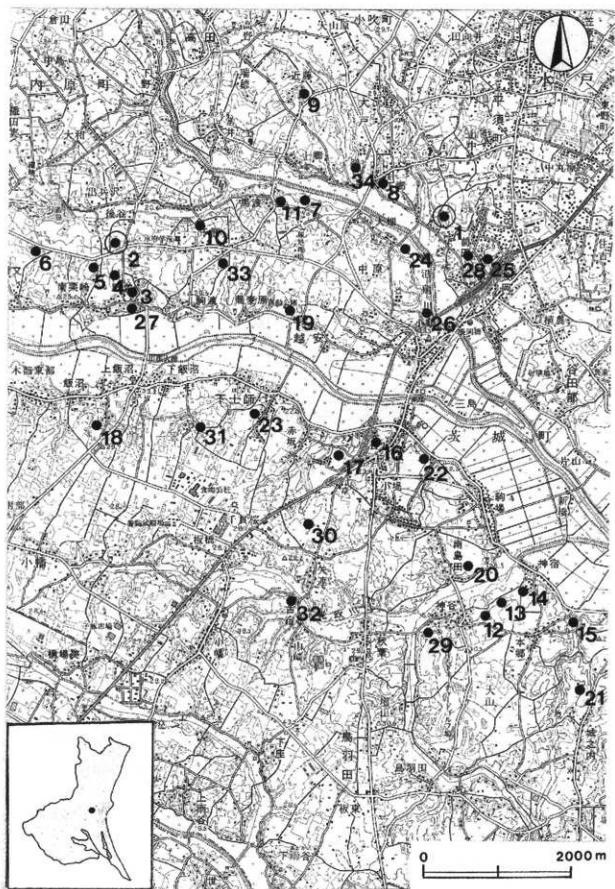
- (1), (5), (6), (9) 茨城町史編さん委員会 「茨城町史 通史編」 1995年2月
- (2) 茨城町史編さん委員会 「茨城町権現峯道跡」 1988年3月
- (3) 茨城町教育委員会 「小堤貝塚」 1986年3月
- (4) 茨城県教育財団 「一般国道6号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書 奥谷遺跡 小鶴遺跡」
『茨城県教育財団文化財調査報告 第50集』 1989年3月
- (7) 茨城町史編さん委員会 「茨城町上ノ山古墳」 1994年3月
- (8) 茨城町教育委員会 「小幡北山埴輪製作道跡」 1989年2月

参考文献

- ・茨城県 「茨城県史料 考古資料編 先上器・縄文時代」 1979年3月
- ・茨城県 「茨城県史料 考古資料編 弥生時代」 1991年3月
- ・茨城県 「茨城県史料 考古資料編 古墳時代」 1991年3月
- ・茨城県 「茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代」 1995年3月
- ・崙書房 「新編常陸国誌」 1997年
- ・茨城県教育委員会 「茨城県遺跡地図」 1990年3月

表1 矢倉・後口原遺跡周辺遺跡一覧表

番 号	遺 跡 名	県 遺 跡 番 号	時 代					番 号	遺 跡 名	県 遺 跡 番 号	時 代					
			旧	縄 文	弥 生	古 墳	奈 平				中 近	旧	縄 文	弥 生	古 墳	奈 平
①	矢倉遺跡	4324	○	○				18	台畑遺跡	197		○				
②	後口原遺跡		○	○			○	19	越安貝塚	4283	○					
3	南小割遺跡			○		○	○	○	20	天古崎遺跡	4287	○		○		
4	権現堂遺跡	195		○		○	○	○	21	大道西遺跡	4286	○		○		
5	親塚古墳	181					○	○	22	小堤貝塚	4284	○	○	○		
6	後原遺跡	225		○				○	23	下土師遺跡	191		○			
7	東山遺跡	4307	○	○	○	○	○	○	24	大畑遺跡	4295	○	○	○	○	○
8	大戸下郷遺跡	4294		○	○	○			25	長岡遺跡	227			○	○	
9	宮後遺跡	4308		○	○	○	○		26	小鶴遺跡	4349			○		
10	シッペイ沢遺跡			○					27	宝塚古墳	179				○	
11	東畑遺跡	4306		○	○	○	○		28	上ノ山古墳	4316				○	
12	神谷遺跡	4288		○	○	○			29	神谷古墳群	185				○	
13	神谷東遺跡	4339		○	○	○	○		30	小幡北山埴輪製作遺跡	4297				○	
14	西台遺跡	4311		○	○	○	○		31	面山遺跡	220				○	
15	権現峯遺跡	4312		○		○	○		32	小幡城跡	4127					○
16	奥谷遺跡	4338		○	○	○	○	○	33	大作遺跡			○		○	
17	赤坂南坪遺跡	192		○		○			34	羽黒山古墳群	4314				○	



第2図 周辺遺跡分布図



第3图 尖倉遺跡地区設定図

第3章 矢倉遺跡

第1節 遺跡の概要

矢倉遺跡は、北を那珂川、南を潤沼川と潤沼に挟まれた東茨城北部台地の南部に位置する。遺跡は、西部を北から南へ流れる赤穂川、南部を西から東へ流れる潤沼前川を見下ろす舌状台地上の南斜面にあり、標高は28～29mに位置し、潤沼前川低地面との比高は22～23mである。現況は、畑地・荒地である。

調査区は、東西約120m、南北約80m、面積9,430m²である。南西へ500mの地点には、平成8年度に当財団が調査した大畑遺跡が所在している。

今回の調査により、竪穴式住居跡31軒(弥生時代後期25軒、時期不明6軒)、土坑14基及び溝8条を検出した。遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に65箱出土した。縄文土器片、弥生土器、土師器(甕)、土製品(紡錘車・土玉・勾玉)、石器(尖頭器・石鏃・磨石・蔽石)、鉄器などが出土している。

第2節 基本層序

調査区内(B3c区)にテストピットを掘り、基本土層の観察を行った(第4図)。

第1層は、30～40cmの厚さの耕作土層で、黒褐色をしている。

第2層は、32～36cmの厚さで、明褐色をしたソフトローム層である。

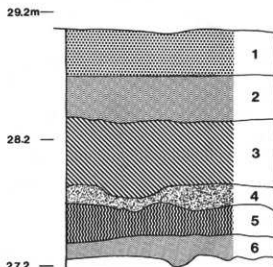
第3層は、50～60cmの厚さで、褐色をしたハードローム層である。

第4層は、8～40cmの厚さで、褐色の鹿沼バミス混じりのハードローム層である。

第5層は、20～30cmの厚さで、黄橙色をした鹿沼バミス層である。

第6層は、10～25cmの厚さで、鹿沼バミス少量と黒色粒子を微量含む灰褐色をした層である。

住居跡等の遺構は、第2層上面で確認した。



第4図 矢倉遺跡基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

今回の調査において、31軒(弥生時代後期後半25軒、時期不明6軒)の竪穴住居跡を検出した。時期不明とした6軒の住居跡も遺跡の性格(弥生時代以外の竪穴住居跡は確認されず、出土遺物も弥生土器がほとんどである)や住居跡の柱穴、茅跡等の検出状況を考えると弥生時代後期後半となる可能性がある。ここでは、耕作

による攪乱により遺存状態が良好でなかったことや、時期を推察できる遺物がなかったことで時期不明とした。
以下、確認された住居跡の特徴や主な遺物について記載する。

第1号住居跡（第5図）

位置 調査区の南西部，E2c1区。

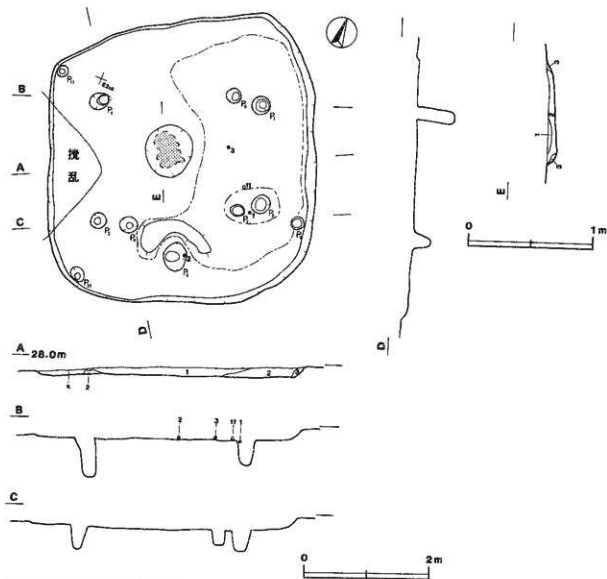
規模と平面形 長軸4.5m，短軸4.3mの隅丸方形をしている。

主軸方向 N-24°-W

壁 壁高は10～15cmで，外傾して立ち上がる。

床 平坦で，東部を中心に踏み締められた硬化面がある。

ピット 11か所（P₁～P₁₁）。P₁～P₄・P₈は直径25～30cmの円形で，深さ37～40cmである。P₅・P₆・P₇は長径25～30cm，短径18～25cmの楕円形で，深さ31～66cmである。P₁～P₁₁，P₅～P₈は柱穴と思われる。P₃は長径45cm，短径35cmの不整形円形で深さ52cmの出入り口施設に伴うものと思われる。P₉～P₁₁は壁際位置し直径20cm，深さ19～29cmで円形である。性格は不明である。



第5図 第1号住居跡実測図

炉 中央部から北寄りに付設され、平面形は、長径85cm、短径75cmの楕円形で、床面を10cmほど掘り窪めた地床炉である。炉床は、中央部が火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

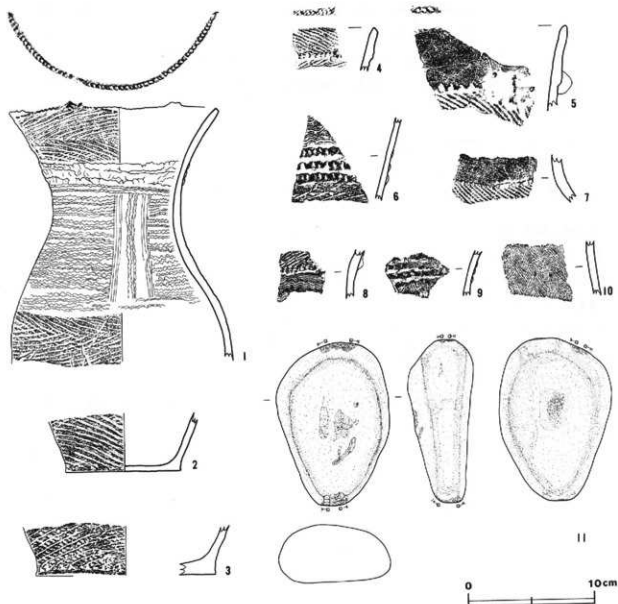
- 1 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、焼土小ブロック微量 3 灰褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
2 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子少量

覆土 3層からなる。焼土粒子・炭化粒子が微量に認められる。レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量 3 にぶい褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
2 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・焼土粒子少量

遺物 弥生土器細片が約430点出土しているが、ほとんどが胴部片で口縁部や底部は微量である。また、高坏脚部細片が1点出土している。第6図1は広口壺の口縁部から頸部で、南東部のP₁付近の床面直上から横位で、2の底部は出入口付近の床面直上から、3の大形壺の底部片はP₁付近の床面直上から出土している。11は礫石で、P₁北部の床面直上から出土している。



第6図 第1号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と思われる。

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第6図	大口甕	A 16.8	口縁～頸部、口唇部はへり状上縁による割みがあり突起が(4か所)付く。 I縁部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。I縁部と頸部の境は隆帯が3条並り軽い押圧がある。頸部は波状状上縁(4本)による縦区画により3条を単位に3分割され、2か所のスリット内は縦の波状文が見られる。区画内は波状文が施されている。頸部と胴部の境には波状文が彫る。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。	粘土、石灰、砂粒 白雲母、小礫 針状鉱物 褐色 普通	P1, P14, 50% 外面スチ付着 南東部床面
		B (20.1) II 10.2			
2	壺 弥生土器	B (4.6)	底部、胴部に附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。底部帯付板	長石、石灰、砂粒 白雲母、針状鉱物 褐色、普通	P3, P14, 10% 南部床面
		C 9.3			
3	大形甕 弥生土器	B (3.9)	底部片、胴部に附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。	長石、石灰、砂粒 スコリア、金雲母 明黄褐色、普通	P2, P14, 3% P内東部床面
		C 14.4			

第6図4～10は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。4・5は口縁部片で、I唇部とI口縁部下端は縄文が施されている。4は附加条一種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。5は口縁部無文で口縁部下端に瘤が貼られ、その下に附加条一種(附加2条)の縄文が施されている。6～10は頸部片で、6はI縁部に波状文、下に3条の隆帯があり、頸部には附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。8は複合口縁でI縁部附加条一種(附加2条)の縄文、下端に縄文による押圧、頸部は波状文が施されている。10は隆帯の下に綾杉文が施されている。

図版番号	器種	計測値				材質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第6図11	最石	12.9	9.0	5.3	715.3	砂岩	床面直上	Q1, P130

第2号住居跡(第7図)

位置 調査区の南西部、E2a,区。

規模と平面形 長軸4.9m、短軸(4.3)mで、住居跡の北部は調査区外であるため平面形は不明である。

主軸方向 N-42°-W

壁 壁高は5～20cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、中央部を中心に広い範囲が踏み締められており硬い。西部に、直径20cmほどの円形の焼土化した部分がある。

ピット 9か所(P₁～P₉)。P₁～P₂は長径48～50cm、短径40cmの楕円形で深さ65cmで支柱穴と思われる。

P₃は直径が30cmの円形で、深さ20cmの出入り口施設に伴うものと思われる。P₄は直径25cm、短径20cmの楕円形で深さ14cm、P₅・P₆は長径40cm、短径30～25cmの楕円形で深さ15cmである。P₇～P₉は壁際に位置し、直径が20cmの円形で、深さ20cmである。P₁～P₉の性格は不明である。

炉 中央部から、やや北寄りに位置すると考えられ、長径(110)cm、短径70cmの不正楕円形で、床面を10cmほど掘り窪めた地床炉である。か床は、中央部が火熱を受け赤変硬化している。か床下層のロームは、火熱を受け20cmほど赤変している。炉石は、炉の長軸に直交するよう北側に据えられており、上面が火熱を受け赤変している。

炉土層断面

- 1 灰褐色 ローム粒子・炭化物少量、炭化粒子微量、焼土粒子中量
 2 赤褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

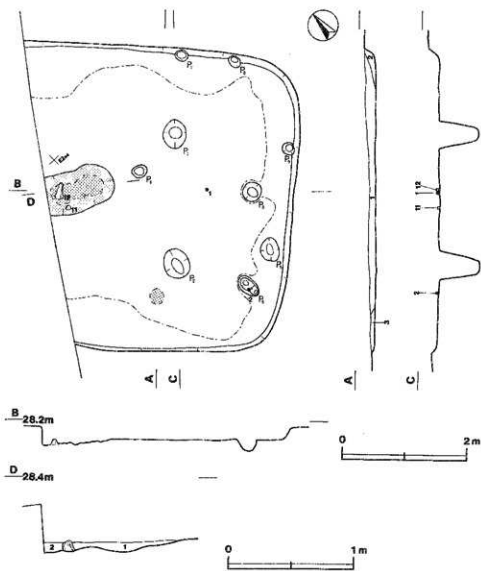
覆土 3層からなる。焼土粒子・炭化粒子を微量に含む。レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と考えられる。

土層断面

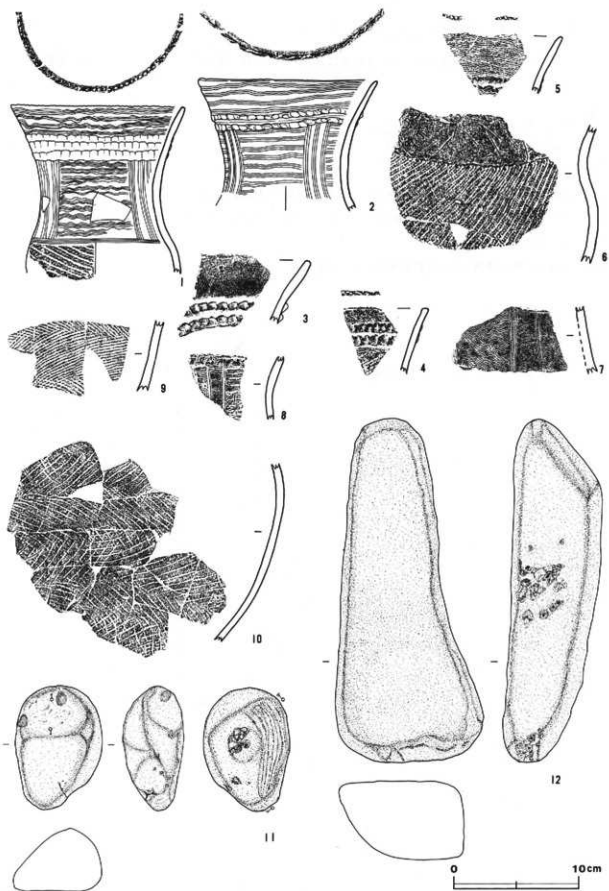
- 1 灰褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量、焼土粒子少量
 2 明褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量、焼土粒子少量
 3 濃い褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子微量

遺物 弥生土器細片約540点が出土しているが、ほとんどが割部片で口縁部や底部は微量である。また、高坏口縁部細片が1点出土している。第8図1・2は広口壺の口縁部から頸部で、1はP₃北部の床面直上からつぶれた状態で、2はP₁付近の床面直上から逆位で出土している。11の磨石は炉内から出土している。12は炉石である。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と思われる。



第7図 第2号住居跡実測図



第8图 第2号住居跡出土遺物実測・拓影図

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第8図 1	広口壺 弥生土器	A 14.0	口縁部~頸部。口唇部は縄文が施され、口縁部は菊歯状工具(4本)による波状文が高る。口縁部と頸部の境は隆帯が3条寄り軽い押圧がある。頸部は菊歯状工具による縦区画により3条を単位に4分割され、区画内は波状文が施されている。頸部と胴部の境は横走文が高る。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。	長石、石英、雲母 小礫、スコリア にふい赤褐色 普通	P4, P.L14, 20% 外周ス付着 二次焼成 P5北部床面
		B (13.4)			
		H 9.4			
2	広口壺 弥生土器	A 14.4	口唇部は、縄文が施され、口縁部は、菊歯状工具(3本)による波状文が高る。口縁部と頸部の境は隆帯が2条寄り押圧がある。頸部は菊歯状工具による縦区画により3条を単位に4分割され、区画内は波状文が施される。内面はいいいなナデ。	石英、金雲母 スコリア にふい黄褐色 良好	P5, P.L14, 10% P6付着床面
		B (10.5)			
		H 9.8			

第8図3~10は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。3~5は口縁部片で、3は口縁部が無文で下位に2条の隆帯がみられ、4・5は口唇部に縄文が施されている。5は口縁部に波状文が施され、下位に隆帯が貼付されている。6~8は頸部片で、6は上位無文、下位に附加条一種(附加2条)の縄文が施されている。7・8は縦区画内に波状文が施されている。9・10は胴部片で、9は附加条一種(附加2条)、10は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、ともに羽状構成をとっている。

図版番号	器種	計測値			石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
第8図11	磨石	9.9	7.0	5.0	406.0	流紋岩	炉裏土中 Q3, P.L30
12	炉石	26.4	12.0	6.4	3,076.2	流紋岩	炉内 Q4, P.L31

第3号住居跡(第9図)

位置 調査区の南部、E2a区。

規模と平面形 長軸3.6m、短軸2.9mの長方形である。

主軸方向 N-80°-E

壁 壁高は10cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、中央部を中心に硬化面がある。

ピット 4か所(P₁~P₄)。P₁は長径30cm、短径25~30cmの楕円形で深さ44cm、P₂は直径30cmの円形で深さ30cmである。P₃は長径30cm、短径25cmの楕円形で深さ34cm、P₄は長径30cm、短径25cmの楕円形で深さ21cmである。それぞれ柱穴と思われる。

炉 西寄りに位置し、長径90cm、短径60cmの楕円形で、床面を15cmほど掘り窪めた地床炉である。炉床は、中央部が火熱を受け赤変硬化している。

伊土層解説

- 1 灰褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 2 灰褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子中量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土小ブロック少量、炭化粒子微量、焼土粒子中量
- 4 にふい褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子少量

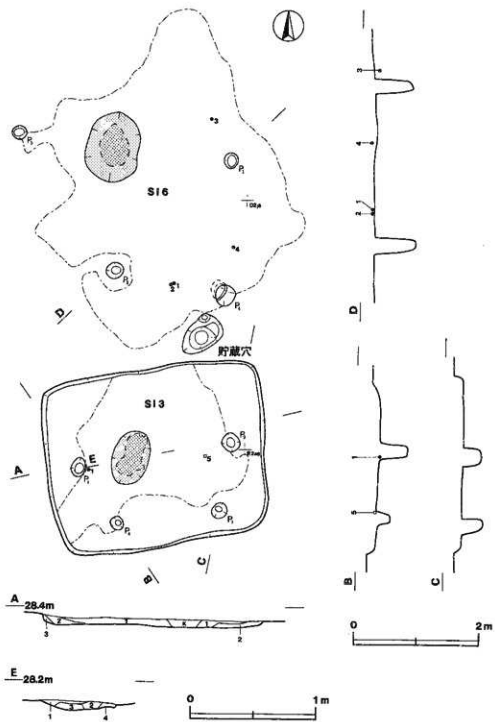
覆土 3層からなる。1層に攪乱が入る。レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と考えられる。

土層解説

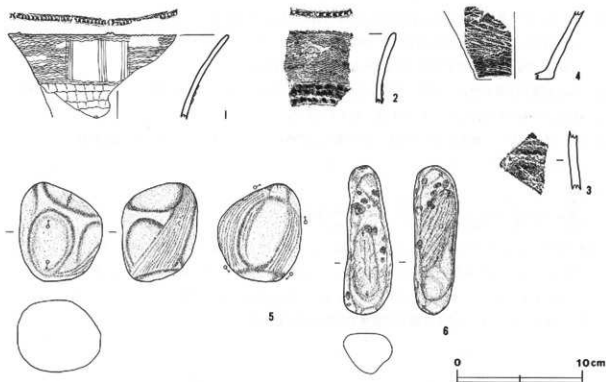
- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量

遺物 弥生土器細片約120点が出土しているが、ほとんどが胴部片で口縁部や底部は微量である。第10図1は広口壺の口縁部から頸部片で、P₁付近の床面直上から出土している。5・6は磨石で、5はP₂西側の床面直上から、6は覆土中から出土している。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と思われる。



第9図 第3・6号住居跡実測図



第10図 第3号住居跡出土遺物実測・拓影図

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第10図 1	広口壺 弥生土器	A [17.8] B (6.7)	口縁部~胴部片、口唇部はヘラ状工具による刻みがあり、(2か所)突起が付く。口縁部は彎曲状工具(4本)により3条を単位に縦区画され、上位と下位には波状文が走る。口縁部と胴部の境は隆帯が4条走り、縦い押正がある。	長石・石英・雲母 針状産物 褐色 普通	P7, P.L14, 10% P1付近床面

第10図2~4は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。2は口縁部片で口唇部は縄文が施され、口縁部には波状文、下位に低い隆帯が3条貼付されている。3は頸部片で波状文とその下位に下向きの連続文が施されている。4は底部片で附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第10図 5	磨石	7.9	6.8	6.1	462.2	カトシツエリス	床面直上	Q5, P.L30
6	磨石	11.9	3.5	3.5	224.4	流紋岩	覆土中	Q6, P.L30, 基部赤色顔料付着

第4号住居跡(第11図)

位置 調査区の南部, E2a区。

重複関係 第5号土坑の上に構築されている。

規模と平面形 長軸(4.9)m, 短軸[3.0]mで、住居の南部は調査区外であるため平面形は不明である。

主軸方向 N-33°-E

壁 壁高は10cmほどであるが、形状は確認できない。

床 凹凸があり、炉付近は第5号土坑上に位置するために、床面下の締まりがなく窪んでいる。

ピット 8か所 (P₁~P₈)。P₁は直径30cmの円形で深さ72cm, P₂は長径55cm, 短径30cmの楕円形で深さ65cm, P₃は長径60cm, 短径50cmの楕円形で深さ60cmで柱穴と思われる。P₄は直径30cmの円形で深さ30cm, P₅~P₈は直径15~25cmの円形で深さ25~35cmである。性格は不明である。

炉 南部が調査区外のため, 規模・形状とも不明である。炉床は, 火熱を受け赤変した部分がわずかに残る。炉石は, 炉床のやや西寄りに動いた状態で出土している。

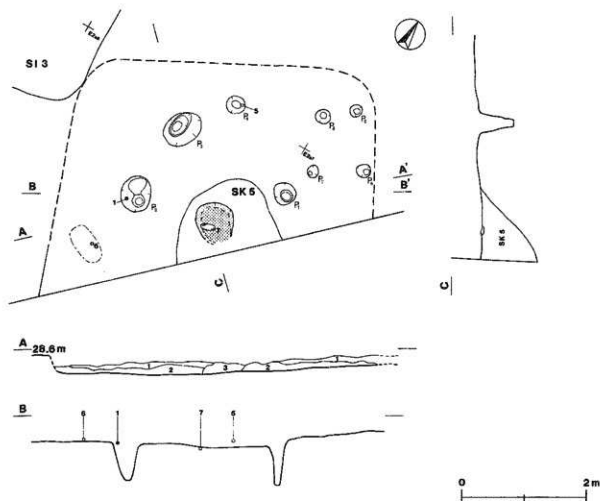
覆土 3層からなる。焼土粒子・炭化粒子がわずかに認められる。ブロック状の不自然な堆積状況を示しており, 人為堆積と考えられる。

土層解説

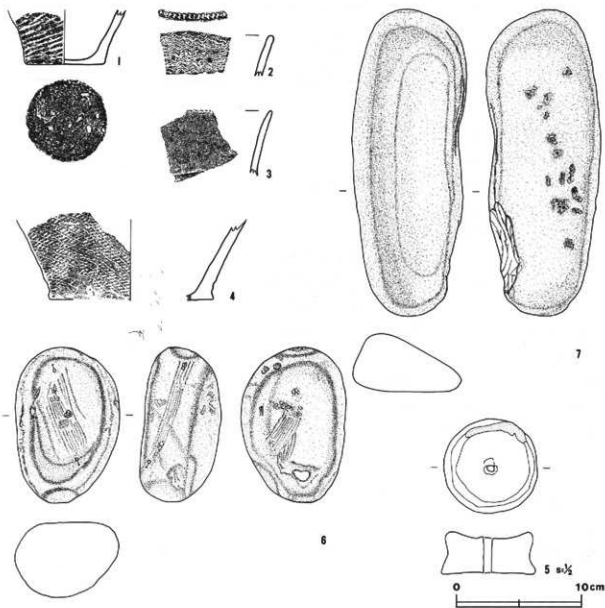
- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子少量, ローム中ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子少量

遺物 弥生土器細片約90点が出土しているが, ほとんどが割部片で口縁部や底部は微量である。第12図1の壺の底部は, P₂付近の床面直上から出土している。5の紡錘車はP₁付近の覆土下層から, 6の磨石はP₃南部の床面直上より出土している。7の炉石は, 炉床からやや西寄りの位置で出土している。

所見 本跡は, 出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と思われる。



第11図 第4号住居跡実測図



第12図 第4号住居跡出土遺物実測・拓影図

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	粘土・色調・焼成	備考
第12図 1	弥生土器	B (4.3) C 6.4	底部、胴部に附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。底部布目状。	長石、石英、雲母スコリア、黒褐色普通	PS, PL14, 5% P2付近床面

第12図2～4は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。2・3は口縁部片で、口縁部は波状文が施され、2の口唇部は縄文が施されている。4は底部片で、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第12図 5	紡錘車	5.0	5.0	2.3	6.0	(62.9)	98	床面上	DP1, PL28

図版番号	器種	計測値				材質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第12図 6	磨石	12.4	8.4	6.1	950.7	砂岩	床面直上	Q9, P.130
7	磨石	24.6	9.3	4.5	1,540.4	安山岩	床面直上	Q7, P.131

第5号住居跡(第13図)

位置 調査区の南西部, E2c1区。

規模と平面形 覆土が削平され壁の立ち上がりを確認できないため規模・平面形は不明である。

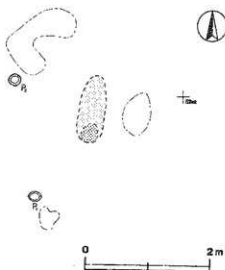
床 締まりのある平坦な面を一部確認した。

ピット 2か所(P₁・P₂)。P₁は長径20cm, 短径15cmの楕円形で深さ36cm, P₂は直径20cmの円形で深さ52cmの主柱穴と思われる。

炉 はほぼ中央に位置すると思われ, 長径「100」cm, 短径「45」cmの楕円形であり, 南部に火熱を受けて焼上ブロックが形成されている部分が認められる。

遺物 床面からの出土遺物はない。流れ込みと考えられる弥生土器細片が, 胴部片を中心に約30点出土している。

所見 本跡は, 遺構に伴う遺物が出土していないことから時期不明である。



第13図 第5号住居跡実測図

第6号住居跡(第9図)

位置 調査区の南部, D2j1区。

規模と平面形 覆土が削平され, 壁の立ち上がりを確認できないため規模・平面形は不明である。

主軸方向 N-42°-W

床 締まりのある凹凸面を南から南壁にかけて確認した。

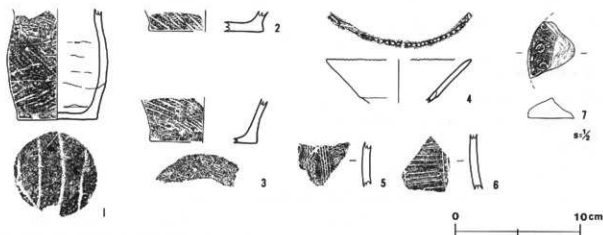
ピット 4か所(P₁~P₄)。P₁~P₃は直径25~30cmの円形で, 深さ60~67cmの主柱穴と思われる。P₄は直径30cmの円形で, 深さ50cmの出入り口施設に伴うものと思われる。

貯蔵穴 P₁の南西部に位置する。長径75cm, 短径50cmの不正楕円形で深さ38cmである。

炉 中央からやや北寄りに位置し, 長径110cm, 短径80cmの楕円形で, 床を掘り窪めた地床である。炉床は, 中央部が火熱を受け, 焼上ブロックが形成され赤変硬化している。

遺物 弥生土器細片が約130点出土しているが, ほとんどが胴部片で口縁部や底部は微量である。第14図1の小形広口壺の胴部から底部と, 2はP₂西部の床面直上から, 3はP₃北部の床面直上から出土している。4は高坏部片でP₄北部の覆土上層から出土している。

所見 本跡は, 出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と思われる。



第14図 第6号住居跡出土遺物実測・拓影図

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第14図 1	小形壺 弥生土器	B (8.8) C 6.4	胴部～底部。胴部に附加条二種(附加1条)の縄文が施され、表状構成をとる。底部木葉痕。	粘土・色調・焼成 長石、石英、雲母 小礫、砂粒 明黄褐色、普通	P13、P.L14、40% P4西部床面
2	壺 弥生土器	B (1.5) C [9.2]	底部。胴部に附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。底部布目痕。	長石、石英、雲母、 砂粒、スコリア にぶい黄褐色、普通	P14、5% P4西部床面
3	壺 弥生土器	B (3.7) C [8.6]	底部。胴部に附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。底部布目痕。	長石、石英、雲母 明黄褐色、普通	P15、P.L14、3% P4北部床面
4	高坏 弥生土器	A [11.7] B (3.5)	坏部片。口唇部は縄文が施され、口縁部と底部の接合部に段を有する。口縁部内・外側ナデ。	長石、石英、金雲母 スコリア、砂粒 にぶい黄褐色、普通	P12、P.L14、10% P4北部覆土上層

第14図5～7は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。5・6は頸部片で、5は縦区画内に波状文、スリット内は縦の波状文が施されている。6は縦区画内に横状文が施されている。7は紡錘車で円形の刺突文が施されている。

第7号住居跡 (第15図)

位置 調査区の南部、D2h7区。

規模と平面形 覆土が削平され、壁の立ち上がりが確認できないため規模・平面形は不明である。

床 炉跡の東部に平坦で締まりのある面を一部検出した。

ピット 1か所。P1は直径20cmの円形で深さ41cmの主柱穴と考えられる。

炉 炉の覆土は削平されているため、楕円形に赤変硬化している部分(長径25cm, 短径20cm)のみを検出した。

遺物 床面からの出土遺物はない。流れ込みと考えられる弥生土器細片が、約20点出土している。



第15図 第7号住居跡実測図

所見 本跡は、確認されたピットの形状が明らかに柱穴であることや、炉や床面の位置関係から住居跡と考えられる。時期は、遺構に伴う遺物が無いことから不明である。

第8号住居跡 (第16号)

位置 調査区の南部、D2g区。

規模と平面形 長軸6.5m、短軸5.5mの隅丸長方形をしている。

主軸方向 N-S-E

壁 壁高は10~15cmで、外積して立ち上がる。

床 凹んで南部に高まりがあり、炉から南壁にかけて良く踏み固められて硬い。

ピット 10か所 (P₁~P₁₀)。P₁~P₄は長径30~40cm、短径25~35cmの不正楕円形で、深さ84~90cmの主柱穴と思われる。P₅は長径32cm、短径28cmの楕円形で、深さ35cmの出入り口施設に伴うものと思われる。P₆は直径20cmの円形で深さ33cmである。位置関係から柱穴とも考えられる。P₇~P₁₀は峯際線にあり、直径10~15cmの円形で深さ15~30cmで性格は不明である。

炉 中央部に位置し、長径100cm、短径80cmの楕円形で床面を10cmほど掘り窪めた地床状である。炉床は、中央部から東部にかけて焼土ブロックが形成され硬化している。

土層解説

- 1 灰褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック微量
- 2 褐色 焼土粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック少量、炭化粒子微量

覆土 広範囲に耕作による攪乱が激しく、床面下に述しているため、堆積状況は不明である。

土層解説

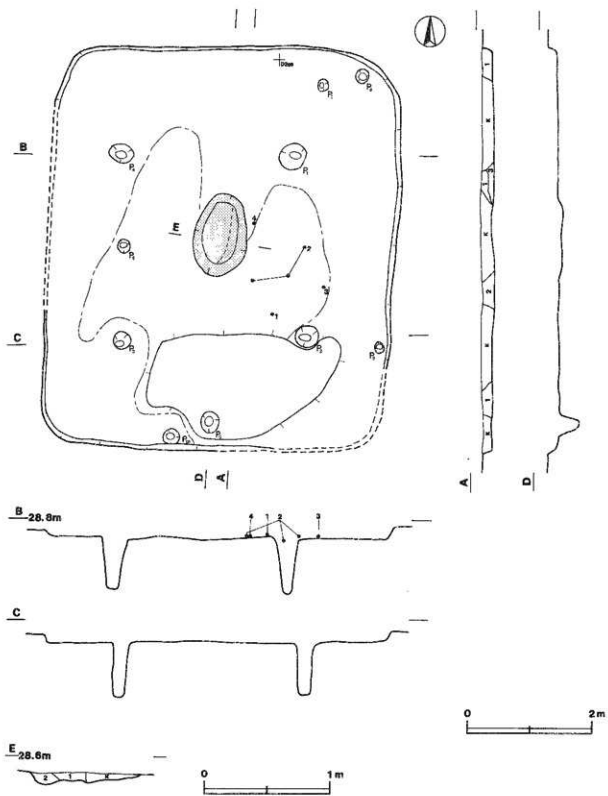
- 1 灰褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子・焼土小ブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子微量

遺物 弥生土器細片約780点が出土しているが、ほとんどが胴部片で口縁部や底部は微量である。第17図1は広い口縁部から頸部片でP₂西部の床面直上から、2・3は胴部から底部片でP₁~P₇間の床面直上から、4の胴部から底部は炉東部の床面直上から出土している。5の底部片、6の高杯部片は覆土中から出土している。

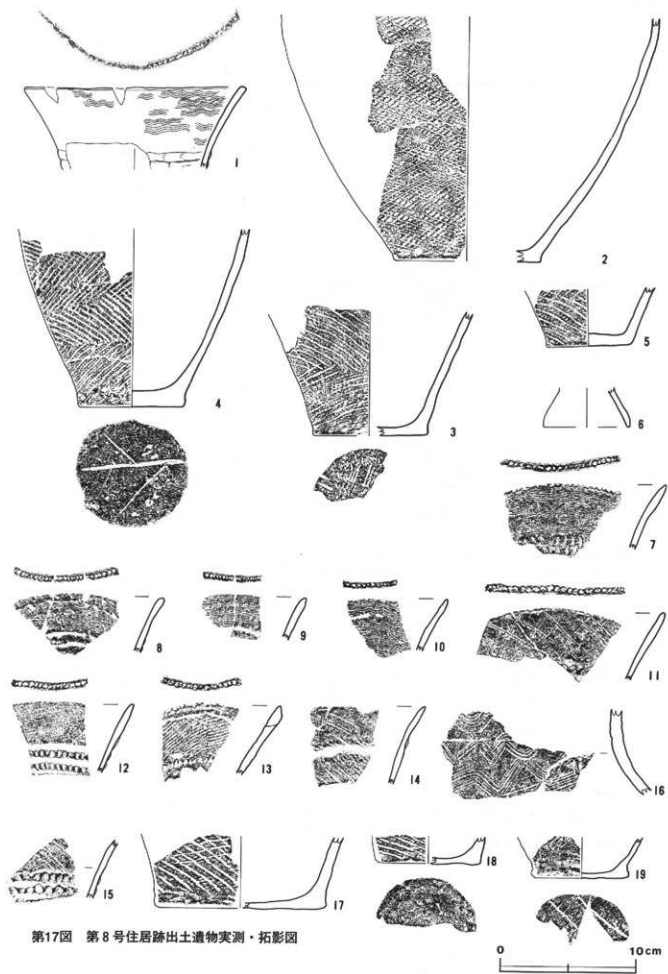
所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と思われる。

第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第17図 1	広口 甕 弥生土器	A [16.4]	口縁部~頸部片。口唇部はヘラ状工具による刻み。口縁部は輪歯状工具(4本)により波状文が施されている。口縁部下端に隆帯が2条巡り軽い押圧がみられる。	長石、雲母、小礫 砂粒	P23、PL14、5% 外面スス付着 P2床面
		B [6.0]			
2	甕 弥生土器	B [18.0]	胴部~底部片。胴部に附加条2種(附加1条)の縄文が施され、羽状彫成をとる。	長石、石英、スロ リア、砂粒	P24、PL15、5% P1~P2床面
		C [11.0]			
3	甕 弥生土器	B [9.0]	胴部~底部片。胴部に附加条2種(附加1条)の縄文が施され、羽状彫成をとる。底部木炭痕。	長石、石英、雲母 小礫	P26、PL15、10% 外面スス付着 P1~P2床面
		C [8.4]			
4	甕 弥生土器	B [13.1]	胴部~底部片。胴部に附加条2種(附加2条)の縄文が施され、羽状彫成をとる。底部木炭痕。	長石、石英、雲母 小礫、砂粒	P25、PL15、15% 外面スス付着 炉東部床面
		C [7.8]			



第16图 第8号住居跡実測图



第17图 第8号住居跡出土遺物実測・拓影图

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備 考
第17図	壺	B (42) C 6.4	底部片。胴部に附加条二種(附加2条)の縄文が施され、羽状溝をもとる。底部布目痕。	灰白、石灰、雲母 スコリア、砂粒 褐色 青緑	P27, PL15, 5% 覆土中
5	弥生土器				
6	高 坏 弥生土器	D 16.4 E (29)	胴部片。胴部は内厚しながら立ち上がる。内・外直ナデ。	赤褐色、砂粒 明黄褐色、青緑	P28, 5% 覆土中

第17図7～19は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。7～15は口縁部片である。8～10は口縁部へラ状工具による刻みが施されている。11は口縁部に格子目文、下端に隆帯が付いている。13は口縁部に附加条一種(附加2条)の縄文が施され、下位に縄文原体による刺突文が施されている。15は上位に格子目文、下位に隆帯が付いている。16は頸部片で上位に横溝文、下位に縞状文が施されている。17～19は底部片で、17・18は胴部に附加条二種(附加1条)の縄文が施され、18の底部は布目痕である。19は胴部に縄文が施され、底部は木葉痕である。

第9号住居跡(第18図)

位置 調査区の南部, D2e区。

規模と平面形 長軸6.2m, 短軸5.0mの隅丸長方形をしている。

主軸方向 N-23°-E

壁 壁高は15cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で炉周辺・北部のピット付近を除き全面が良く踏み締められている。南部の壁に沿うようにし字状の溝(約4.5m)がある。

ピット 29か所(P₁~P₂₉)。P₁~P₁₄は長径40~55cm, 短径30~40cmの不正楕円形で、深さ50~80cmの主柱穴と思われる。P₂を除き東西に動かされた痕跡がある。P₅~P₁₁は西壁際に位置し、直径20~30cmの円形で深さ30~40cmである。P₁₂・P₁₃は東壁際に位置し、長径30cm, 短径20cmの楕円形で深さ30cmである。

P₁₄~P₂₁は北部に位置し、直径15~20cmの円形で深さ23cmである。これらについては性格不明である。P₂₂~P₂₆は長径20~30cm, 短径15cmの楕円形で深さ20cmほどである。P₂₇は長径40cm, 短径30cm, 深さ24cmである。P₂₈~P₂₉は溝に伴うと思われる。P₂₈は南壁から外側に60cm, P₂₉も南壁から外側に70cmに位置し共に直径30cmの円形で深さ40cmで、P₂₈も含めて出入り口施設に伴うピットの可能性がある。

貯蔵穴 P₂₇と南西コーナーの間に位置し、長径80cm, 短径70cmの不正楕円形で、深さ35cmである。覆土は3層からなる。ロームブロックを多く含み、不自然な堆積状況から人為堆積であると思われる。

炉 中央部に位置し、長径150cm, 短径100cmの楕円形で床面を8cmほど掘り穿めた地床炉である。炉床は、覆土を受けている。中央部から北部は火熱を受け、焼上ブロックが形成され赤変硬化している。

炉土層解説

1 灰褐色 ローム粒中量, ローム中・小ブロック微量 2 褐色 ローム粒中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子・焼上粒子微量

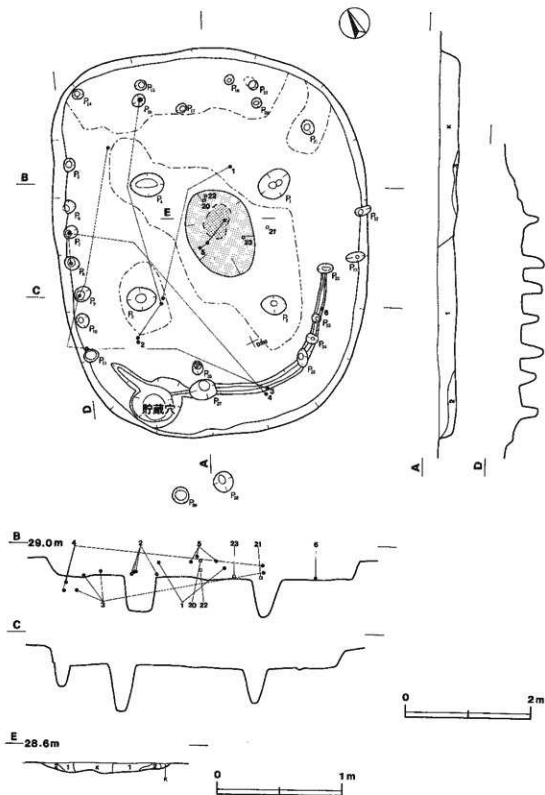
覆土 広範囲に耕作による攪乱が激しく、床面下に達している。1・2層の堆積状況から判断すると自然堆積と考えられる。

土層解説

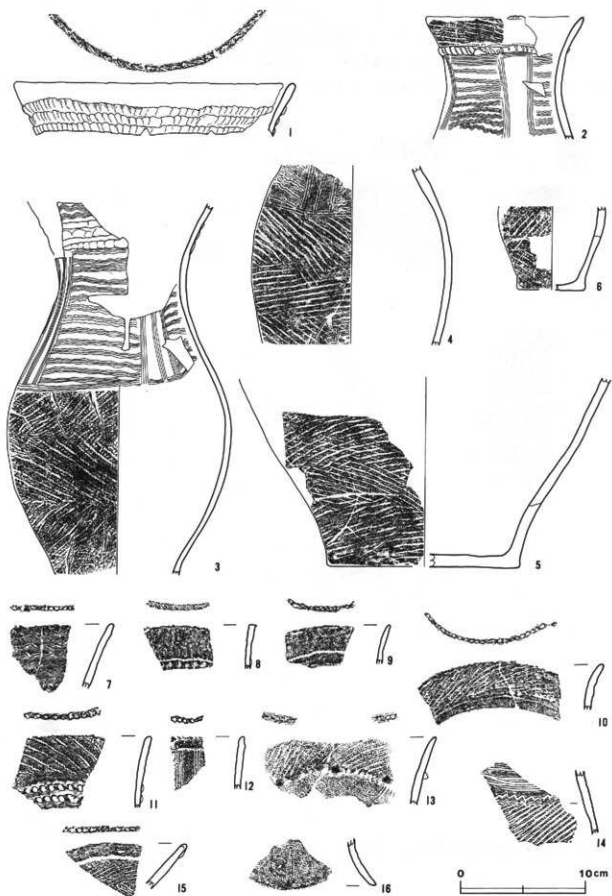
- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒少量, 炭化粒子・焼上粒子微量
- 2 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒少量, 炭化粒子・焼上粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒微量, 炭化粒子・焼上粒子少量

遺物 弥生土器細片約1,000点が出土しているが、ほとんどが胴部片で口縁部や底部は微量である。また、高

坏坏部細片1点、脚部細片1点が出土している。出土状況や接合状況から、上器片は広範囲に散在して出土している。第19・20図1は大形広口蓋のI縁部片でP₁付近の覆土中層から、2は口縁部から頸部片でP₂付近の覆土下層から出土している。3は口縁部から胴部で大部分がP₉内の底部から出土し、破片が南東コーナーとP₁₀付近の覆土下層から出土している。4は頸部から胴部で大部分がP₇・P₈内の底部から出土し、



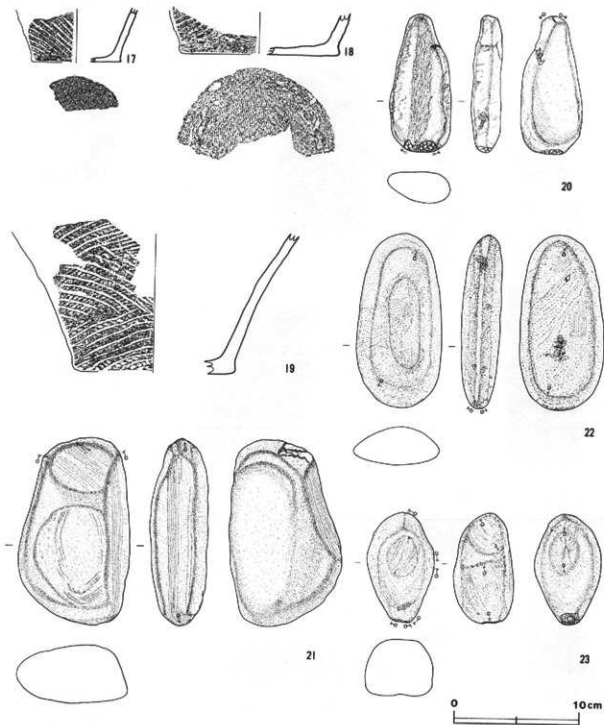
第18図 第9号住居跡実測図



第19图 第9号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)

破片が南東コーナー付近の覆土下層から出土している。5は大形壺の胴部から底部片で炉付近の覆土上層から、6の胴部から底部片は南東コーナー近くの溝付近の床面直上から出土している。20~22は磨石、23は礫石でそれぞれ炉付近からの出土で、20は覆土上層、21・22は覆土下層、23は床面直上から出土している。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と思われる。



第20図 第9号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計 測 値 (cm)		器 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎 土 ・ 色 調 ・ 施 成	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)			
第19図 1	人形底口蓋 弥生土器	A [22.6]	B [4.2]	口縁部片。口唇部は縄文が施され、口縁部は黒文で下縁には縦帯が2条入り。断面によると思われる強い押圧がある。	灰石、石英、雲母 スコリア に高い赤褐色、普通	P30、P.L15、5% 9号付近覆土中層
2	底口蓋 弥生土器	A [12.7]	B [9.7] H [9.2]	口縁部～胴部片。口唇部は棒状工具による押圧、口縁部は附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。口縁部と胴部の境には縦帯が1条入りへラ状の工具により割られる。胴部は棒状工具(4本)による縦区画により3分割されて区画内は波状文が施されている。	雲母、スコリア に高い赤褐色 普通	P33、P.L15、5% P3付定覆土下層
3	底口蓋 弥生土器	B [29.7]	H [10.3] I [18.0]	口縁部～胴部。口縁部は筒状工具(4本)により波状文が施されている。口縁部と胴部の境には低い縦帯が2条入り、軽い押圧がみられる。胴部は筒状工具(4本)による縦区画により3条を単位に4分割され、区画内は波状文が施されている。胴部と胴部の境には波状文が施される。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	灰石、雲母 に高い赤褐色 普通	P34、P.L15、60% 外面スチ付着 二次焼成痕 P9内底部
4	底口蓋 弥生土器	B [34.3]	I [16.0]	胴部～胴部。胴部は筒状工具(4本)による縦区画により3条を単位に4分割され、区画内は波状文が施されている。胴部と胴部の境には波状文が施される。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	灰石、石英、雲母 羽状底物 に高い赤褐色 普通	P35、P.L15、30% 外面スチ付着 P7、P8内部
5	人形底 弥生土器	B [15.0]	C [15.5]	胴部～底部片。胴部に附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	灰石、石英、小礫 金雲母、砂粒 褐色、普通	P36、50% 9号付近覆土上層
6	小形底 弥生土器	B [6.7]	C [5.4]	胴部～底部片。胴部外面の風化が著しく、文様が不明瞭である。胴部に附加条一種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	灰石、石英、小礫 砂粒 明褐色、普通	P37、5% 二次焼成痕 南部コーナー一部

第19・20図7～19は、木跡から出土した弥生土器片の拓影図である。7～13は口縁部片で、口唇部は縄文が施される。7は口唇部に突起が貼付され、口縁部に波状文が施されている。10・11は口縁部に附加条二種(附加1条)の縄文が施され、11は下位に刺突文をもつ隆帯が2条貼付されている。13は複合口縁で口縁部に附加条一種(附加2条)の縄文、下端に縄文原体による刺突文が施され、瘤が貼られる。14は胴部片で、上位に横走文、中位に波状文、下位に附加条一種(附加2条)の縄文が施されている。15は高坏部片で複合口縁である。口唇部は縄文が施され突起が貼付される。下位は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。16は高坏部片である。17～19は底部片で、18・19は大形と思われる。胴部に附加条二種(附加1条)の縄文が施され、17・18の底部は布日痕である。

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	出土地点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第20図 20	磨 石	11.0	5.0	2.4	187.6	砂 岩	覆 土 上 層	Q12、P.L30
21	磨 石	15.0	8.9	4.6	918.0	砂 岩	覆 土 下 層	Q14、P.L30
22	磨 石	14.0	6.8	3.1	445.4	砂 岩	覆 土 下 層	Q15、P.L30
23	磨 石	8.8	5.3	4.8	325.2	流 紋 岩	床 面 表 上	Q15、P.L30、31

第10号住居跡 (第21図)

位置 調査区の南西部、E1b-区。

重複関係 第1号土坑が、P₁の西側に床を掘り込んで検出されていることから、本跡は第1号土坑より古い。

規模と平面形 ほとんどの覆土が削平され、壁の立ち上がりを確認できないため規模・平面形は不明である。

主軸方向 N-3°-W

床 炉の付近に、ロームがブロック状に硬化した面を一部検出した。

ピット 4 か所 (P₁~P₄)。P₁~P₄は長径35cm, 短径20~30cmの不正楕円形で, 深さ45~50cmの支柱穴と思われる。

炉 4本の柱穴を結ぶ中心よりやや北側に位置する。長径100cm, 短径90cmの楕円形で床面を5cmほど掘り穿めた地床炉である。炉床は, 中央に火熱を受けて焼上ブロックが形成され赤変硬化している。

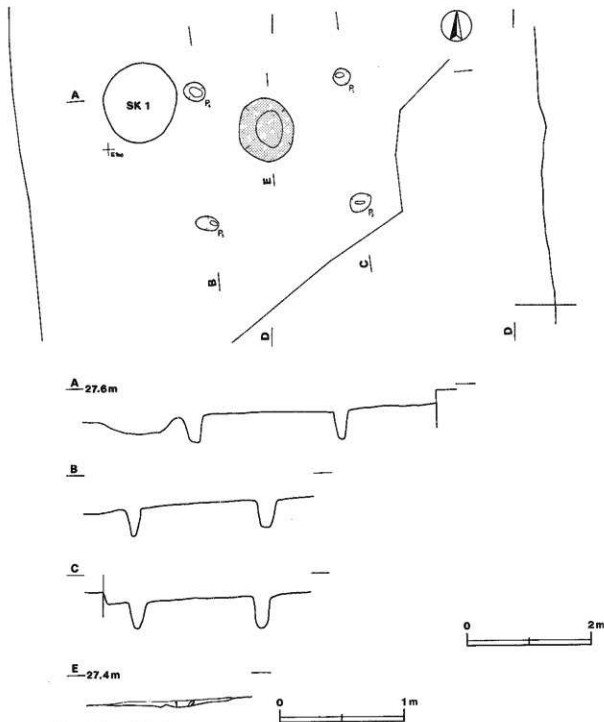
炉土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・焼上粒子中量, 焼上小ブロック少量

2 黒褐色 ローム粒子少量, 焼上粒子微量

遺物 床面からの出土遺物はない。流れ込みと思われる弥生土器細片が覆土中から12点出土している。

所見 本跡は, 遺構に伴う遺物が出土していないことから時期不明である。



第21図 第10号住居跡実測図

第11号住居跡 (第22図)

位置 調査区の南西部, D2i区。

規模と平面形 ほとんどの覆土が削平され, 東側は攪乱されているため規模・平面形は不明である。

主軸方向 N-5°-E

床 炉の西側に一部締まりのある面が確認できる。

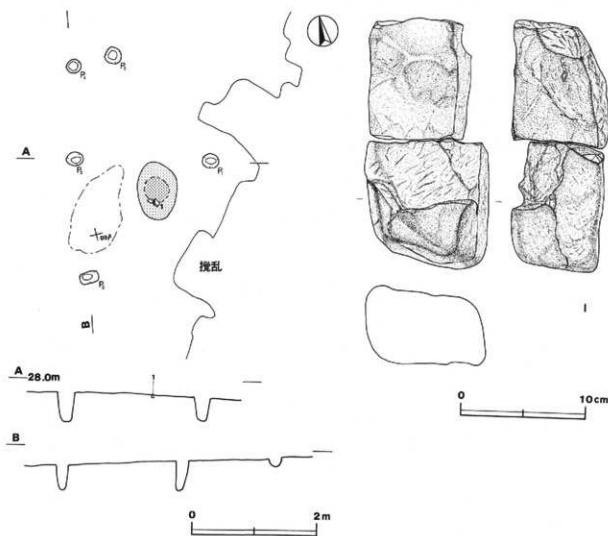
ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₃は長径25~30cm, 短径20cmの楕円形で深さ37~48cmの主柱穴と思われる。

P₄・P₅は直径25cmの円形で, 深さ13cmで性格は不明である。

炉 3本の柱穴を結ぶ中心よりやや北側に位置する。長径95cm, 短径60cmの楕円形で床面を掘り窪めた地床炉である。が床は, 中央部に焼土ブロックが形成され赤変硬化している。炉石は2つに割れ, 炉床の南側から動いた状態で出土している。

遺物 床面からの出土遺物はない。流れ込みと思われる弥生土器細片が覆土中から10点出土している。第22図1は炉石である。

所見 本跡は, 遺構に伴う遺物が出土していないことから時期不明である。



第22図 第11号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡出土物観察表

図録番号	器種	計測値				材質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第22図 1	炒 石	20.2	10.1	7.2	2,038.6	安山岩	床面直上	Q16

第12号住居跡 (第23図)

位置 調査区の南西部、D2g₂区。

規模と平面形 長軸5.8m、短軸4.0mの長方形をしている。

主軸方向 N-9°-W

壁 壁高は5~18cmで、外傾して立ち上がる。

床 平垣で、南東部を中心に縮まりのある硬化面が確認されている。

ピット 19か所 (P₁~P₁₉)。P₁・P₂・P₃は長径45~60cm、短径10~15cmの不正楕円形で、2段掘りの形状である。P₂は長径25cm、短径18cmの楕円形である。P₃は直径40cmの円形である。P₄~P₅は、深さが51~66cmで柱穴と思われる。P₆は、直径40cmの円形で深さ40cm、P₇は、長径15cm、短径10cmの楕円形で深さ18cmで出入り口施設に伴うものと思われる。P₇~P₁₉は住居を取り囲むように隙間に配置され、直径20cmほどの円形で、深さ13cm~30cmである。柱穴の延長線上にあるもの、対になるもの等があり、柱穴とも考えられるが性格は不明である。

炉 中央部よりやや北側に位置し、長径110cm、短径100cmの不正楕円形で、床を8cmほど掘り窪めた地床がある。中央部は、火熱を受け焼土ブロックが形成され赤変硬化している。炉床下層のロームは、15cmほど火熱を受け赤変している。炉石は、炉の長軸に直行するように炉床の南側に据えられ、3つに割れており、上面は火熱を受け赤変しもろく剝離した痕跡が残る。

炉土層解説

- 1 褐色色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量、焼土小ブロック少量
- 2 黒灰色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子・焼土小ブロック微量、焼土粒子中量

覆土 4層からなる。ローム粒子を多く含む。レンズ状の堆積をしており自然堆積と考えられる。

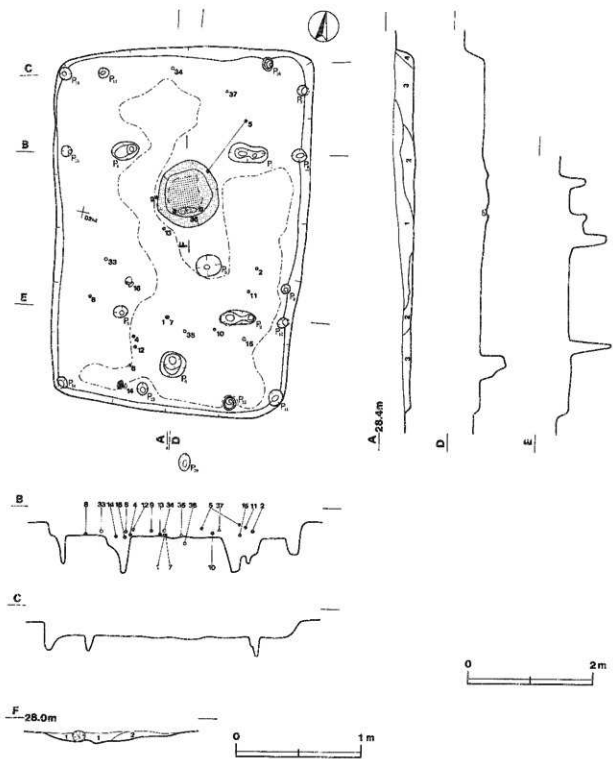
土層解説

- 1 褐色色 ローム粒子中量、炭化粒子・焼土粒子微量 3 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・焼土粒子微量
- 2 黒灰色 ローム粒子多量、炭化粒子微量、焼土粒子少量 4 褐色 ローム粒子少量

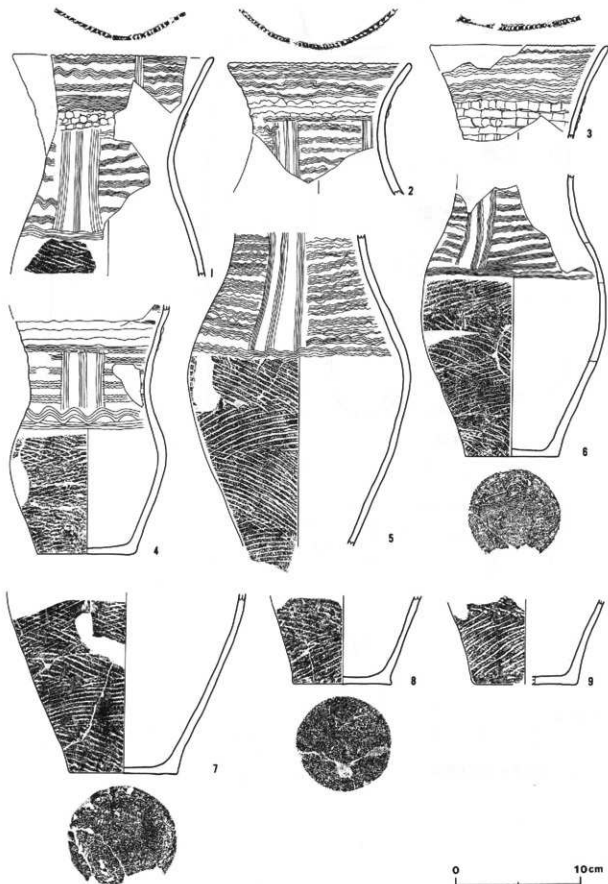
遺物 弥生土器細片約700点が出土しているが、ほとんどが胴部片で口縁部や底部は微量である。第24~26図

1は広口壺の1縁部から胴部片でP₁北部の床面直上から、2の口縁部から頸部片はP₂北部の覆土下層から出土している。3の口縁部片は覆土中から、4の広口壺は南部の覆土下層から、5の頸部から胴部はP₁付近の覆土下層から出土している。6の頸部から底部は、南部の覆土下層から、7の胴部から底部はP₁北部の床面直上から出土している。8の胴部から底部はP₂西側の床面直上から、9の胴部から底部片はP₁西部の覆土下層から出土している。10~13は底部で、10・11はP₁付近の覆土下層から、12はP₂西部の覆土下層から、13はP₁南部の床面直上から出土している。14の高坏はP₁西部の床面直上から口縁部を一部欠損し横位で、15のミニチュア土器はP₂南部の床面直上から横位で、16の小形甕はP₁北部の床面直上から横位で出土している。33の紡錘車はP₁北部の覆土下層から、34の散石は北壁寄りの覆土下層から、35の散石はP₂西部の床面直上から出土している。36は炉石である。37の不明鉄器は北壁寄りの覆土下層から出土している。

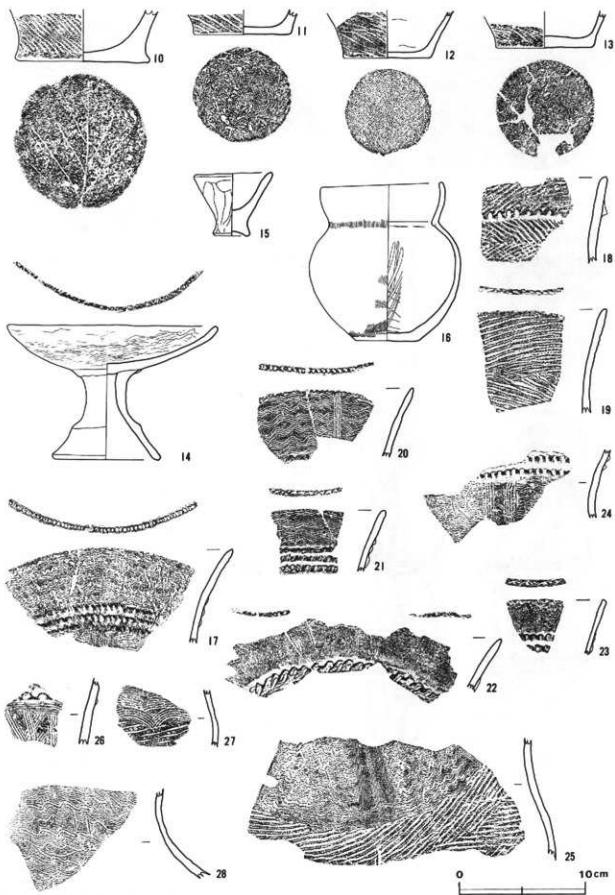
所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と思われる。



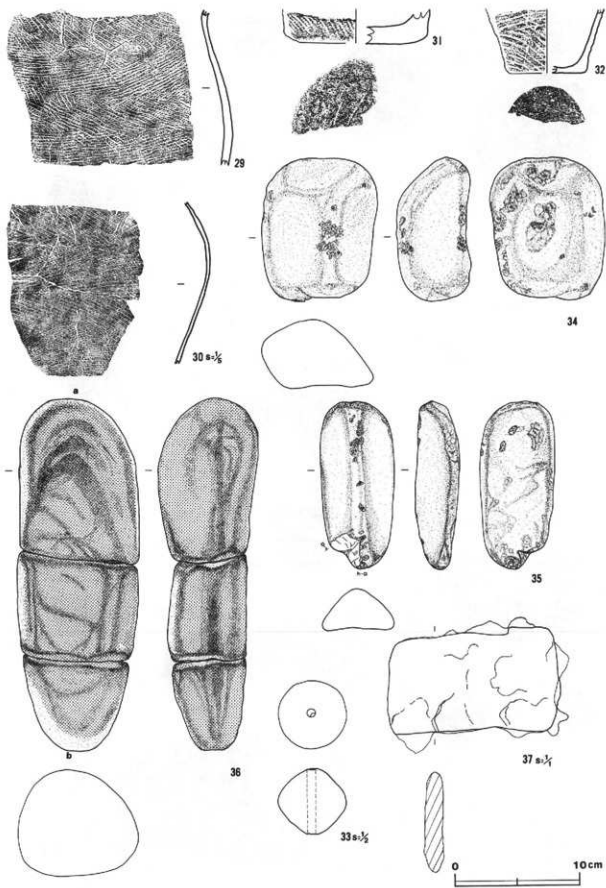
第23图 第12号住居跡実測区



第24图 第12号住居跡出土遺物実測図(1)



第25图 第12号住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)



第26图 第12号住居跡出土遺物実測図・拓影図(3)

第12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考	
第24図	1	広口壺 甕生土器	A [16.1] B (17.6)	口縁部～胴部片。口唇部は縄文が施され、口縁部は獅面状工具(5本)により波状文が入り、波状文が高る。口縁部と胴部の境は陰帯が2条重なり軽い押圧がある。頸部は獅面状工具による縦区画により3条を単位に分割される区画には波状文が施されている。胴部と胴部の境には波状文が高る。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。	長石、石英、砂粒 金雲母、スコリア 灰白色 普通	P41, 10% P6北部床面
			A [14.8] B (10.5) H 10.5	口縁部～胴部片。口唇部はヘラ状工具による削み、口縁部は獅面状工具(4本)により波状文が施されている。口縁部と胴部の境は陰帯が2条重なり軽い押圧がある。頸部は獅面状工具による縦区画により3条を単位に分割され、区画内は波状文が施され、上段には波状文が高る。	長石、砂粒 浅黄褐色 普通	P42, 5% P2北部甕土下層
3	広口壺 甕生土器	A [14.2] B (7.5)	口縁部片。口唇部はヘラ状工具による削み、口縁部は獅面状工具(3本)により波状文が施されている。口縁部と胴部の境は陰帯が4条重なり軽い押圧がある。	長石、石英、砂粒 灰色 普通	P44, 5% 二次地成痕 甕土中	
4	5	広口壺 甕生土器	B (20.0) C 7.8 H 9.6 I 12.5	頸部～底部。頸部上部に低い陰帯が3条入り、軽い押圧がある。頸部は獅面状工具(4本)による縦区画により3条を単位に4分割され、区画内は波状文が施されている。胴部と胴部の境には入る波状文が高り、その下に横定文が高る。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され羽状構成をとる。底部も目紋。	長石、石英、小礫 砂粒 灰色 普通	P46, P.L15, 80% 外面スス付着 二次成痕による割 離。 甕部甕土下層
			B (25.0) I 17.7	頸部～胴部。頸部は獅面状工具(5本)による縦区画により3条を単位に3分割され、区画内は波状文が施される。頸部と胴部の境には波状文が高る。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英 スコリア 灰白色 普通	P47, P.L16, 40% 外面スス付着 P1付高甕土下層
6	7	広口壺 甕生土器	B (22.6) C 7.5 I 14.9	頸部～底部。頸部は獅面状工具(5本)による縦区画により3条を単位に3分割され、区画内は波状文が施されている。頸部と胴部の境には波状文が高る。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底部も目紋。	長石、石英 スコリア 灰白色 普通	P48, P.L16, 10% 外面スス付着 二次成痕による割 離 甕部甕土下層
			B (14.4) C 8.8	頸部～底部。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底部も目紋。	石英、長石、 スコリア 灰白色、普通	P49, P.L16, 10% P6北部床面
8	9	壺 甕生土器	B (7.1) C 7.6	頸部～底部。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底部も目紋。	長石、灰白色、 普通	P50, P.L16, 10% P9西部床面
			B (6.2) C [8.4]	頸部～底部片。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、 灰白色、普通	P51, P.L16, 5% P4西部甕土下層
第25図	10	壺 甕生土器	B (4.0) C 10.8	底部片。胴部は附加条二種(附加2条)の縄文が施される。底部も目紋。	長石、石英 スコリア 暗褐色、普通	P52, P.L16, 5% 底部割痕 P2付近甕土下層
			B (2.0) C 7.5	底部。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施される。底部も目紋。	長石、石英 スコリア 灰褐色、普通	P54, P.L16, 5% P2付近甕土下層
11	12	壺 甕生土器	B (3.7) C 6.8	底部。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施される。底部も目紋。	長石、スコリア 灰褐色 普通	P53, 5% 外面スス付着 P6西部甕土下層
			B (2.9) C 7.8	底部。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施される。底部も目紋。	長石、石英、スコリア 灰色、普通	P55, 5% P7南部床面
13	14	高坏 甕生土器	A 16.8 H 10.7 D 8.6 F 6.7	口唇部は縄文が施され、坏部外面はヘラ状工具による波状文が施されている。内面はナデ。坏部と脚部の接合部分は貼り付けによる盛り上がりが見られる。脚部は紋を有し「ハ」の字に開く。外面ナデ。一部削り痕有り。	長石、石英、金雲母 スコリア、砂粒 明黄褐色 普通	P56, P.L16, 60% P13西部床面
			A 6.3 B 5.2 D 2.9 E 1.2	底部は上げ底さみである。内・外面ナデ。一部削り痕有り。口縁部の破損部分は残存部から片口を有する可能性がある。	金雲母、スコリア 灰白色 普通	P58, P.L16, 95% P2南部床面

図版番号	器種	計測値(cm)			器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
		A	B	C				
第25図 16	小形甕	A	9.8	底部平底。体部は内彎して立ち上がり、最大径が体部上位にある。口縁部はやや内彎気味に立ち上がる。	全周に押成しているため、口縁部から体部にかけてわずかにハタ形断面が残る。口縁部 内・外面横ナデ、体部内面ナデ、内面方向への横き。	長石、石英、スコリア、小礫	P57, PL16, 90% 外面ス付着 二次地底版 P3北基床面	
		B	12.6					
		C	5.2					

第25・26図17～32は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。17～23は口縁部片で、17・18・20は口縁部にヘラ状工具による刻み、19・21～23は縄文が施されている。17は口縁部に波状文、下位に低い隆帯が3条付いている。18は複合口縁で附加条一種（附加2条）の縄文が施され、口縁部下端に棒状工具による刺突文がある。19は口縁部に附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとっている。21～28は頸部片である。27は波状文、下向き逆弧文、附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。29・30は胴部片で、30は大形甕と思われる。31・32は底部片である。

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第26図 33	新鉢串	3.5	3.6	3.6	4.0	39.1	100	覆土下層	D P 3, P L 28

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第26図 34 35 36	燧石	11.4	9.3	5.4	790.2	安山岩	炉床土下層	Q17, P L 30
	燧石	13.4	6.0	3.5	(351.9)	砂岩	床面直上	Q30, P L 30, 31
	炉石	28.3	9.8	8.5	2576.2	砂岩	炉内	Q21, P L 31

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第26図 37	不明鉄器	4.5	2.8	0.5		(168)	—	覆土下層	M1, P L 31

第13号住居跡（第27図）

位置 調査区の南部、D2c区。

規模と平面形 長軸4.5m、短軸3.3mの隅丸長方形をしている。

主軸方向 N-32°-W

壁 壁高は6～12cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、炉を中心に踏み締められた硬化面がある。

ピット 5か所（P₁～P₅）。P₁・P₂は長径30～40cm、短径25～30cmの不正楕円形で深さ59cmで掘り込みが住居中央部に向かって傾いている。P₃～P₅は長径25cm、短径20cmの楕円形で深さ13～18cmである。P₁～P₅は、柱穴と思われる。P₃は直径30cmの円形で、深さ50cmで掘り込みが住居外に向かって傾いていることから出入り口施設に伴うものと思われる。

炉 中央部よりやや北西側に位置し、長径120cm、短径60cmの不正楕円形で床面を9cmほど掘り窪めた地床炉である。中央部は火熱を受け、焼土ブロックが硬化し赤変している。炉床下層のロームは10cmほど火熱を受け、赤変している。炉石は、炉の長軸に直行するように炉床の北側に据えられており、2つに割れて上面は火熱を受け剥離し、窪んだような状態である。

炉土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子微量、焼土小ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土中ブロック・焼土粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子・焼土粒子微量

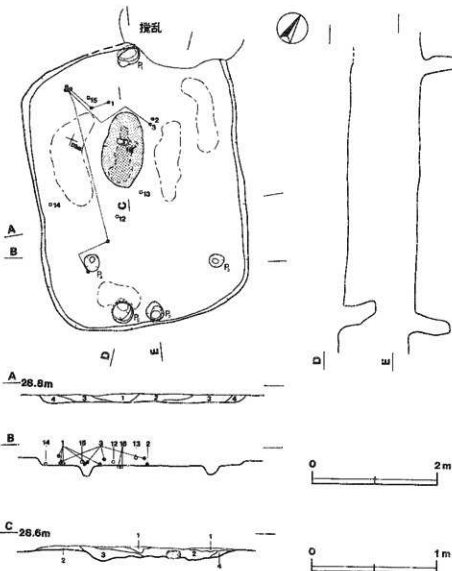
覆土 4層からなる。ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子の含有が多い。レンズ状の堆積を示していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

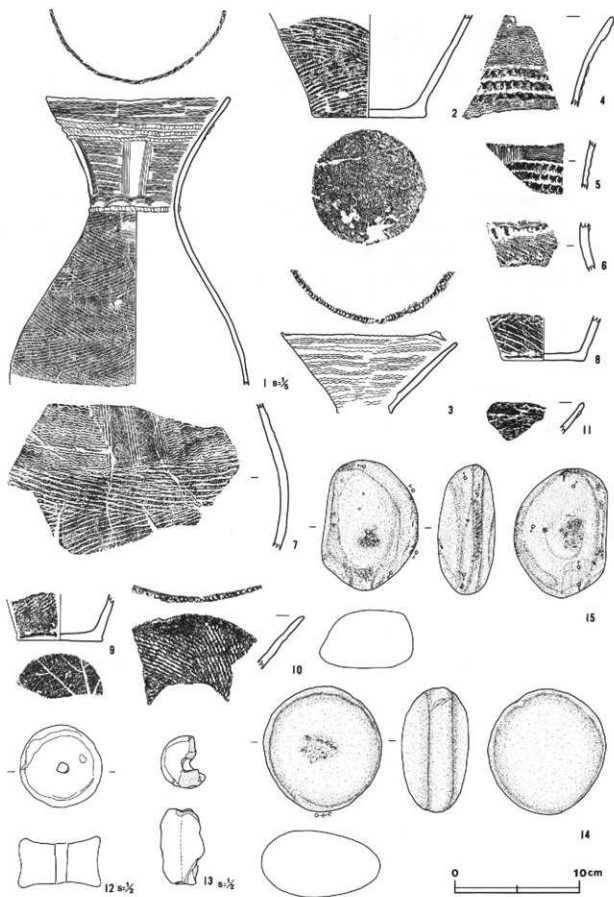
- 1 褐色色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、炭化粒子・焼土粒子微量
- 2 灰褐色 ローム粒子中量、炭化物少量、ローム小ブロック・焼土粒子・焼土粒子微量
- 3 褐色 ローム中ブロック中量、ローム大ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子微量

遺物 弥生土器細片約270点が出土しているが、ほとんどが割部片で口縁部や底部は微量である。第28・29図

1は大形広口壺の口縁部から胴部片を接合したものである。口縁部から頸部片は、北西コーナー付近の床面直上から逆位で、胴部片はつぶれた状態で横位で出土している。2は胴部から底部で炉北部の床面直上から、3は高坏坏部で西部覆土上層から下層で出土している。12の紡錘車は炉南部の覆土下層から、13の管状土錘は炉南部の覆土中層から出土している。14は磨石で西壁寄りの床面直上から、15の磨石は北西部の覆土下層から出土している。16は炉石である。

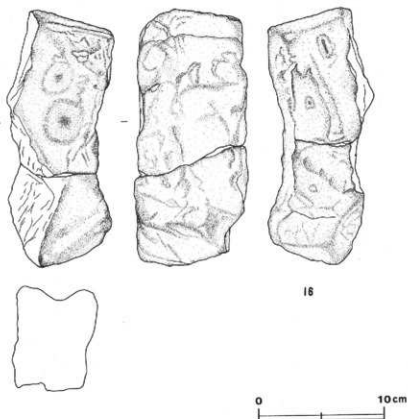


第27図 第13号住居跡実測図



第28图 第13号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と思われる。



第29図 第13号住居跡出土遺物実測図(2)

第13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・地成	備考
第28図	大形口造	A 24.4 B (38.5) H 11.8	口縁部～胴部片。口唇部は縄文が施され、口縁部は磨面状工具(5本)により波状文が施されている。口縁部と胴部の境は隆帯が3条走り器底によると思われる押圧がある。頸部は磨面状工具による縦区画により5分割され区内は波状文が施されている。頸部下端には下向きの連弧文が走り頸部と胴部の境には隆帯が1条走り。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され羽状構成をとる。口縁部内面はついでいなテ。	長石、石英 全量母、スコリア にふい黄褐色 普通	P59, P.L17, 70% 北西コーナー床面
1	弥生土器				
2	壺	B (8.3) H 9.2	胴部～底部。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底部は布目痕。	長石、石英、スコリア、砂粒 浅黄褐色、普通	P60, 10% 北西部床面
3	高坏	A 14.0 B (6.3)	片口を有する高坏。口唇部は、ヘラ状工具による刻みがあり、突起が(3か所)付く。坏部は磨面状工具(3本)により波状文が施されている。内面はついでいなテ。	長石、石英 にふい黄褐色 普通	P61, P.L17, 50% 西部覆土中層

第28図4～11は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。4は口縁部片である。5～7は頸部片で、6は口縁部下端に縄文原体による刺突文があり、瘤が貼られる。8・9は底部片で、胴部に附加条二種(附加1条)の縄文が施され、8は底部に布目痕、9は底部に木葉痕がある。10・11は高坏坏部片で、ともに口唇部に縄文が施されている。10は単節縄文、11は附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	残存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第28図	12 紡錘車	4.4	4.4	2.8	6.0	60.5	100	覆土下層	DP4, PL28
	13 管状土鉢	(4.1)	(2.7)	(2.4)	—	(26.2)	50	覆土中層	DP5, PL29

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第28図	14 磨石	10.1	9.6	3.4	712.4	ホソツブミス	床面直上	Q22, PL30
	15 磨石	10.4	7.5	4.5	539.2	ホソツブミス	覆土下層	Q23, PL30
第29図	16 炉石	20.6	7.9	9.0	2119.4	砂岩	炉内	Q24

第14号住居跡 (第31図)

位置 調査区の西部, CII区。

規模と平面形 長軸6.1m, 短軸5.4mの隅丸方形をしている。

主軸方向 N-61°-W

壁 壁高は40~52cmで, 外傾して立ち上がる。

床 平坦で, 中央部と南東部コーナー付近に踏み締められた硬化面がある。

ピット 6か所 (P₁~P₆)。P₁・P₂・P₃は直径20~30cmの円形で深さ22~28cmである。P₂は長径70cm, 短径50cmの不正楕円形で, 深さ50cmである。P₁~P₃は柱穴と思われる。P₄は壁際に位置し直径13cmの円形で深さ14cmで, 性格は不明である。

炉 中央よりやや西側に, 炉の北部の覆土 (焼土粒子・炭化粒子微量) が一部確認できる。地床炉と思われる。

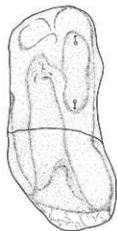
覆土 9層からなる。ローム粒子の含有が多い。不自然な堆積状況を示しており, 人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック微量, 焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック微量
- 6 暗褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 7 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子・焼土粒子微量
- 8 黒褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック・炭化粒子中量, 焼土小ブロック少量
- 9 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

遺物 弥生土器細片約250点が出土しているが, ほとんどが胴部片で口縁部や底部は微量である。第30・32図1は広口壺で, 東側コーナー付近の床面直上から横位で出土している。6の紡錘車は北西壁寄りの覆土下層から, 7の紡錘車は炉北西側の覆土下層から, 8の管状土鉢はP₂南側の床面直上から出土している。9の磨石は東側コーナー覆土下層から, 10の磨石, 11の敲石はP₂付近の覆土下層から出土している。12は台石である。

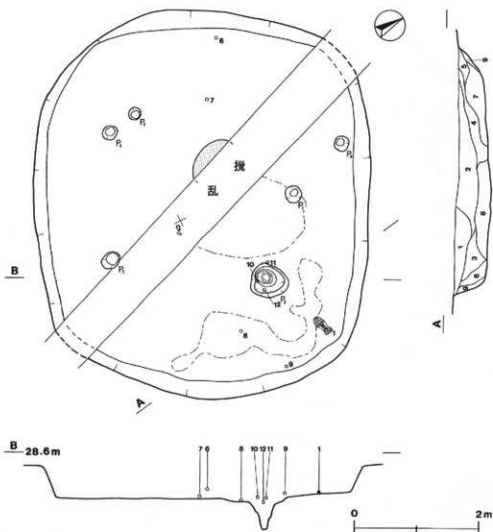
所見 本跡は, 出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と思われる。



12

0 10 cm

第30図 第14号住居跡出土遺物実測図(1)

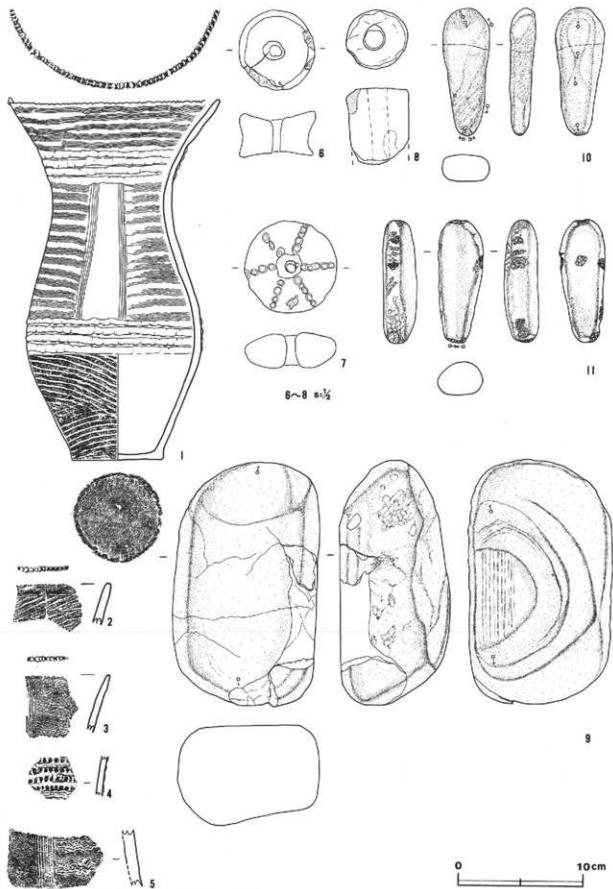


第31図 第14号住居跡実測図

第14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第32図 1	広口壺 弥生土器	A 16.8	口唇部はヘラ状工具による刻みがあり、突起が(1か所)付く。口縁部は櫛歯状工具(5本)により波状文が施されている。口縁部と頸部、頸部と胴部の境は染帯が4本走り軽い押圧がある。頸部は櫛歯状工具による縦区画により3分割され、区画内は波状文が施されている。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底部着目痕。内面はていねいなナデ。	長石、石英、小礫スコリアにぶい黄褐色良好	P65, P L17, 98% 東部コーナー床面
		B 28.9			
		C 7.2			
		H 9.6			
		I 13.9			

第32図2～5は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。2・3は口縁部片で口唇部にヘラ状工具による刻みがあり、2は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、3は波状文が施されている。4・5は頸部片である。



第32图 第14号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第33図 6	筒埴土	4.1	4.2	2.4	6.0	(42.4)	96	覆土下層	DP 6, PL28
7	筒埴土	4.9	4.9	1.9	6.0	46.6	100	覆土下層	DP 7, PL28
8	筒埴土	1.1	3.1	3.4	1.2	(43.5)	90	床面直上	DP 8, PL29

図版番号	器種	計測値				重量 (g)	石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	底面積 (cm ²)				
第32図 9	凹石	19.6	11.6	8.8	(3,342.1)	砂岩	覆土下層	Q25, PL30	
10	凹石	10.2	3.8	2.1	123.5	砂岩	覆土下層	Q26, PL30	
11	凹石	9.8	3.6	2.7	137.1	砂岩	覆土下層	Q27, PL30, 31, 赤色顔料付着	
第33図 12	台石	29.7	14.1	13.7	(8,060.0)	砂岩	床面直上	Q28, PL29	

第15号住居跡 (第33図) (付表参照)

位置 調査区の西部, C2d, f区。

重複関係 西側コーナーの壁上部を, 第3号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 一辺が5.4mの正方形をしている。

主軸方向 N-40°-E

壁 壁高は50cmで, 外傾して立ち上がる。

床 平坦で, 南西部壁際とP₁~P₃周辺にかけて硬化面が確認されている。南部コーナー部は, 乱瓦されている。北壁と南壁際を中心に多量の炭化材が散在している。

ピット 6か所 (P₁~P₆)。P₁~P₃は長径25~35cm, 短径20~35cmの不正楕円形で, 深さ45~66cmの柱穴と思われる。P₄は長径30cm, 短径20cmの楕円形で深さ32cmで, 軸が住居外へ傾いており出入り口施設に伴うものと思われる。

炉 中央部よりやや北側に位置し, 長径90cm, 短径80cmの不正楕円形で, 床面を20cmほど掘り窪めた床面がある。中央部は火熱を受けたロームがブロック状に赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量, 焼土小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子・焼土小ブロック少量, 焼土粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子・焼土粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量, 焼土小ブロック微量, 砂粒中程度含む
- 6 褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子微量
- 7 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土粒子微量

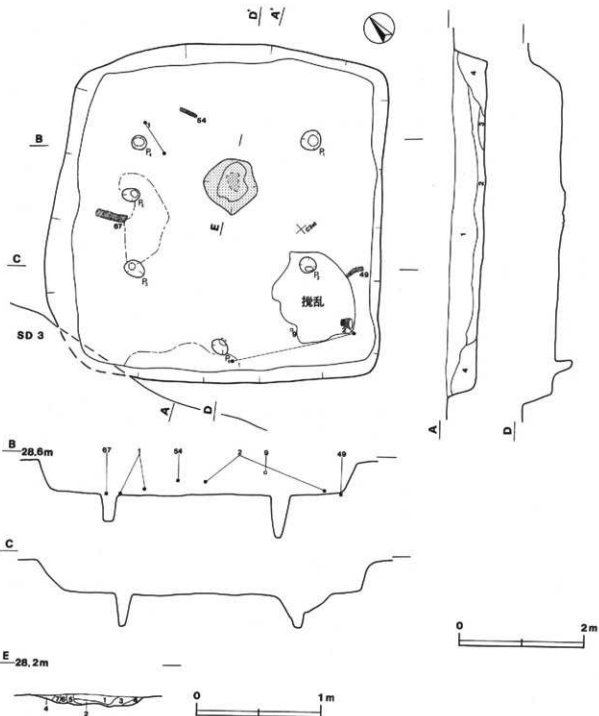
覆土 4層からなる。1層はレンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。2層以下は炭化粒子・焼土粒子等の含有が多く, 1層に比べ不自然な堆積状況を示していることから人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック少量, ローム小ブロック・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子・焼土粒子微量

遺物 弥生土器細片約250点が出土しているが, ほとんどが副都片で口縁部や底部は微量である。第34図1は 広口瓮の頸部から底部で北部コーナー付近から, 2の頸部から副都片は南部コーナー付近からともに覆土下層より出土している。9は礫石で南コーナー付近の覆土中層から出土している。

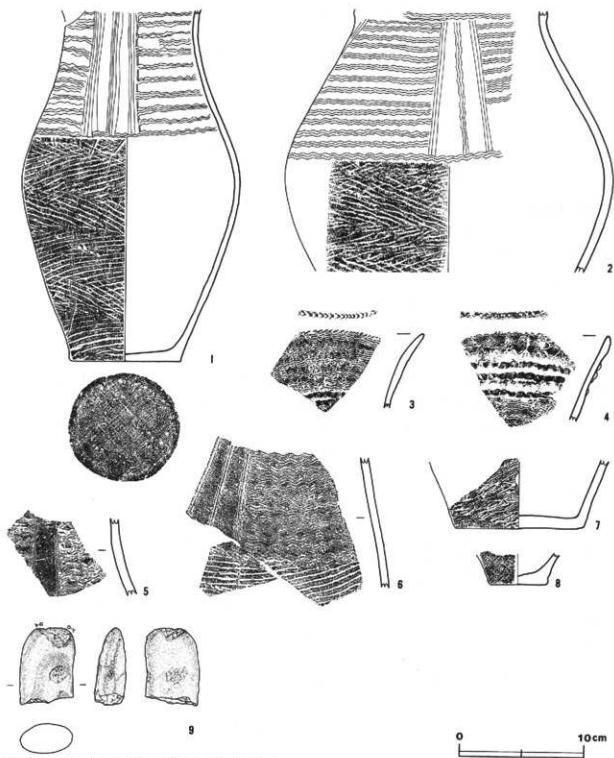
所見 本跡は, 床面に多量の炭化材がみられることから焼失家屋と思われる。時期は, 出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。



第33図 第15号住居跡実測図

第15号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第34図 1	広口壺 弥生土器	B (28.1) C 9.0 H 10.9 I 17.6	頸部～底部、頸部は櫛歯状工具(5本)による縦区画により3条を単位に分割され、区画内は波状文が施されている。頸部と胴部の境には波状文が走る。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底部布目痕。	長石、石英 小礫、スコリア にい・褐色 青浦	P68, P.117, 70% 外面スス付着 二次焼成痕 北部覆土下層



第34図 第15号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第34図 2	広口壺 弥生土器	B (21.0) I 26.4	頸部～胴部片。胴部は櫛齒状工具(3本)による縦区画により3条を単位に分割され、スリット内は縦の波状文が見られる。区画内はていねいな波状文が施されている。頸部と胴部の境には波状文が高る。胴部は附加条二種(附加1条)の織文が施され、羽状構成をとる。	長石・石英・砂粒 明赤褐色 普通	P67, P117, 20% 外面スス付着 二次焼成痕 南部覆土下層

第34図3～8は、本跡から出土した弥生土器片の撮影図である。3・4は口縁部片で、3の口唇部はヘラ状工具による刻み、口縁部は波状文が施されている。4の口唇部は縄文が、口縁部は波状文が施されている。5・6は頸部片で、6は腹区画内に波状文、胴部に附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。7・8は底部片で、7は附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。

図物番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第34図 9	敲石	6.2	4.4	2.4	(SR.6)	硬質砂岩	覆土中層	Q30, P.1.30

第16号住居跡 (第35図)

位置 調査区の西部, C16区。

規模と平面形 長軸4.6m, 短軸4.5mの隅丸方形をしている。

主軸方向 N-1°-W

壁 壁高は50～60cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、炉と南壁の間に良く踏み締められた硬化面がある。

ピット 7か所 (P₁～P₇)。P₁～P₄は長径30～40cm, 短径25～30cmの不正楕円形で、深さ60～70cmであり主柱穴と思われる。P₃～P₄は直径30cmほどの円形で、深さ20～25cmである。P₅・P₆は出入り口施設に伴うものと思われる。P₆の性格は不明であるが、P₅・P₇と同様の性格とも考えられる。

炉 中央部よりやや北側に位置し、長径110cm, 短径80cmの楕円形で、床を10cmほど掘り窪めた地床かである。中央部は火熱を受けたルームがブロック状に赤変硬化している。炉床面下のルームは、火熱を受け20cmほど赤変している。炉石は、炉の長軸に直行するように炉床の南側に据えられ、上面は火熱を受け赤変し一部煤が付着している。

炉土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量, 焼土小ブロック・焼土粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子中量, 炭化粒子・焼土小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子・焼土粒子微量

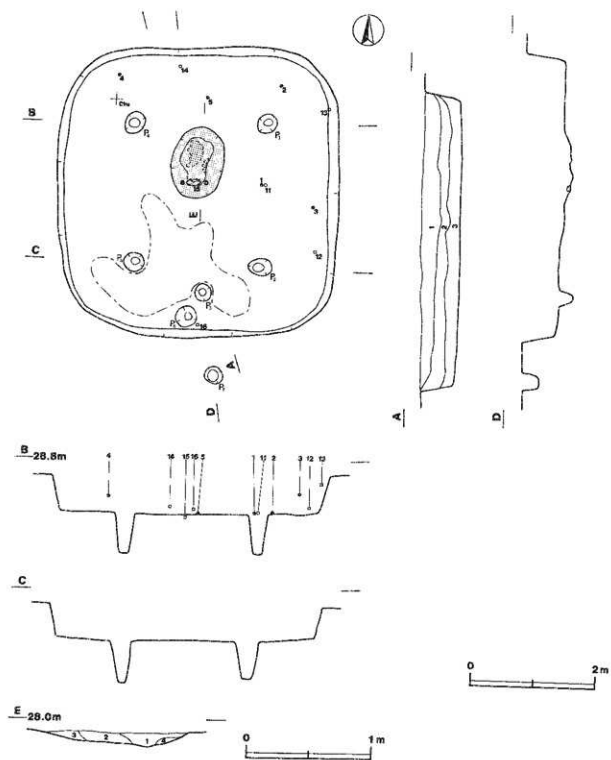
覆土 3層からなる。レンズ状の堆積をしていることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

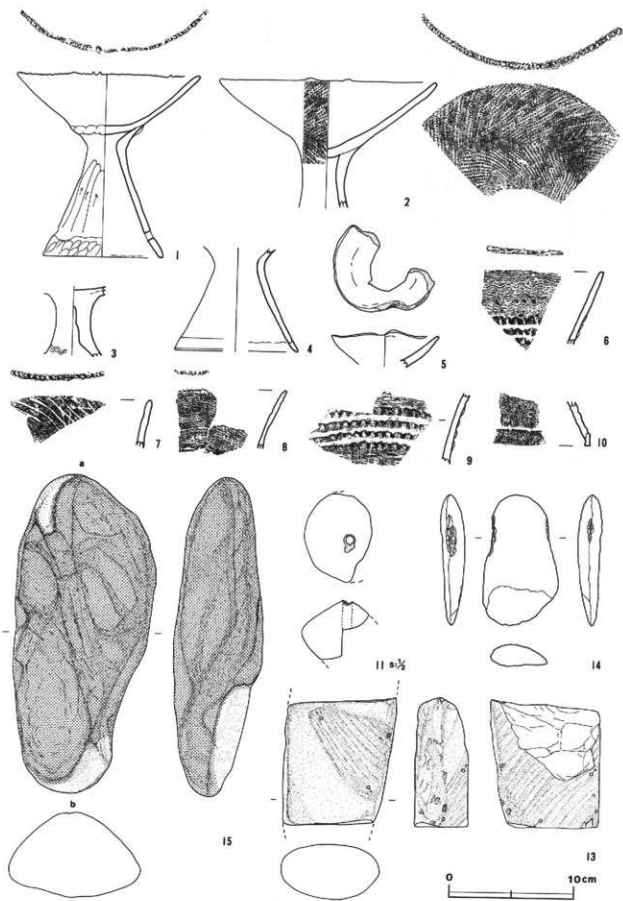
- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子・焼土粒子微量

遺物 弥生土器細片約300点が出土しているが、ほとんどが頸部片で口縁部や底部は微量である。また、高坏坏部片1点, 脚部片2点が出土している。第36・37図1の高坏は、炉東部の床面直上からつぶれた状態で出土している。2の高坏坏部は、北東部コーナー付近の床面直上から逆位で出土している。3の高坏坏部は東嶺際から、4の高坏脚部は北西コーナー付近の覆土中層から出土している。5の片門を有する高坏坏部は、炉北部の床面直上から出土している。11の紡錘車は、1の高坏とともに出土している。12の敲石は南東コーナー付近の覆土下層から、13の磨石は北東コーナー付近の覆土中層から、14の石斧は北壁付近の覆土下層から出土している。15はかり石, 16は介石である。

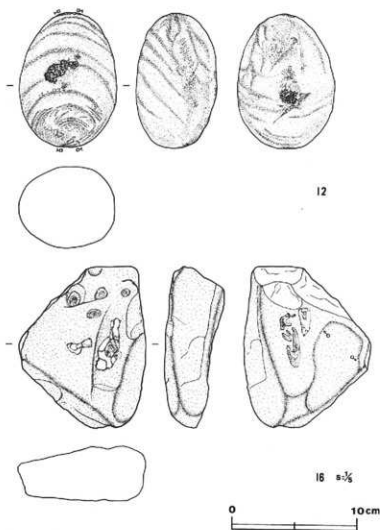
所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と思われる。



第35图 第16号住居跡实测图



第36图 第16号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第37図 第16号住居跡出土遺物実測図(2)

第16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第36図 1	高坏 弥生土器	A [14.7] B 14.6 D 9.6 E 9.2	口唇部はヘラ状工具による削みがあり、突起が(2か所)付く。坏部は直線的に開く。坏部と脚部の接合部分には幾層が通る。脚部は直線的に開き下部は若干の高まりをもち、指頭による押圧がある。2孔を有する。坏部内・外面ナデ。脚部外面磨き。	長石、石英、スコリア 褐色 普通	P74、P.L.18. 70% 北東部床面
2	高坏 弥生土器	A 17.6 B (10.2) E (4.2)	口唇部は縄文が施され、突起が(2か所)付く。坏部は直線的に開き、上位には附加条一種(附加1条)、下位には附加条一種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、金雲母、 砂粒、にぶい黄褐色。 普通	P75、P.L.18. 60% 北東部床面
3	高坏 弥生土器	B (5.5) E (4.6)	粘土塊を柱状にした脚部。坏部との接合部下端にわずかに歯状工具による波状文が見られる。	長石、石英、スコリア にぶい黄褐色。 普通	P76、P.L.18. 10% 東部覆土中層
4	高坏 弥生土器	B (8.3) C [10.0] E 7.0	脚部、脚部は直線的に開き、下端は粘土を付加し延長している。内・外面ナデ。	長石、スコリア にぶい黄褐色 普通	P77、P.L.18. 10% 北西部覆土中層
5	高坏 弥生土器	A 8.6 B (2.5)	片口を有する坏部。内・外面ナデ。	長石、スコリア にぶい黄褐色 普通	P78、P.L.18. 10% 北東部床面

第36図6～10は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。6～8は口縁部片で、7は口縁部に附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。8は小形の壺で、口唇部はヘラ状工具による刻みが施されている。9は頸部片である。10は高坏脚部片で、端部に粘土を付加し脚部を延長したものである。

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第36図 11	結露甕	(4.7)	(3.6)	(3.2)	4.0	(33.9)	40	崖面直上	DP9, PL28

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第37図 12	灰石	11.8	7.7	6.5	749.9	凝灰岩	覆土下層	Q32, PL30
13	磨石	10.1	9.1	4.4	(692.3)	安山岩	覆土中層	Q34, PL30
14	石斧	10.5	6.1	1.8	139.0	砂岩	覆土下層	Q37, PL29
15	炉石	25.6	11.3	6.8	2278.0	硬質砂岩	炉内	Q35, PL31
16	白石	21.6	17.1	7.3	3640.0	砂岩	覆土下層	Q36

第17号住居跡（第38図）

位置 調査区の中央部、C2f区。

重複関係 北西コーナーの壁上部を、第3号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸5.5m、短軸4.1mの長方形をしている。

主軸方向 N-17°-E

壁 壁高は27～33cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 南壁の西側を除いた壁下に巡っている。幅15～20cm、深さ5～8cmで断面形は「U」状をしている。

床 凹凸で南部を中心に硬化面があり、出入り口施設付近によく締まった高まりがある。

ピット 6か所（P₁～P₆）。P₁～P₃は長径30cm、短径25cmの不正楕円形で深さ45cmである。P₄は長径30cm、短径20cmの楕円形で深さ18cmである。P₅は長径50cm、短径25cmの不正楕円形で2段掘りの形状をなし、深さ45cmである。これらは柱穴と思われる。P₆は長径40cm、短径30cmの不正楕円形で深さ55cm、掘り込みが住居外に向かって傾いていることから出入り口施設に伴うものと思われる。

炉 中央よりやや北側に位置し、長径100cm、短径80cmの不正楕円形で床面を10cmほど掘り穿めた床床である。中央は火熱を受けたロームがブロック状に形成され硬化している。炉石は凝灰岩で2つに割れ、炉の長軸に直行するように炉床のやや南側に据えられている。上部は火熱を受け赤変し、もろく剥離した状態で出土している。

炉土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック微量、焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

覆土 2層からなる。焼土粒子・炭化粒子が微量に認められる。レンズ状の堆積を示していることから自然堆積と考えられる。

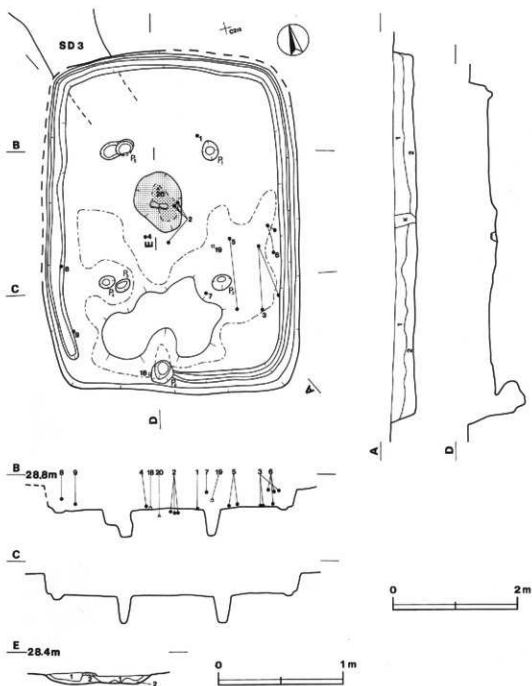
土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗灰色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 弥生土器細片約300点が出土しているが、ほとんどが胴部片で口縁部や底部は微量である。第39・40図

1は大形細頸壺の頸部から胴部片でP.付近の床面直上から、2の広口壺の頸部から底部は炉付近の床面直上から出土した破片を接合したものである。3の口縁部から胴部は東部床面直上から、4の小形広口壺は炉南部の覆土下層から出土している。5～7の底部は東壁からP.付近にかけて出土しており、5は床面直上から、6・7は覆土中層から出土している。8の底部はP.西部から、9の高坏脚部は南西コーナー付近から、それぞれ覆土下層より出土している。18の磨石はP.付近の床面直上から、19の石鏃はP.付近の覆土下層から出土している。20の不明鉄器は炉覆土中から出土している。

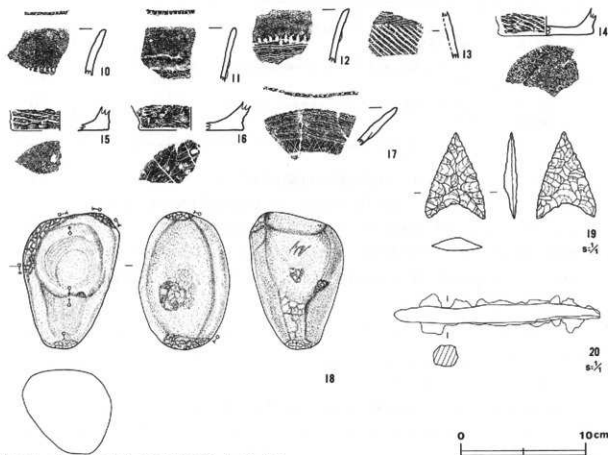
所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と思われる。



第38図 第17号住居跡実測図



第39图 第17号住居跡出土遺物実測図(1)



第40図 第17号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

第17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第39図 1	大形細頸壺 弥生土器	B (26.2) H 10.6	頸部～胴部片。頸部から胴部にかけて附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、雲母 スコリア、にぶい灰色 普通	P82, P.L18, 30% P付近床面
2	広口壺 弥生土器	B (33.2) C 9.1 H 11.4 I 18.4	頸部～底部。口縁部は鈎曲状工具(4本)により波状文が施されている。口縁部と頸部の境は低い隆帯が3条密に軽い凹入がある。胴部は鈎曲状工具による縦区画により3条を単位に4分割され、区画内は波状文が施されている。胴部と頸部の境は大きな波状文とゆるやかな波状文が高る。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底部布目肌。	長石、石英、砂粒 にぶい黄褐色 普通	P81, P.L18, 80% 外面スス付着 二次焼成後 伊予近床面
3	広口壺 弥生土器	A 14.4 B (17.3) H 10.8 I 17.9	口縁部～胴部。口唇部は縄文が施され、口縁部は無文で口縁部と胴部の境は低い隆帯が1条走り軽い凹入がある。胴部から胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	玄雲母、砂粒 にぶい黄褐色 普通	P83, P.L18, 20% 東部床面
4	小形広口壺 弥生土器	A 12.4 B 15.9 C 5.8 H 7.6 I 10.4	口唇部はへら状工具による割みがあり、突起が(3か所)付く。口縁部から胴部は鈎曲状工具による縦区画により3条を単位に4分割され、区画内は波状文が密に施されている。胴部と頸部の境は波状文が高る。胴部は附加条一種(附加2条)縄文が施され、羽状構成をとる。底部木葉肌。	長石、小礫 にぶい灰色 普通	P80, P.L18, 80% 外面スス付着 伊予南部覆土下層
5	壺 弥生土器	B (10.7) C 9.4	胴部～底部片。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底部布目肌。	石英、スコリア にぶい黄褐色 普通	P84, P.L19, 15% 東部床面
6	壺 弥生土器	B (6.2) C 8.8	底部。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底部布目肌。	スコリア にぶい褐色 普通	P85, P.L19, 10% 外面スス付着 東部覆土中層

図版番号	器 種	計測値(cm)		器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備 考
		口径	高さ			
第40図 7	弥生土器	B (4.6)	8.6	底面、胴部は附加条一種(附加1条)の縄文が施され、羽状焼成をとる。底面木葉痕。	灰石、石灰、小礫砂粒散在。普通	P86, P.L19, 10% 東部覆土中層
		C				
8	弥生土器	B (2.7)	6.8	底面、胴部は附加条一種(附加1条)の縄文が施されている。底面木葉痕。	灰石、スコリア散在。普通	P87, 10% P4西部覆土下層
		C				
9	高坏弥生土器	B (9.8)	10.2	胴部、脚部上位は柱状で、中位からゆるやかに開く。外面ナデ。	灰石、石英、砂粒にぶい黄褐色普通	P89, P.L19, 10% 海西コーナー付近覆土下層
		D				

第40図10～17は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。10～12は口縁部片で、11縁部はいずれも無文である。10・11は口唇部にヘラ状工具による刻み、10・12は口縁部下端に刺突文が施されている。13は頸部片で上位に横走文、下位に附加条一種(附加2条)の縄文が施されている。14～16は底部片で、14・15は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、底部は布目表である。15の底部には初の痕跡がある。16には縄文は見られず、底部は木葉痕である。17は高坏坏部片で、11唇部に縄文が施され、口縁部上位に波状文、下位に格子目文が施されている。

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第40図 18	磨 石	11.0	7.7	7.3	813.8	砂 岩	床 面 直 上	Q38, P.L30
19	石 鏃	2.3	1.6	0.4	0.9	黒曜石	覆 土 下 層	Q41, P.L31

図版番号	器 種	計 測 値 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現 存 率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第40図 20	不明器器	5.5	0.6	0.6	—	(5.0)	—	東 部 覆 土 中 層	M2, P.L31

第18号住居跡 (第41図)

位置 調査区の中央部、C2区。

重複関係 北東・北西部の壁を第1号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸4.8m、短軸4.6mの隅丸方形をしている。

主軸方向 N-48°-W

壁 壁高は17～28cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、南部を中心に締まりのある硬化面が確認されている。その南部に長径32cm、短径20cmの不正楕円形の焼土化した部分がある。

ピット 13か所 (P₁～P₁₃)。P₁～P₃は長径30～40cm、短径25～30cmの不正楕円形で、深さ35～40cmである。

P₄は2段掘りの形状である。P₄は長径15cm、短径12cmの楕円形で深さ20cm、P₅は長径20cm、短径18cmの楕円形で深さ30cmである。これらは柱穴と思われる。P₆は長径35cm、短径30cmの不正楕円形で出入り口施設に伴うものと思われる。P₇～P₁₀は北東壁際に位置し、長径10～20cm、短径8～15cmの不正楕円形で、深さ15cmである。P₁₁・P₁₂は南西壁際に位置し、長径15～25cm、短径12cmの楕円形で深さ20cmである。P₁₃はP₆の東部に位置し、長径22cm、短径14cmの楕円形で深さ35cmである。これらは性格不明である。

炉 中央より北側に位置し、長径120cm、短径80cmの不正楕円形で床面を15cmほど掘り窪めた床炉である。中央は火熱を受けたロームがブロック状に形成され硬化している。炉石は、灰床のやや南側から動いた状態で出土している。

炉土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子・焼土小ブロック少量、炭化粒子微量、焼土粒子中量
 2 灰褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量

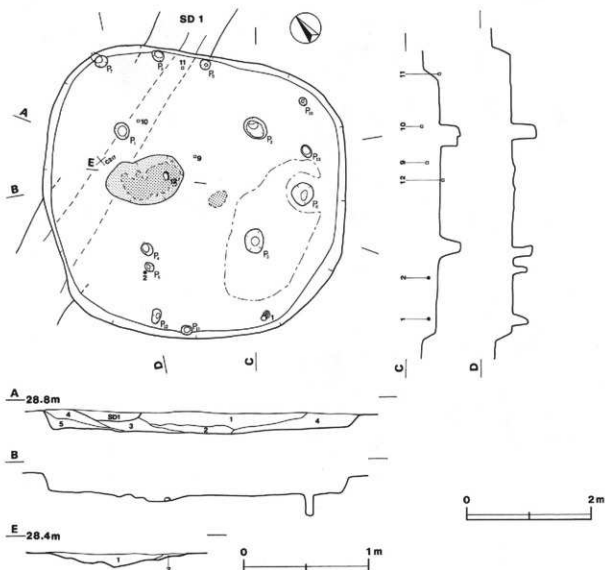
覆土 5層からなる。焼土粒子・炭化粒子が微量に認められ、2層には小礫を含む。不自然な堆積状況を示しており、人為堆積と考えられる。

土層解説

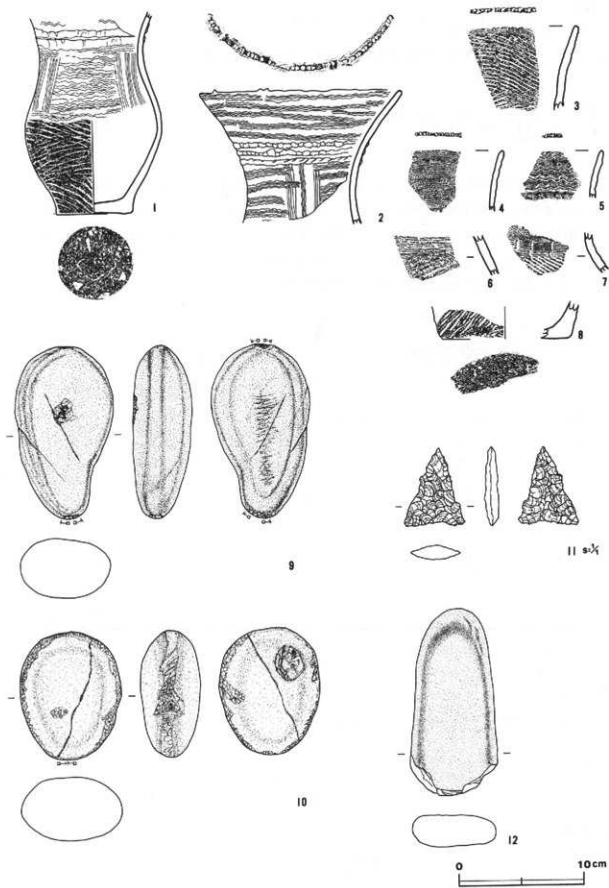
- 1 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・焼土粒子微量
 2 褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、焼土小ブロック少量、炭化粒子微量
 3 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量
 4 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
 5 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子微量

遺物 弥生土器細片約300点が出土しているが、ほとんどが胴部片で口縁部や底部は微量である。第42図1は広口壺の頸部から底部で南部コーナー付近から、2の口縁部から頸部片は、P₁付近からそれぞれ覆土下層より横位で出土している。9の敲石は中央部の覆土中層から、10の敲石はP₁付近の覆土上層から、11の石鏃はP₈～P₉間の覆土下層から出土している。12は炉石である。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と思われる。



第41図 第18号住居跡実測図



第42图 第18号住居跡出土遺物実測・拓影図

第18号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	直径(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第42回	灰口壺 甕牛土器	B (16.1)	胴部～底部、口縁部下部は波状文が施されている。口縁部と胴部の境は低い隆帯が2条通り斜め押仕がある。胴部は磨舟状工具による縦文(帯)により4分割され、区画内は波状文が帯に施されている。胴部と頸部の境は波状文が施される。胴部は附加条2種(附加1条)の縄文が施され、羽状横線をとる。底部有目痕。	灰石、石英 スコリア 燧石 骨通	P90、P.L.19、80% 外産スズ付着 二次焼成痕 南西部覆土下層
		C 6.1			
		I 10.9			
2	灰口壺 甕牛土器	A [16.2]	口縁部～胴部片、口唇部はヘラ状工具による割みがあり、突起が(2か所)付く。胴部は磨舟状工具(4本)による波状文が施されている。口縁部と胴部の境は隆帯が3条通り斜め押仕がある。胴部は磨舟状工具による縦文(帯)により3条を単位に分割される。スリット内は縦の波状文がみられ、区画内は波状文が施されている。内面はていねいなナデ。	スコリア、全器跡 におい灰褐色 良好	P91、P.L.19、3% P.92近覆土下層
		B (10.8)			

第42回 3～8は、本跡から出土した甕牛土器片の拓影図である。3～5は口縁部片で、3・5は口唇部に縄文が施され、4はヘラ状工具による割みが施されている。3は附加条二種(附加1条)の縄文が、4・5は波状文が施されている。6・7は胴部片で、6は波状文と下向きの連弧文、7は横状文、下位には附加条一種(附加2条)の縄文が施されている。8は底部片である。

図版番号	器種	計測値				材質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第42回 9	磨石	13.9	7.8	4.8	693.9	砂岩	覆土中層	Q42、P.L.30
10	磨石	10.2	8.1	4.9	368.8	安山岩	覆土上層	Q43、P.L.30
11	石磨	2.1	1.7	0.4	0.9	黒曜石	覆土下層	Q45、P.L.31
12	磨石	(15.0)	7.0	2.6	(417.4)	砂岩	室内	Q44

第19号住居跡(第43・44回)

位置 調査区の中央部、C29区。

規模と平面形 住居跡の南東部は調査区外であるが、長軸(6.5)m、短軸(5.5)mの円形に近い[平面形]をしていると思われる。

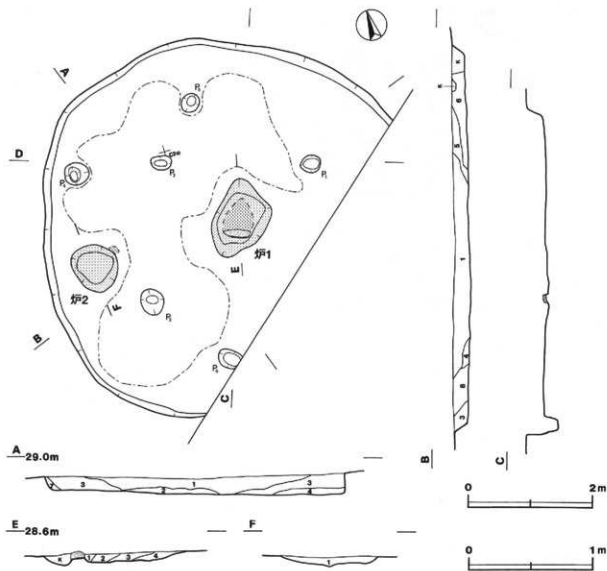
主軸方向 N-49°-E

壁 壁高は20cmで、外傾して立ち上がる。

床 門凸があり、炉1を中心に住居跡の中央部が半径約1mほどの範囲で床面である。炉1・炉2を囲むように硬化面がある。南部には炭化材・炭化物が少量散在している。

ピット 6か所(P1～P6)。P1～P4は長径35～45cm、短径25～30cmの不正楕円形で深さ60cmである。P4は直径10cmの円形で深さ40cm、P5は直径35cmの円形で深さ30cmである。これらは柱穴と思われる。P6は長径(35)cm、短径25cmの楕円形で、深さ20cmで出入り口施設に伴うものと思われる。

炉 炉1は、ほぼ中央部に位置し、長径130cm、短径80cmの不正楕円形で、床を7cmほど掘り窪めた地床炉である。中央部は、火熱を受け焼上ブロックが赤変硬化している。炉床下層のロームは、火熱を受け20cmほど赤変している。炉石は凝灰岩で、炉の長軸に直行するように炉床の南側に据えられ、上面は火熱を受け赤変し、もろく剝離している。炉2は、炉1の西部に位置し直径45cmの円形で、床を5cmほど掘り窪めた地床炉である。中央部は、火熱を受けた焼土が薄く確認できる。



第43図 第19号住居跡実測図(1)

炉1 土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量
 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量

- 3 暗褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・ローム粒子少量,
 ローム小ブロック微量
 4 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量,
 焼土粒子微量

炉2 土層解説

- 1 明褐色 ローム中ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量

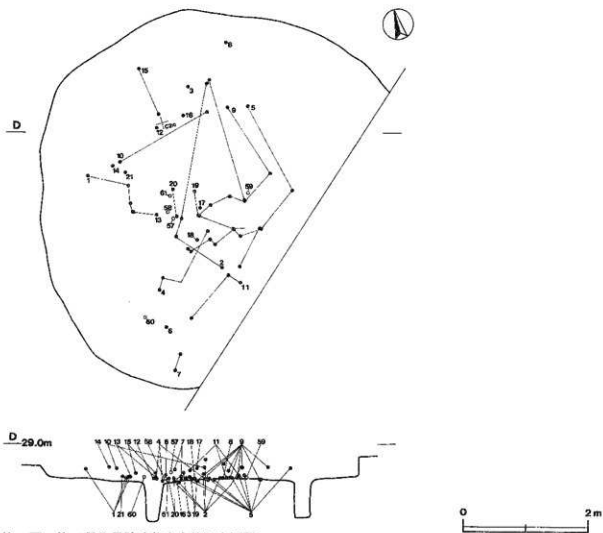
覆土 8層からなる。南東部の覆土は攪乱がみられる。ロームブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を多く含む。不自然な堆積状況を示していることから人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土小ブロック・
 焼土粒子微量
 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量, ローム小ブロック・
 炭化粒子微量
 3 暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック中量, 焼土粒子少量,
 ローム中ブロック・炭化粒子微量
 4 灰褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック・炭化物少量,
 炭化粒子・焼土粒子微量

- 5 黒褐色 ローム粒子多量, 炭化材少量, ローム小ブロック・
 炭化粒子微量
 6 暗褐色 ローム粒子中量・炭化物・炭化粒子中量, ローム中
 ブロック少量, 焼土粒子微量
 7 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子・
 焼土粒子微量
 8 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量, 炭化粒子微量

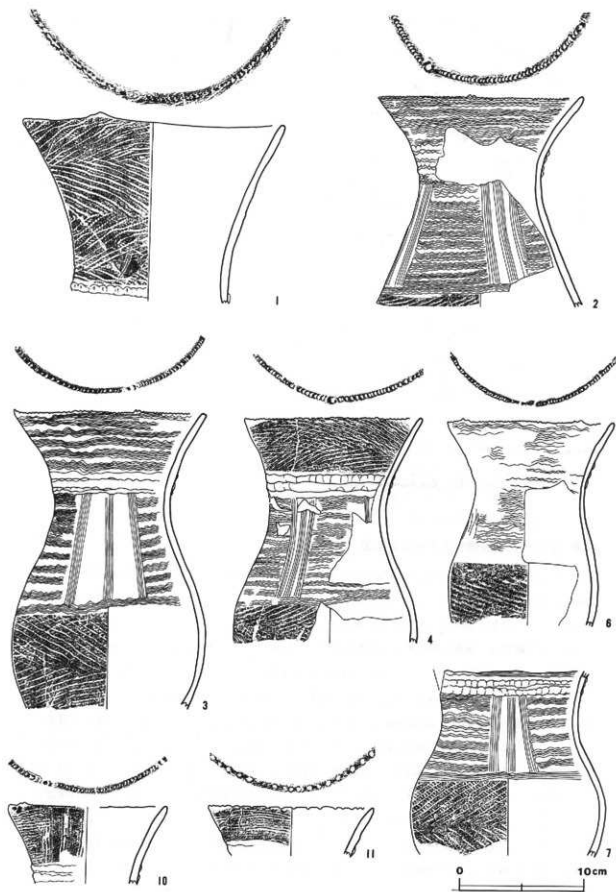
遺物 弥生土器細片約1,300点が出土しているが、ほとんどが胴部片で口縁部や底部は微量である。出土状況や接合状況から、土器片は広範囲に散在して出土している。第45～48図1は大形広口壺の口縁部でP₂～P₄



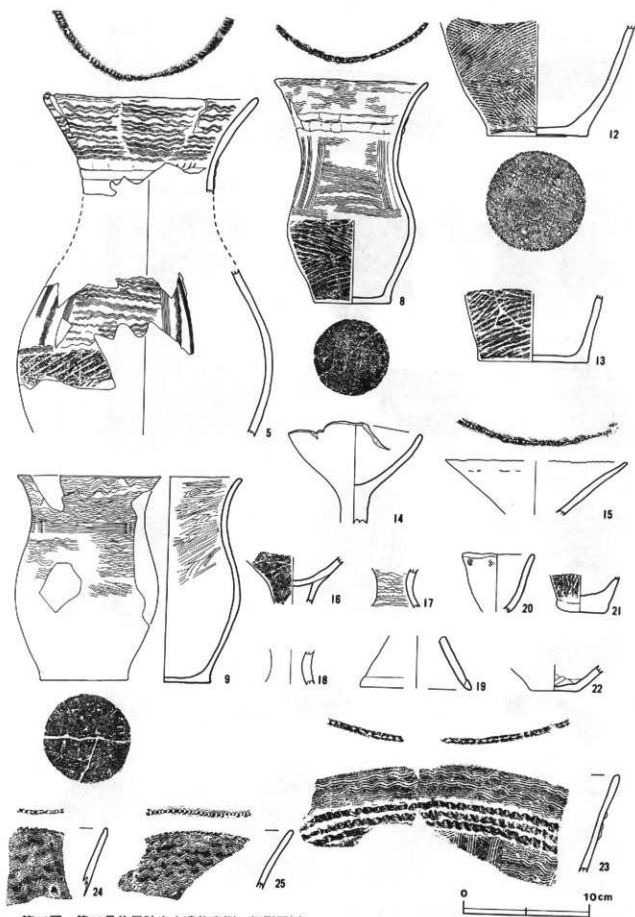
第44図 第19号住居跡遺物出土状況実測図

岡の覆上中層から、2の口縁部から頸部は炉1南西部からP₁付近にかけての覆上下層から散在して出土した破片を接合したものである。3～6は口縁部から胴部で、3はP₃南部からつぶれた状態で横位で、4はP₁付近から、5は炉1南西部を中心に広い範囲から、6はP₃南部からそれぞれ覆土下層より出土している。7の頸部から胴部は、南西壁際の覆上下層から出土している。8・9は小形広口壺で、8は北東壁寄りの床面直上からつぶれた状態で横位で、9は炉1南西部から北東部にかけての覆土中層から下層にかけて広範囲に出土している。10の口縁部片はP₁付近の覆土中層から、11の口縁部片はP₁付近の覆上下層から出土している。12の胴部から底部はP₁北部の覆上下層から、13の底部は炉1から炉2にかけての覆上下層から出土している。14の高坏口縁部から脚部は炉2からP₃にかけての覆土上層から、15の高坏坏部・16の高坏坏部から脚部はP₃からP₂間にかけて出土し、15は覆土中層から、16は覆土下層から出土している。17～19の脚部片、20のミニチュア土器片は炉1北西部から出土しており、17は覆土中層から、18・19・20は床面直上から出土している。21のミニチュア土器片は炉2からP₁にかけての覆上下層から出土している。22は小形甕の底部と思われ、北部の覆土中から出土している。56は炉1西部の覆土中から、57の紡錘車、60の磨石は炉1西部の覆土下層から、59の磨石はP₃南部の覆上下層から、58の上玉は炉1付近の覆土下層から出土している。

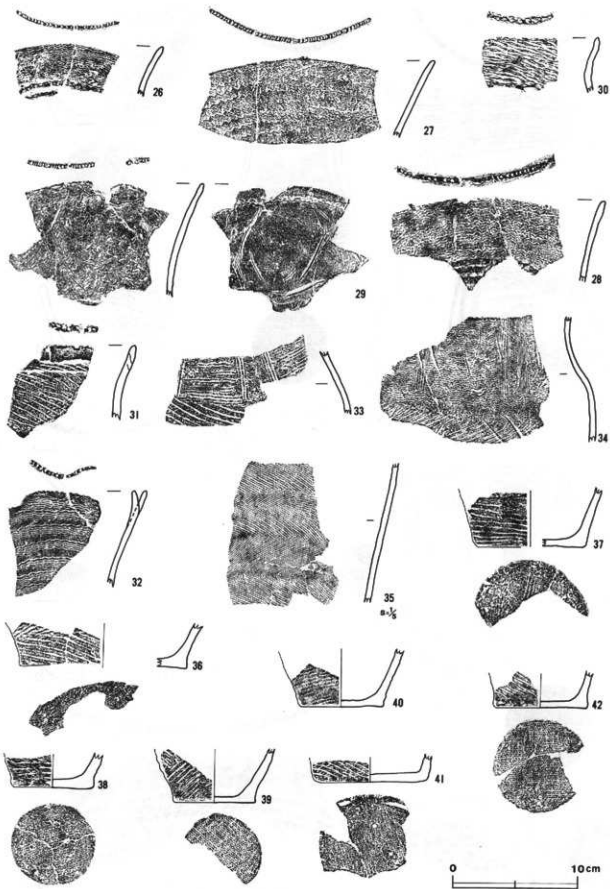
所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と思われる。



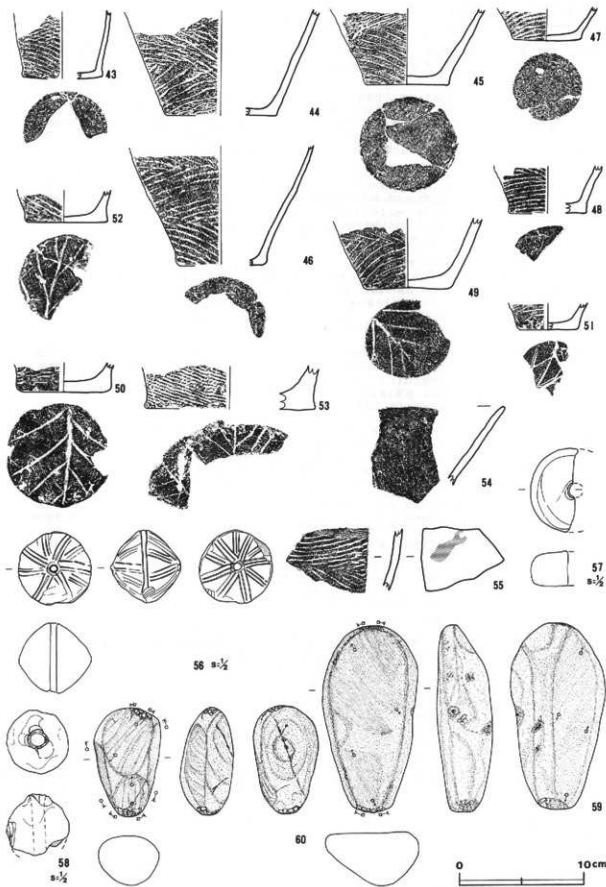
第45图 第19号住居跡出土遺物実測図(1)



第46图 第19号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)



第47图 第19号住居跡出土遺物実測・拓影图(3)



第48图 第19号住居跡出土遺物実測・拓影图(4)

第19号住居跡出土遺物観察表

図録番号	分類	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第45回 1	大型広口壺 弥生土器	A [20.8]	口縁部、口頸部は縄文が施され、突起が(2か所)付く。口縁部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。頸部下端に隆帯が施付されている。	長石、スコリア におい褐色 良好	P92、P.L18、20% PカーP覆土中層
		B (14.3)			
2	広口壺 弥生土器	A 16.6	口縁部一胴部、口頸部はヘラ状工具による削みがあり、突起が(3か所)付く。口縁部は磨面状工具(5本)による波状文が施されている。口縁部と胴部の境には低い隆帯が3条走り、軽い押圧がある。頸部は磨面状工具による縦区画により3条を単位に3分割され、区画内は波状文が密に施されている。胴部と胴部の境には波状文が高る。胴部は縄文が施されている。	長石、スコリア におい褐色 普通	P94、P.L30、30% 外面スス付着 二次焼成直 PカーPs覆土下層
		B (16.9)			
		H 9.7			
3	広口壺 弥生土器	A 13.4	口縁部一胴部、口頸部はヘラ状工具による削みがあり、突起が(3か所)付く。口縁部は磨面状工具(6本)により波状文が施されている。口縁部と胴部の境は低い隆帯が3条走り軽い押圧がある。胴部は磨面状工具による縦区画により3条を単位に3分割され、区画内は波状文が施されている。胴部と胴部の境には波状文が高る。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され羽状構成をとる。	パミス 灰青褐色 普通	P93、P.L19、70% 外面スス付着 Ps南部覆土下層
		B (23.4)			
		H 9.2			
		I 13.5			
4	広口壺 弥生土器	A 14.2	口縁部一胴部、口頸部はヘラ状工具による削みがあり、突起が(2か所)付く。口縁部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。口縁部と胴部の境は低い隆帯が3条走り軽い押圧がある。胴部は磨面状工具(4本)による縦区画により3条を単位に4分割され、区画内は波状文が密に施されている。胴部と胴部の境には波状文が高る。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。	長石、石英、砂粒 褐色 普通	P95、P.L20、60% 二次焼成直 P付近覆土下層
		B (18.0)			
		H 9.1			
第46回 5	広口壺 弥生土器	A [17.0]	口縁部一胴部、全体が磨成している。口頸部はヘラ状工具による削みがあり、突起が(1か所)付く。口縁部は磨面状工具(5本)により波状文が施されている。口縁部と胴部の境は低い隆帯が3条走り軽い押圧がある。胴部は磨面状工具による縦区画により3条を単位に4分割され、区画内は波状文が密に施されている。	長石、砂粒 におい黄褐色 普通	P96、P.L20、25% 二次焼成直 知内南西側覆土下層
		B (27.0)			
第45回 6	広口壺 弥生土器	A 13.2	口縁部一胴部、全体に火焼によると思われる割傷。口頸部はヘラ状工具による削みがあり、突起が(3か所)付く。口縁部は磨面状工具により波状文が施されている。口縁部と胴部の境は低い隆帯が3条走り軽い押圧がある。胴部は磨面状工具による縦区画により3条を単位に4分割され、区画内は波状文が密に施されている。胴部は縄文が施されている。	長石、石英、砂粒 におい褐色 普通	P93、P.L20、60% 外面スス付着 二次焼成による割傷 Ps南部覆土下層
		B (16.1)			
		H 8.5			
		I 10.5			
7	広口壺 弥生土器	B (14.9)	胴部一胴部、口縁部と頸部の境は低い隆帯が3条走り軽い押圧がある。胴部は磨面状工具(5本)による縦区画により3条を単位に4分割され、区画内は波状文が施されている。胴部と胴部の境には波状文が高る。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英 におい褐色 普通	P90、P.L20、25% 二次焼成直 南西側覆土下層
		H [11.0]			
		I 15.6			
第46回 8	小型広口壺 弥生土器	A 12.2	口縁部はヘラ状工具による削み。口縁部は磨面状工具(5本)による波状文が施されている。口縁部と胴部の境は低い隆帯が2条走り、軽い押圧がある。胴部は磨面状工具による縦区画により3条を単位に3分割され、区画内は波状文が施されている。胴部と胴部の境には波状文が高る。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底部平直。	長石、石英 におい褐色 普通	P91、P.L21、55% 外面スス付着 二次焼成直 北東部床面
		B 17.6			
		C 6.0			
		H 7.8			
		I 10.1			
9	小型壺 弥生土器	A 11.4	全体に磨成している。口縁部は1単位7条とと思われる磨面波状文を4、5段重ねる。胴部には糸の3連止脈状文が3単位確認できる。1単位8条と思われる。胴部上位は波状文が3段からなり、中位には1帯走りが見られる。内面口縁一胴部下位にかけて磨きがある。	長石、石英 スコリア におい褐色 普通	P92、P.L21、70% 外面スス付着 二次焼成直 知内南西側覆土下層
		B 16.3			
		C 7.0			
		H 8.9			
		I 11.4			
第45回 10	広口壺 弥生土器	A [12.8]	口縁部片。口頸部はヘラ状工具による削みがあり、突起が(2か所)付く。口縁部は磨面状工具(4本)による縦区画により3条を単位に3分割され、区画内は波状文が施されている。口縁部と胴部の境は低い隆帯が2条走り軽い押圧がある。	長石、石英、雲母 小粒 におい褐色 普通	P94、P.L20、3% 二次焼成直 P付近覆土中層
		B (6.3)			
11	広口壺 弥生土器	A [13.4]	口縁部片。口頸部は磨面状工具による削みがあり、突起が(2か所)付く。口縁部は磨面状工具(4本)による縦区画により3条を単位に3分割され、区画内は波状文が施されている。口縁部と胴部の境は低い隆帯が2条走り軽い押圧がある。	長石、石英、雲母 小粒 におい褐色 普通	P95、P.L21、5% P付近覆土下層
		B (3.9)			
第46回 12	壺 弥生土器	B (8.9)	胴部一胴部。胴部は附加条一種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底部平直。	長石、石英、スコリア におい褐色 普通	P97、P.L21、10% 外面スス付着 Ps北部覆土下層
		C 8.0			
13	壺 弥生土器	B (5.4)	胴部、胴部は附加条一種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	金雲母、砂粒 におい褐色、普通	P98、P.L21、5% 知内近覆土下層
		C 8.7			

図版番号	器 種	計測値(cm)			器形の特徴及び支持	胎土・色別・装成	備 考
		最大長	最大幅	最大厚			
第16図 14	高 環 糸生土器	A	10.7		片口を有する高環。片口になる部分の1唇部は高くなる。内・外面ナデ。	長石、石英、金雲母 スコリア にふい黄褐色。普通	P109, P.L21, 20% P3付近層土中層
		B	(7.8)				
		E	(2.1)				
15	高 環 糸生土器	A	[14.5]		高環環部。口唇部は縄文による押圧。環部内・外面割りの後、ナデ。	長石、石英、金雲母 スコリア にふい黄褐色。普通	P110, P.L21, 20% P3-P3覆土中層
		B	(4.2)				
16	高 環 糸生土器	B	(3.7)		環部と胴部の接合部分。環部下位・胴部1位に縄文が施されている。	長石、石英、金雲母 にふい黄褐色 普通	P111, P.L21, 5% P3-P3覆土下層
17	高 環 糸生土器	B	(3.1)		胴部。縄文状工具(3本)により波状文が施されている。	長石、石英、金雲母 にふい褐色。普通	P112, P.L21, 5% 伊1北部腹土中層
18	高 環 糸生土器	B	(2.8)		胴部。外面ナデ。	長石、石英、金雲母 スコリア にふい黄褐色。普通	P113, P.L21, 5% 伊1北部床面
19	高 環 糸生土器	B	(4.2)		脚部片。脚部は「ハ」字状に開く。脚部下縁は粘土を付加し延長している。内・外面ナデ。	長石、石英、スコリア にふい褐色 普通	P115, P.L21, 10% 伊1北部床面
		D	[9.0]				
20	ミニチュア 土 器 糸生土器	A	5.8		底部欠損。口縁上部に2孔を有する。内・外面ナデ。	長石、石英、スコリア にふい黄褐色 普通	P114, P.L21, 70% 伊1北部床面
		B	(4.6)				
21	ミニチュア 土 器 糸生土器	A	(2.9)		底部は厚く、やや突出している。胴部にかけて縄文が施されている。	長石、スコリア にふい褐色 普通	P116, 5% P3覆土下層
		C	3.9				
22	小形美 土 器	B	(2.1)		底部片。外面割りの後、ナデ。内面ヘラ削り。	長石、石英、スコリア にふい褐色 普通	P108, P.L21, 5% 北部腹土中層
		C	3.8				

第46～48図23～55は、本跡から出土した糸生土器片の拓影図である。23～32は口縁部片で、23・24は口唇部に縄文が施され、25・26はヘラ状工具による削みがあり、口縁部は波状文が施されている。27・28は1唇部にヘラ状工具による削みがあり突起が付く。29は内面上位にも波状文が施されている。30は口縁部に附加条の縄文が施されている。31は2段の複合口縁で下位には附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。32は片口を有する壺形土器の口縁部片で、片口の部分は高まりがある。33～34は胴部片である。35は胴部片で附加条一種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。36～53は底部片である。36～52は胴部に附加条二種(附加1条)の縄文、53は附加条一種(附加2条)の縄文が施されている。底部は36～48が布目痕、49～53が木葉痕である。なお、35と53は同一一体と思われる。54は高環環部片である。55は胴部片で内面に赤色物が付着している。

図版番号	器 種	計 測 値 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現 存 率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第48図 56	結 縄 車		3.9	3.9	3.7	4.0	(42.5)	98	覆 土 中 層 DP10, P.L28
			(4.5)	(2.4)	(1.9)	—	(21.9)	50	覆 土 下 層 DP12
			(2.9)	3.5	3.2	12.0	(29.8)	80	覆 土 下 層 DP11, P.L29

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第48図 59	磨 石	14.9	7.6	4.5	648.8	砂 岩	覆 土 下 層 Q46, P.L30	
60	磨 石	8.6	5.3	4.3	254.5	砂 岩	覆 土 下 層 Q48, P.L30	

第20号住居跡 (第50図)

位置 調査区の中央部, C2hs区。

重複関係 北壁を第21号住居跡に, 南東壁を第1号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸(4.2)m, 短軸(4.1)mの隅丸方形をしている。

主軸方向 N-1°-W

壁 壁高は8cmで, 外傾して立ち上がる。西から南壁付近は, ゆるやかな傾斜地であることと全体の掘り込みが浅いことから壁の立ち上がりを確認できない。

床 平坦で, 炉と南壁の間には締まりのある硬化面がある。

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₄は長径35~40cm, 短径30cmの不正楕円形で, 深さ45~50cmで柱穴と思われる。P₅は直径32cmの円形で深さ60cmであり, 掘り込みが住居外に向かって傾いていることから出入り口施設に伴うものと思われる。

炉 中央部よりやや北側に位置し, 長径110cm, 短径60cmの不正楕円形で床を5cmほど掘り覆めた地床炉である。中央は火熱を受けたロームがブロック状に硬化している。

炉土層解説

1 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量

覆土 3層からなる。レンズ状の堆積を示していることから, 自然堆積と考えられる。

土層解説

1 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

2 褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

3 褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

遺物 弥生土器細片約100点が出土しているが, ほとんどが胴部片で口縁部や底部は微量である。第49図1は, 壺の胴部から底部片で, P₁東部の床面直上から出土している。2は紡錘車で覆土中から出土している。

所見 本跡は, 出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。

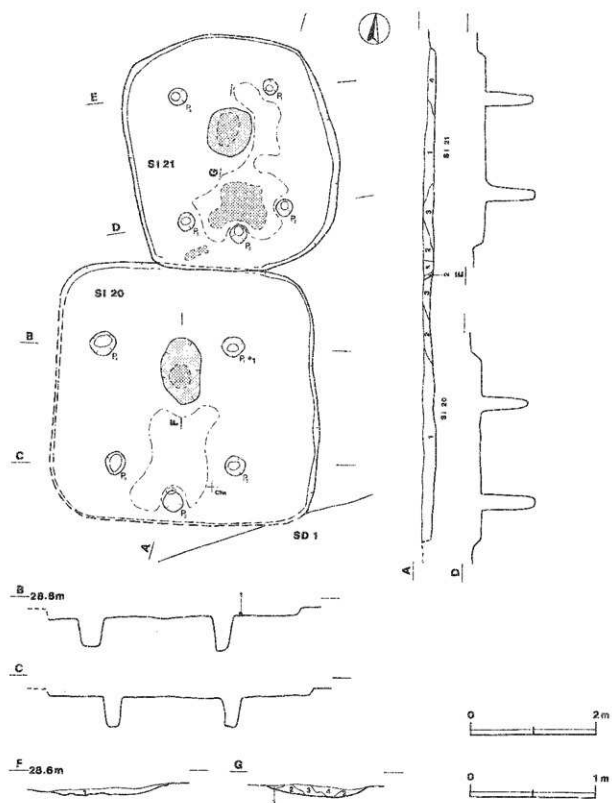


第49図 第20号住居跡出土遺物

第20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第49図 1	壺 弥生土器	B (5.3) C 9.1	胴部~底部片。胴部は附加条二條(附加1条)の縄文が施されている。底部有目録。	長石, 石英, スコリア にふい褐色 普通	P117, P.122, 10% P1東部床面

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第49図 2	紡錘車	(3.6)	(1.9)	(3.4)	—	(13.6)	20	覆土中	DP22



第50图 第20·21号住居跡実測图

第21号住居跡 (第50図)

位置 調査区の中央部, C2g₁区。

重複関係 南壁は, 第20号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.9m, 短軸3.3mの隅丸長方形をしている。

主軸方向 N-15°-W

壁 壁高は10から15cmで, 外傾して立ち上がる。

床 平坦で, 東から南部に炬を囲むように締まりのある硬化面がある。P₃付近には焼土及び炭化材・炭化物が散在している。

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₄は直径25~30cmの円形で, 深さ75~85cmで柱穴と思われる。P₅は直径30cmの円形で深さ28cmであり, 掘り込みが住居外に向かってやや傾いていることから出入り口施設に伴うものと思われる。

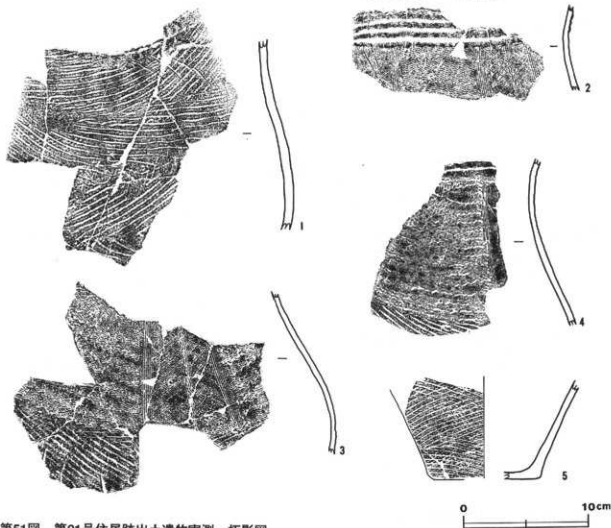
炉 中央部よりやや北側に位置し, 長径80cm, 短径70cmの不正楕円形で床を8cmほど掘り窪めた地床炉である。

中央は火熱を受けたロームがブロック状に赤変硬化している。

炉土層解説

1 褐色 ローム粒子少量, 焼土小ブロック・焼土粒子微量
2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・炭化小ブロック・焼土粒子少量

3 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量, ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
4 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子微量, 炭化粒子少量, ローム粒子微量



第51図 第21号住居跡出土遺物実測・拓影図

覆土 4層からなる。炭化材・炭化物・焼土ブロックを含み、不自然な堆積状況を示していることから人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------------|-------|------------------------------------|
| 1 灰褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化物微量 | 3 灰褐色 | ローム粒子・炭化物・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量、炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量 | 4 褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化物・炭化粒子少量、ローム小ブロック微量 |

遺物 床面からの出土遺物はない。流れ込みと考えられる弥生土器細片が、胴部片を中心に約80点出土している。

所見 本跡は、床面に炭化材や焼土ブロックが見られることから焼失家屋の可能性が高い。遺構に伴う遺物が出土していないことから時期不明である。

第51図1～5は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。1～4は頸部から胴部片で、胴部には附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。3の頸部は、櫛歯状工具（7本）により縦区画され、区画内を波状文、スリット内を格子目文が施されている。5は、底部で附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。

第22号住居跡（第53図）〈付章参照〉

位置 調査区の北西部、C2c4区。

規模と平面形 長軸4.1m、短軸3.7mの隅丸方形をしている。

主軸方向 N-23°-W

壁 壁高は45～48cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、P₄北側に締まりのある硬化面がある。北壁と南西コーナー付近には多量の炭化材が散在している。如から東壁にかけての床面は、火熱を受け赤変硬化している。

ピット 5か所（P₁～P₅）。P₁～P₄は長径30cm、短径25cmの不正楕円形で、深さ45～50cmで柱穴と思われる。P₅は直径30cmの円形で、深さ45cmで出入り口施設に伴うものと思われる。

炉 中央部に位置し、長径120cm、短径100cmの不正楕円形で床を8cmほど掘り窪めた地床炉である。全体に火熱を受けたロームがブロック状に赤変硬化している。

伊土層解説

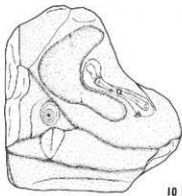
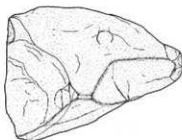
- 1 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量、焼土中ブロック微量

覆土 7層からなり、床面まで攪乱が入る。炭化物・炭化粒子・焼土粒子を含む。不自然な堆積状況を示しており、人為堆積と考えられる。

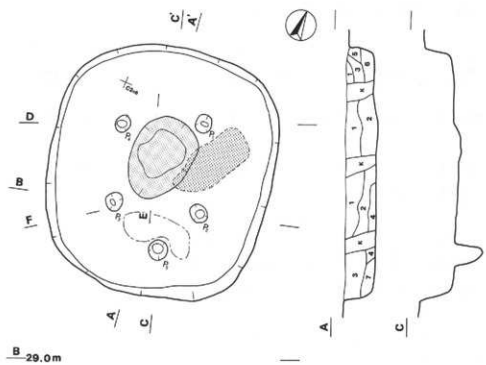
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子・炭化材・焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子少量
- 5 褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、炭化物・焼土粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子・炭化材中量、炭化粒子・焼土粒子少量
- 7 褐色 炭化材・炭化粒子・焼土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック少量

遺物 弥生土器細片約60点が出土しているが、ほとんどが胴部片で口縁部や底部は微量である。第52・54図1は広口壺の頸部から底部で南西



第52図 第22号住居跡出土遺物実測図(1)

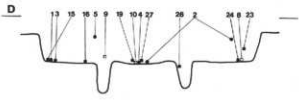


B 29.0m

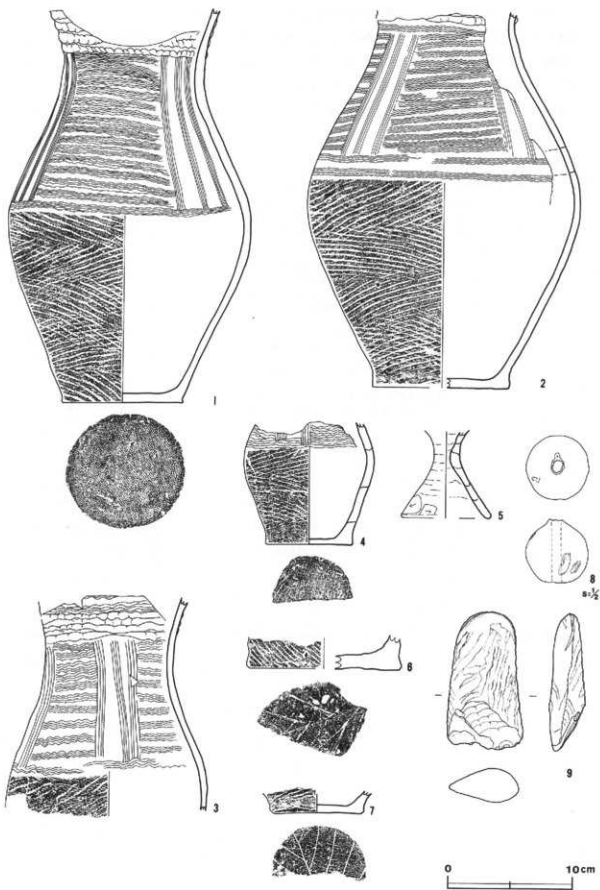


E 28.4m

F 29.0m



第53图 第22号住居跡実測图



第54图 第22号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

壁に立てかけるように正位で、2の頸部から底部は南壁に立てかけるように逆位で出土している。3の頸部から胴部は1の北となりの床面直上から横位で、4の胴部から底部片は炉付近の床面直上から、5の高坏胴部は南西コーナー付近の覆土上層から出土している。8の上玉は北東コーナー壁際の床面直上から、9の石斧はP₁~P₂間の覆土下層から出土している。10は台石である。

所見 本跡は、床面に多量の炭化材・焼土がみられることから焼失家屋の可能性が高い。時期は、出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

第22号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特征及び文様	胎土・色調・焼成	備 考
第54回 1	広口壺 弥生土器	B (31.8)	頸部~底部。胴部上段は低い唇帯が4条張り軽い押圧がある。胴部は御歯状工具(5本)による縦区画により3条を単位に3分割され、区画内は流状文が密に施されている。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底部も同様。	長石、石英、雲母 スコリア にぶい黄褐色 普通	P119, P122, 90% 外面スス付着 二次焼成痕 南西角床面
		C 9.8			
		H 11.1 I 19.4			
2	広口壺 弥生土器	B (30.2)	頸部~底部。胴部上段にわずかに唇帯を確認できる。胴部は御歯状工具(4本)による縦区画により3条を単位に分割され、区画内ははてな流状文が密に施されている。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底部も同様。	長石、石英 スコリア 灰色 普通	P120, P122, 40% 外面スス付着 二次焼成痕 南壁床面
		C (11.0)			
		I 21.8			
3	広口壺 弥生土器	B (17.1)	頸部~胴部。口縁部にわずかに流状文が確認できる。口縁部と胴部の境は低い唇帯が3条張り軽い押圧がある。胴部は御歯状工具(4本)による縦区画により3条を単位に4分割され、区画内は流状文が施されている。胴部と胴部の境には流状文が通る。胴部は縄文が施されている。	長石、石英、砂粒 明黄褐色 普通	P500, P122, 20% 外面スス付着 南西部床面
		H 10.2			
		I (16.0)			
4	壺 弥生土器	B (9.8)	頸部~底部片。頸部と胴部の境には流状文が通る。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底部も同様。	長石、石英、雲母 にぶい褐色 普通	P121, P122, 30% 外面スス付着 二次焼成痕 炉付近床面
		C 7.0			
5	高坏 弥生土器	B (7.0)	胴部。内・外面に輪帯み収が残る。外面周りの段ナデ。	石英、金雲母 スコリア にぶい褐色 普通	P122, P122, 10% 外面スス付着 南西部覆土上層
		C (7.2)			
		E 5.5			

第54回6・7は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。6・7ともに底部片で、底部は木葉痕である。6は附加条一種(附加2条)の縄文が、7は附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。

図版番号	器 種	計 測 値 (cm)			孔 徑 (mm)	重 量 (g)	現 存 率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第54回 8	土 瓦	(3.5)	3.4	3.4	5.0	37.7	100	床 面 直 上	D P13, P129

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第54回 9	石 斧	10.1	6.1	2.9	219.1	88>7.5&5	覆 土 下 層	Q55, P129
第52回 10	台 石	25.0	23.9	17.9	(9700.0)	砂 岩	床 面 直 上	Q54, P129

第23号住居跡 (第55図)

位置 調査区の西北部, D2a区。

重複関係 中央部に南北に第2号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.8m, 短軸3.5mの隅丸方形をしている。

主軸方向 N-24°-W

壁 壁高は20cmで, 外傾して立ち上がる。

床 平坦である。東壁・南東コーナー・北西コーナーに硬化面, P₁・P₂・P₃・P₄付近に焼土が確認できる。

全面に炭化粒子, 北西壁・東壁付近には炭化材が確認できる。

ピット 6か所 (P₁~P₆)。P₁~P₄は長径24cm, 短径20~24cmの不正楕円形または円形, 深さ40~50cmで柱穴と思われる。P₅は長径28cm, 短径24cmの楕円形, 深さ40cmで出入り口施設に伴うものと思われる。P₆は直径20cmの円形, 深さ25cmで性格は不明である。

炉 中央部より北側に位置している。第2号溝に掘り込まれ, 火熱を受け赤変したロームがわずかに確認できるだけである。規模・平面形は不明である。

覆土 4層からなり, 中央に第2号溝の覆土が入る。

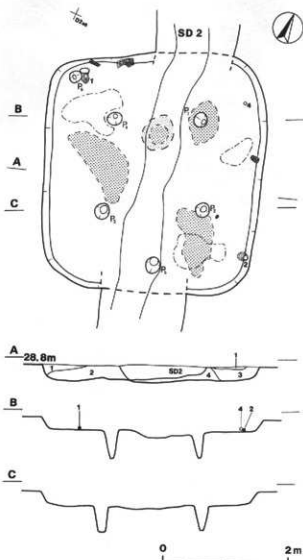
炭化物・炭化粒子・焼土粒子を含む。不自然な堆積状況を示しており, 人為堆積と考えられる。

土層解説

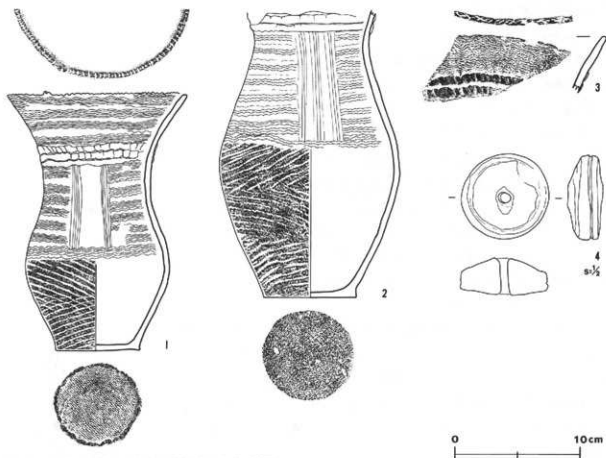
- 1 灰褐色 ローム粒子・炭化材少量, 炭化粒子・焼土粒子微量
- 2 灰褐色 ローム粒子・炭化材・炭化粒子中量, 焼土粒子微量
- 3 褐色 炭化粒子多量, ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 4 暗灰色 炭化材・炭化粒子・ローム粒子・焼土粒子中量, ローム小ブロック少量

遺物 弥生土器細片約30点が出土しているが, ほとんどが胴部片で口縁部や底部は微量である。第56図1は広口壺でP₄付近の北壁に, 2の頸部から底部は南東コーナー付近の東壁にそれぞれたかけるように正位で出土している。4の紡錘車は, 北東コーナー付近の床面直上から出土している。

所見 本跡は, 床面に多量の炭化材・焼土がみられることから焼失家屋の可能性が高い。時期は, 出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。



第55図 第23号住居跡実測図



第56図 第23号住居跡出土遺物実測・拓影図

第23号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考	
第56図 1	広口壺 弥生土器	A	14.5	口唇部はヘラ状工具による割みがあり、突起が2か所付く。口縁部は繩 歯状工具(6本)による波状文が施されている。口縁部と頸部の境は強い隆 帯が3条走り軽い押圧がある。頸部は繩歯状工具による縦区画により3分 割され区画内は波状文が施され、頸部と胴部の境には波状文が走る。胴部 は附加条二條(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底部も目直。	灰石、スコリア 橙色 普通	P123, P.L22, 98% 外面スス付着 二次焼成痕 P付近床面
		B	20.7			
		C	6.7			
		H	8.5			
		I	11.6			
第56図 2	広口壺 弥生土器	B	(23.0)	頸部～底部。頸部上端にわずかに隆帯が確認できる。頸部は繩歯状工 具(3本)による縦区画により3条を単位に4分割され、区画内は波状 文が施されている。頸部と胴部の境には波状文が走る。胴部は附加条 二條(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底部も目直。	長石、石灰、砂粒 にぶい黄褐色 普通	P124, P.L22, 90% 外面スス付着 底部磨痕? 南東壁床面
		C	7.4			
		H	[9.2]			
		I	14.4			

第56図3は、本跡から出土した弥生土器片口縁部の拓影図である。口唇部は縄文が施され、口縁部は波状文、下位に隆帯が2条貼付されている。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第56図 4	紡錘車	4.6	4.6	1.9	5.0	41.9	100	床面直上	DP14, P.L28

第24号住居跡 (第57図)

位置 調査区の中央部、C36区。

規模と平面形 長軸5.7m、短軸5.1mの長方形をしている。

主軸方向 N-32'-E

壁 壁高は10~20cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、北東コーナー・知東部・南部に輪まりのある硬化面が確認されている。南部は耕作による擾乱が床面にまで入る。

ピット 11か所 (P₁~P₁₁)。P₁は直径22cmの円形で深さ28cm、P₂は直径32cmの円形で深さ24cm、P₃は長径40cm、短径22cmの不正楕円形で深さ60cm、P₄は直径28cmの円形で深さ53cmであり柱穴と思われる。P₅は直径25cmの円形で、深さ25cmで出入り口施設に伴うものと思われる。P₆~P₇は直径28cmほどの円形で、深さ15~25cmである。これらの性格は不明であるが、位置関係からP₇・P₈は柱穴の可能性もある。P₁₀・P₁₁は住居南壁から外側40~60cmに位置し、P₁₀は直径30cmの円形で深さ70cm、P₁₁は長径40cm、短径30cmの不正楕円形で深さ75cmであり、P₉も含めて出入り口施設に伴うピットの可能性がある。

炉 中央部よりやや北側に位置し、長径85cm、短径[70]cmの不正楕円形で、床を5~8cmほど掘り窪めた地床知である。中央部は、火熱を受け焼上ブロックが形成され硬化している。炉石は砂岩で、知の長軸に直行するように知床の南側に据えられ、炉中心部にあたる面は火熱を受けにぶい黄褐色に変色し、もろく剥離している。

炉土層解説

- 1 焼褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 3 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量

覆土 3層からなる。一部耕作による擾乱が床面に達する。レンズ状の堆積をしており自然堆積と考えられる。

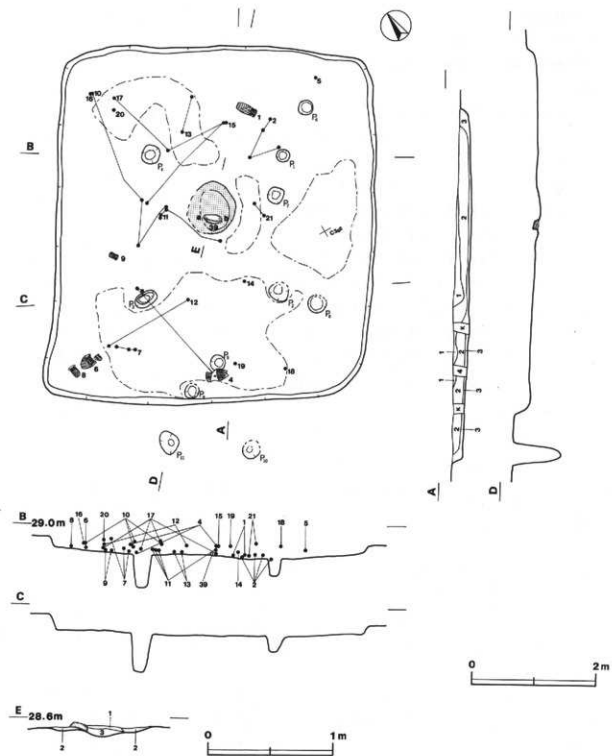
土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子・焼土粒子微量

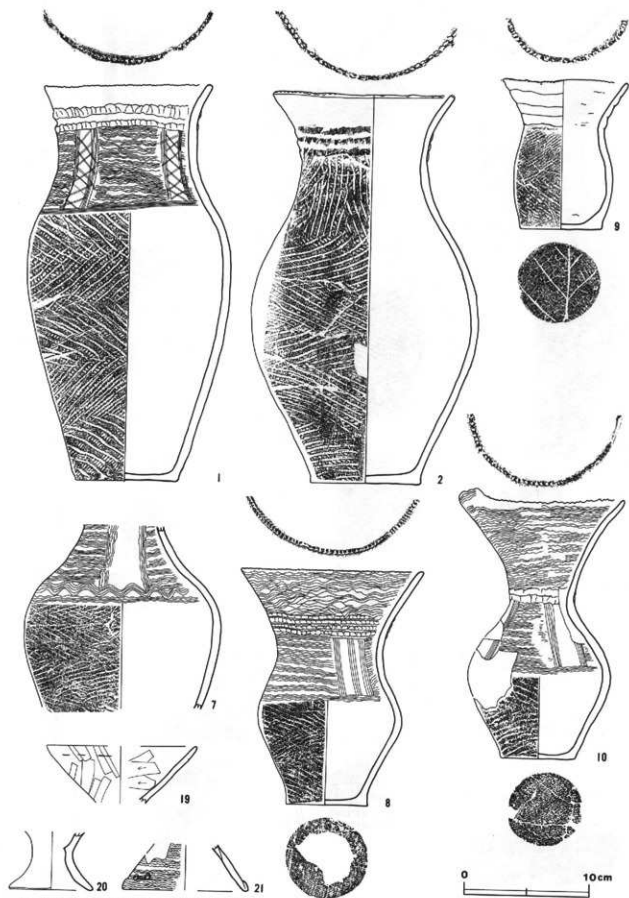
遺物 弥生土器細片約700点が出土しているが、ほとんどが胴部片で口縁部や底部は微量である。第58~61図

- 1は広口壺でP₁西部の床面直上から横位で、2の広口壺はP₁北部の床面直上から出土している。3の広口壺は覆土中から出土した破片を接合したものである。4の口縁部から胴部片でP₁~P₂付近の覆土中層から、5・6は頸部から底部で、5は北東コーナー付近の覆土中層から、6は南西コーナー覆土下層から出土している。7の頸部から胴部片はP₁南の覆土上層~下層から、8の小形広口壺は南西コーナーの床面直上から横位で、9の小形広口壺はP₁北部の床面直上から出土している。10は片口を有する広口壺で知西部の覆土中層から出土している。11は口縁部片で炉西部の覆土下層から、12は口縁部から胴部片でP₁南部の覆土中層から出土している。13・14は胴部から底部で、13はP₁北部の床面直上から、14はP₁西部覆土下層から出土している。15は小形壺の胴部から底部でP₁付近の覆土中層から出土している。16・17は胴部から底部で、16は北西コーナー付近の覆土下層から、17はP₁付近の覆土下層から、18は胴部から底部片で南東コーナー付近の覆土上層から出土している。19は高坏部片でP₁東部覆土上層から、20は高坏部で北側コーナー付近の覆土上層から、21は高坏部片で知東部覆土下層から出土している。38は敲石で覆土中から出土している。39は炉石である。

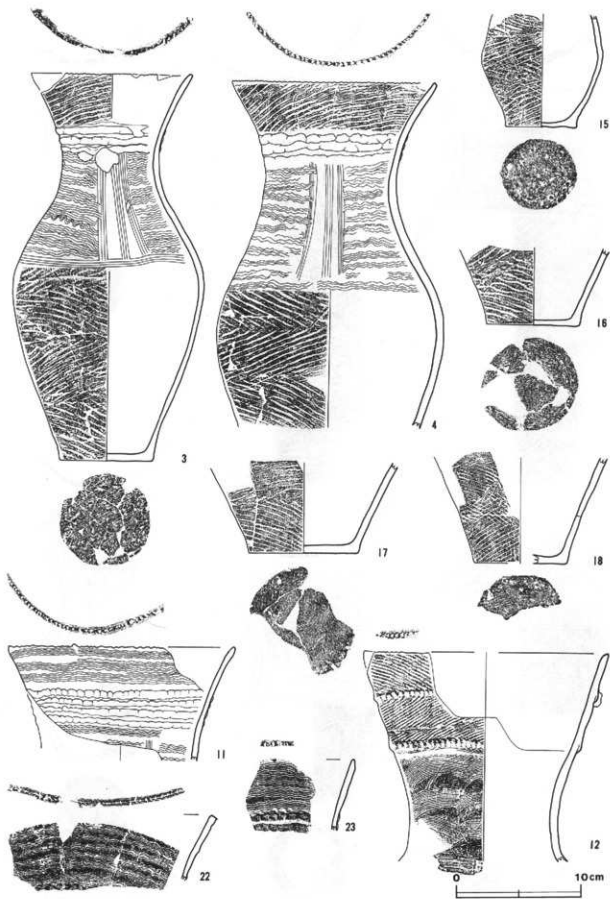
所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と思われる。



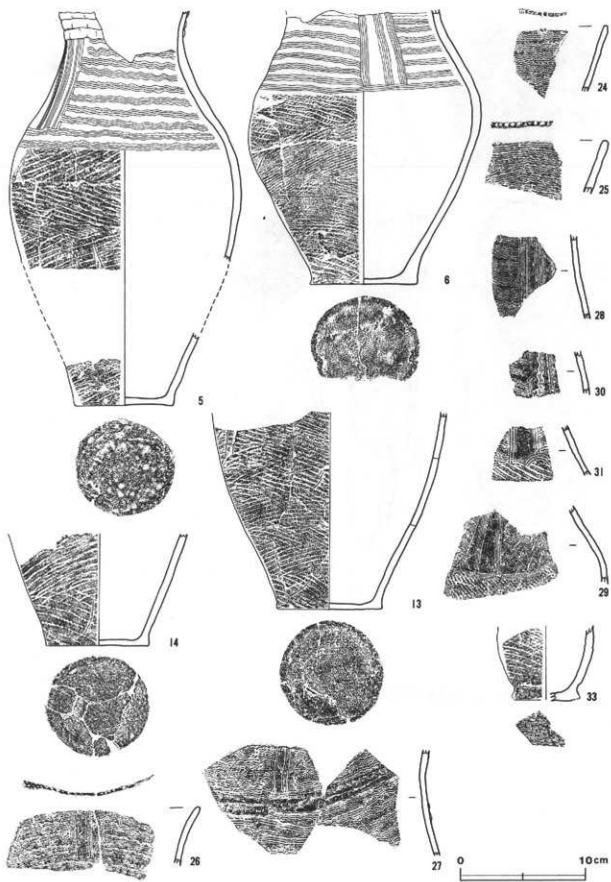
第57图 第24号住居跡実測图



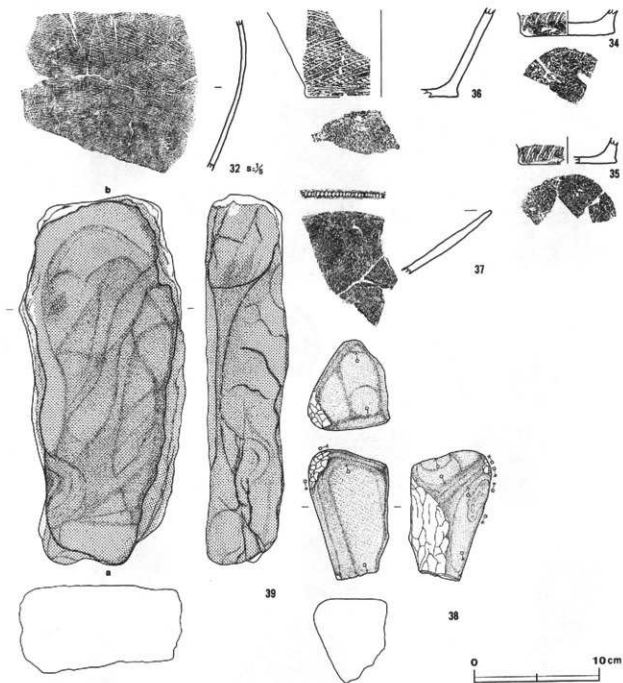
第58图 第24号住居跡出土遺物実測図(1)



第59图 第24号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)



第60图 第24号住居跡出土遺物実測・拓影図(3)



第61图 第24号住居跡出土遺物実測図(4)

第24号住居跡出土遺物観察表

図録番号	品 種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・構成	備 考	
第58図	1	広口壺 弥生土器	A 13.6	口唇部は縄文が施され、口縁部は無文。口縁部と頸部の境は隆帯が2条走り、指痕による押圧がある。頸部は櫛歯状工具(5本)による縦文が画により4分割され、スリット内は棒子目文。区画内は波状文が施されている。頸部と胴部の境には横文が走る。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され羽状構成をとる。	長石、石英、金雲母 にふい褐色 普通	P125、P.123、98% 外面スス付着 P6西部床面
			B 31.8			
			C 8.2			
			H 11.2			
			I 16.4			
2	広口壺 弥生土器	A [14.7]	口唇部は縄文が施され、口縁部は無文。口縁部と頸部の境は隆帯が3条走り、指痕による押圧がある。頸部は附加条二種(附加1条)の縄文により縦方向に羽状構成をとる。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され羽状構成をとる。	長石、金雲母、スコリア 黄褐色 普通	P128、P.123、60% 外面スス付着 P1北部床面	
		B 31.2				
		C 8.8				
		H [10.0]				
		I 18.8				
第59図	3	広口壺 弥生土器	A 13.0	口唇部は縄文が施され、口縁部は附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。口縁部と頸部の境には低い隆帯が3条走り、軽い押圧がある。頸部は櫛歯状工具(4本)による縦区画により3条を単位に3分割され、区画内は波状文が施されている。頸部と胴部の境には横文が走る。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底部布目状。	長石、石英、パミス にふい褐色 普通	P127、P.123、80% 外面スス付着 二次焼成痕 覆十中
			B 31.0			
			C 7.4			
			H [7.8]			
			I [15.4]			
4	4	広口壺 弥生土器	A 16.4	口唇部はヘラ状工具による刷み。口縁部は附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。口縁部と頸部の境は低い隆帯が3条走り軽い押圧がある。頸部は櫛歯状工具(4本)による縦区画により3条を単位に3分割され、区画内は波状文が施されている。頸部と胴部の境には波状文が走る。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、パミス にふい褐色 普通	P129、P.123、60% 外面スス付着 二次焼成痕 P6付近覆十中層
			B (27.7)			
			H 10.5			
			H 10.5			
			H 10.5			
第60図	5	広口壺 弥生土器	B (32.0)	頸部～底部、頸部上位には低い隆帯が3条みられる。頸部は櫛歯状工具(4本)による縦区画により3条を単位に分割され、区画内は波状文が施されている。頸部と胴部の境には波状文が走る。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底部は布目状である。	長石、石英、スコリア にふい褐色 普通	P138、P.124、20% 外面スス付着 二次焼成痕 北東部覆十中層
			C 7.9			
			H 8.5			
			H 9.5			
			I 18.6			
6	6	広口壺 弥生土器	B (21.9)	頸部～底部、頸部は櫛歯状工具(4本)による縦区画により3条を単位に4分割され、区画内は波状文が施されている。頸部と胴部の境には波状文が走る。頸部上位・下位は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、中位は滑り糸の縄文体により施文されている。底部は布目状である。	長石 にふい褐色 普通	P133、P.124、60% 外面スス付着 二次焼成痕 南西コーナー上F層
			C 8.5			
			I 18.5			
			I 18.5			
			I 18.5			
第58図	7	壺 弥生土器	B (14.7)	頸部～胴部、頸部は櫛歯状工具(5本)による縦区画により4分割され、区画内は波状文が施されている。頸部と胴部の境は上位に大きな波状文、下位に小さな波状文が走る。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、スコリア にふい黄褐色 普通	P134、P.124、20% 外面スス付着 二次焼成痕 P3南部風土下層
			I [15.7]			
			I [15.7]			
			I [15.7]			
			I [15.7]			
8	8	小形広口壺 弥生土器	A 14.7	口唇部は縄文が施され、口縁部は櫛歯状工具(4本)による波状文が施されている。口縁部と頸部の境は低い隆帯が4条走り軽い押圧がある。頸部は櫛歯状工具による縦区画により3条を単位に3分割され、区画内は波状文が施されている。頸部と胴部の境には波状文が走る。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底部布目状。	石英、パミス にふい黄褐色 普通	P126、P.124、95% 外面スス付着 二次焼成痕 南西部床面
			B 18.9			
			C 6.6			
			H 8.5			
			I 11.6			
9	9	小形広口壺 弥生土器	A 10.1	口唇部は縄文が施され、口縁部は4条の輪轆みねを残す。頸部は附加条二種(附加2条)の縄文、胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底部本葉面。	石英、スコリア 灰褐色 普通	P142、P.124、100% 外面スス付着 二次焼成痕 P3北部床面
			B 11.8			
			C 6.4			
			H 6.4			
			I 8.0			
10	10	広口壺 弥生土器	A 12.5	片口を有する広口壺。口唇部はヘラ状工具による刷み。片口になる部分は高まりがあり、刷みはない。口縁部は櫛歯状工具(5本)による波状文が密に施されている。口縁部と頸部の境は低い隆帯が2条走り、軽い押圧がある。頸部は櫛歯状工具による縦区画により4分割され、区画内は波状文が施される。頸部と胴部の境には波状文が走る。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底部布目状。	長石、パミス スコリア 褐色 普通	P130、P.124、40% 内面刷磨痕 伊西部覆十中層
			B 12.0			
			C 5.8			
			H 5.1			
			I 11.5			
第59図	11	広口壺 弥生土器	A [18.2]	口縁部内、口唇部はヘラ状工具による刷みがあり、突起が(1か所)付く。口縁部は櫛歯状工具(5本)による波状文が施される。口縁部と頸部の境は低い隆帯が4条走り、押圧がある。頸部上位は波状文が施されている。	石英、パミス にふい褐色 普通	P131、P.125、5% 外面スス付着
			B (9.1)			
			B (9.1)			
			B (9.1)			
			B (9.1)			
12	12	壺 弥生土器	A [19.8]	口縁部～胴部内、口唇部は縄文が施され、口縁部上位・下位は附加条二種(附加2条)の縄文が施され、中位・下層は縄文体による刷文が走り、胎帯が1つ付く。頸部はヘラ状工具による下向きの波状文が3条走り、下層には波状文が走る。	長石、石英、パミス スコリア にふい褐色 普通	P135、P.125、15% 内面刷磨痕 P3南部覆十中層
			B (16.5)			
			H [11.8]			
			H [11.8]			
			H [11.8]			

図録番号	器種	計測値(cm)		器形の特徴及び文様	胎土・色調・地文	備考
		口径	高さ			
第60回 13	壺 弥生土器	D (15.8)	8.4	胴部~底部。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状横線をとる。底部布目状。	石灰、スコリア 棕色 普通	P136, P123, 30% 外周スス付着 P4北周床面
		C				
14	壺 弥生土器	B (9.0)	8.2	胴部~底部。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状横線をとる。底部布目状。	長石、パミス、スコリア ぶい褐色 普通	P137, P123, 10% P4内周腹上下折
		C				
第59回 15	小形壺 弥生土器	B (9.1)	5.6	胴部~底部。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状横線をとる。底部布目状。	長石、硝子、小砂、スコリア 褐色 普通	P143, P123, 40% 二次地表面 P4付近遺土層
		C				
		F (9.3)				
16	壺 弥生土器	B (5.9)	7.4	胴部~底部。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状横線をとる。底部布目状。	石灰、パミス ぶい黄褐色 普通	P139, P123, 10% 北周西側土層
		C				
17	壺 弥生土器	B (7.3)	8.7	胴部~底部。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状横線をとる。底部布目状。	石灰 ぶい褐色 普通	P140, P123, 10% P4付近遺土層
		C				
18	壺 弥生土器	B (8.5)	7.6	胴部~底部部。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状横線をとる。底部布目状。	石灰、スコリア、パミス ぶい黄褐色 普通	P141, 5% 調査部覆土上層
		C				
第58回 19	高坏 弥生土器	A (12.0)	(4.6)	唇部片。内・外面ヘラナデ。	石灰、パミス ぶい黄褐色 普通	P141, P123, 5% 内外周スス付着 P3東部覆土上層
		B				
20	高坏 弥生土器	B (4.7)	6.6	唇部。内・外面ナデ。整形は粗い。	長石、石灰、パミス ぶい黄褐色 普通	P145, P121, 10% 北部遺土層
		D				
21	高坏 弥生土器	B (5.7)	(10.2)	唇部片。唇部下面は段をもち、高まりがみられる。外面に歯輪状工具による波状文が施され、2孔を有する。内面ナデ。	長石、石灰、スコリア ぶい褐色 普通	P132, 5% 調査部覆土下層
		D				

第59・60・61回22~37は、本誌から出土した弥生土器片の拓影図である。22~26は口縁部片で、11縁部は波状文が施されている。22~24は口唇部に突起が付く。27~31は頸部片で、27は11縁部に波状文、29は胴部に附加条二種(附加2条)の縄文が施されている。30は縦区画内は波状文、スリット内は縦の波状文が施され、31は逆嵐文と附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。32は胴部片である。33~36は底部片で、35の底部は布目状である。37は高坏部片で口唇部はヘラ状工具による刻みが施され、内・外面にていいいなナデがみられる。

図録番号	器種	計測値				重量(g)	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	容積(g)			
第61回 38	瓶石	6.4	10.5	6.8	564.1	砂岩	Ⅷ 十 中	Q56, P1.30
39	伊石	20.8	13.3	6.6	(3,699.5)	砂岩	Ⅷ 内	Q57, P1.20

第25号住居跡(第62回)

位置 調査区の中央部、C3h.Ⅱ。

規模と平面形 長軸[3.9]m、短軸(1.5)mで、住居跡の北部を除き調査区外であるため、平面形は不明である。

壁 壁高は4cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、耕作による擾乱が床面に入る。

ピット Ⅱか所。P1は長径45cm、短径30cmの楕円形で深さ55cmである。柱穴とも考えられるが、性格は不明

である。

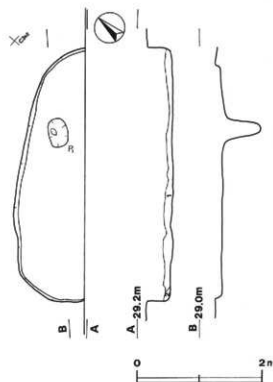
覆土 2層からなる。南西壁側に流れ込みの層が見られ、自然堆積と考えられる。

土層解説

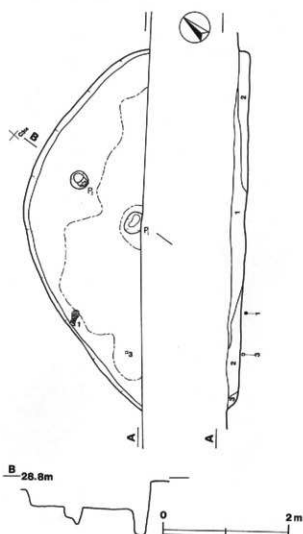
- 1 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量

遺物 床面からの出土遺物はない。覆土中から弥生土器副断片が2点出土している。

所見 本跡は、遺構に伴う遺物が出土していないことから時期不明である。



第62図 第25号住居跡実測図



第63図 第26号住居跡実測図

第26号住居跡 (第63図)

位置 調査区の中央部、C3f区。

規模と平面形 長軸(3.4)m、短軸(1.7)mで、住居跡の北部を除き調査区外であるため、平面形は不明である。

壁 壁高は18~25cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、P₁付近を中心に硬化面が確認できる。

ピット 2か所(P₁・P₂)。P₁は長径35cm、短径28cmの楕円形、深さ40cmで柱穴と思われる。P₂は直径30cmの円形で、2段掘りの形状で深さ30cmである。性格は不明である。

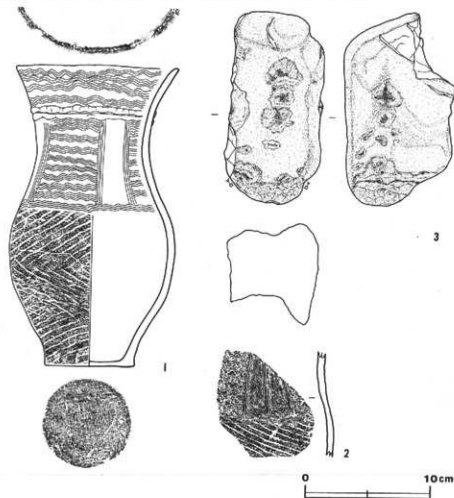
覆土 3層からなる。レンズ状の堆積をしていることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 3 黄褐色 ローム粒子中量

遺物 弥生土器細片約80点が出土しているが、ほとんどが胴部片で口縁部や底部は微量である。第64図1は広口壺で西壁の床面直上から横位で、3の礫石は西壁付近の床面直上から出土している。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と思われる。



第64図 第26号住居跡出土遺物実測・拓影図

第26号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考		
第64図	弥生土器	A	13.0	口唇部は縄文が施され、口縁部は鋸歯状工具(4本)により波状文が施されている。口縁部と胴部の境は低い段帯が2条隆り、軽い押圧がある。	長石、石英、スコリアに多い棕色	P146、P.L25、100% 外周スス付着 二次焼成痕 西壁期床面	
		B	24.0	胴部は鋸歯状工具による縦区画により4分割され、区画内は波状文が施されている。胴部と胴部の境には波状文が通る。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。胴部下位刻線痕。底部有目痕。			
		C	7.2				普通
		H	9.0				
		I	13.3				

第64図2は、本跡から出土した弥生土器頸部片の拓影図である。縦区画内は波状文、頸部と胴部の境は波状文と横走文、胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。

調査番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第64図 3	煎石	15.6	7.7	9.1	(1,230.2)	砂岩	床面直上	Q39

第27号住居跡 (第65図)

位置 調査区の東部, C3b区。

規模と平面形 長軸5.6m, 短軸5.5mの隅丸方形をしている。

主軸方向 N-17°-W

壁 壁高は30~40cmで, 外傾して立ち上がる。

床 中央部から北部は耕作による擾乱が床面に入り, ロームがブロック状に確認される。南部は平坦である。

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁・P₂は直径40cmの円形で深さ70cm, P₃は直径30cmの円形で深さ80cm, P₄は長径30cm, 短径25cmの楕円形で深さ70cmであり柱穴と思われる。P₅は直径25cmの円形, 深さ25cmで出入り口施設に伴うものと思われる。

炉 ほぼ中央部に位置し, 長径[80]cm, 短径[65]cmの[楕円形]で, 床面を5cmほど掘り窪めた地床炉である。炉床は, 擾乱を受けている。中央部は, 火熱を受け焼土がブロック状に硬化している。

炉土層解説

1 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量

覆土 5層からなる。擾乱が激しく, 全体の堆積状況は不明であるが, 南東側の堆積状況等から人為堆積と考えられる。

土層解説

1 型色 ローム粒子少量
2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
5 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量

遺物 弥生土器細片約250点が出土しているが, ほとんどが胴部片で口縁部や底部は微量である。第66・67図

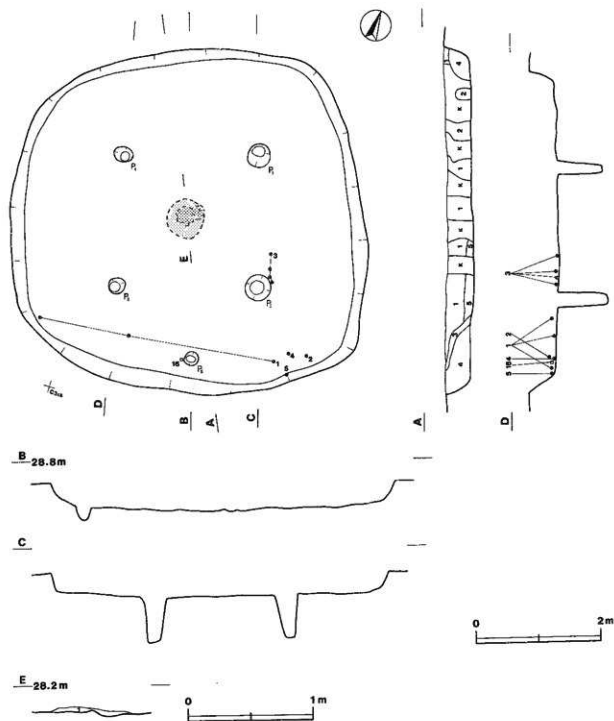
1は大形広口壺の口縁部から頸部で南壁寄りの覆土下層から, 2の人物壺の胴部片は, 南東コーナーの覆土下層から出土している。3の頸部から底部はP₁北部の床面直上から, 4の底部片, 5のミニチュア土器底部は南東コーナー付近の床面直上から出土している。16は灰石で, P₁付近の覆土下層から出土している。

所見 本跡は, 出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と思われる。

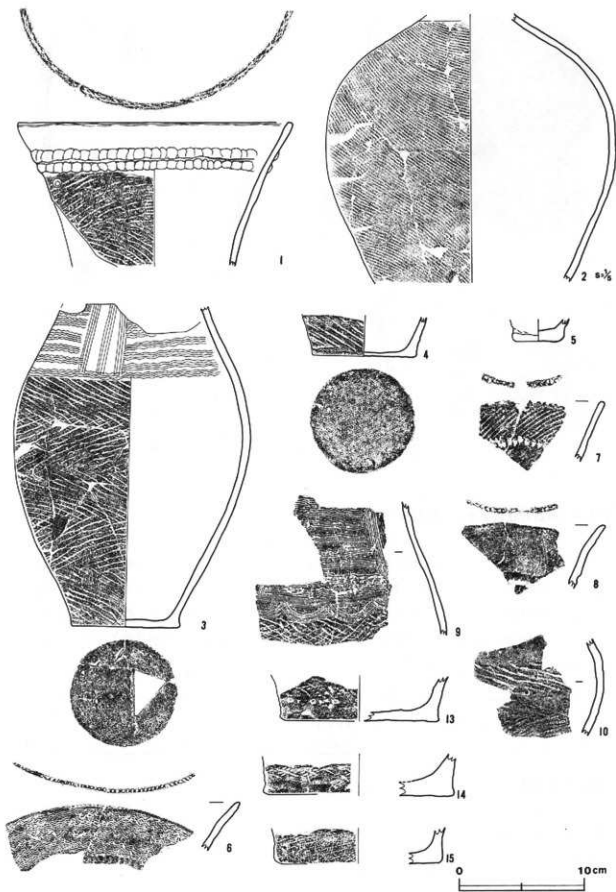
第27号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	粘土・色調・焼成	備考
第66図 1	大形広口壺 弥生土器	A [22.2]	口縁部~頸部, 口唇部は縄文が施され, 口縁部と頸部の境は肌い度帯が2条寄り指瀬による軽い押折がある。隆帯下位に1孔を有する。胴部は附加条2條(附加1条)の縄文が施され, 羽状構成をとる。	長石, 石英, 金雲母 パミス, スコリア にぶい黄褐色 普通	P147, P.L.25, 10% 南東階覆土下層
		B (11.5)			
2	壺 弥生土器	B (35.7)	胴部片, 1位に無文帯がみられる。胴部には附加条 1條(附加2条)の縄文が施されている。	長石, 石英, パミス にぶい橙褐色 普通	P903, P.L.26, 25% 南東階覆土下層
		H [38.8]			
3	広口壺 弥生土器	B (25.8)	頸部~底部, 胴部は筒状工具(1本)による縦区画により3条を単位に4分割され, 区画内は波状文が施されている。胴部と頸部の境には波状文が走る。胴部は附加条2條(附加1条)の縄文が施され, 羽状構成をとる。胴部下位斜線條, 成帯部目取。	長石, 石英 にぶい橙褐色 普通	P148, P.L.25, 70% 外面ス付着 二次焼成痕 P ₂ 北部直上
		C 8.7			
		I 18.9			

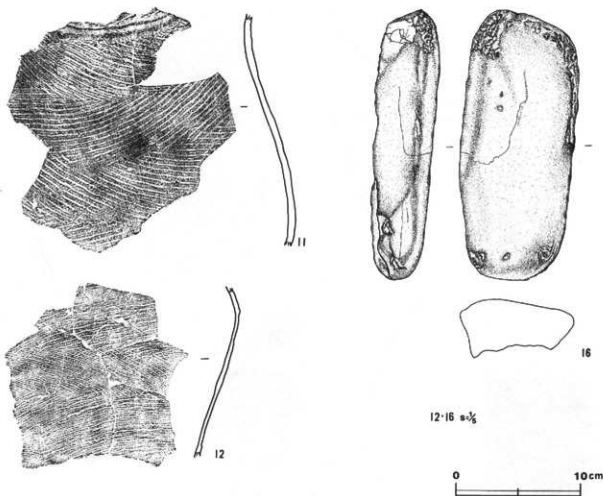
図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色澤・焼成	備考
第66回 4	壺 弥生土器	B (3.3) C 8.4	甕形。胴部は附加条二條(附加2条)の縄文が施されている。底部布目状。	灰石、石英、砂粒に富み黄褐色	P149, 5% 南東部床面
5	ミニチュア 土器 弥生土器	B (1.8) C 4.2	内外両ナデ。外周一部に縄文による筋文がみられる。底部は突出している。	石英に富み黄褐色 普通	P150, P.L.26, 5% 南東部床面



第65図 第27号住居跡実測図



第66图 第27号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)



第67図 第27号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

第66・67図6～15は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。6～8は口縁部片で、6は口唇部に棒状工具による刻み、7は口唇部に縄文が施され、附加条一種(附加2条)の縄文が施されている。口縁部下端には縄文原体による刺突文がみられる。9・10は頸部片で、9は波状文と上向きの連弧文が施されている。11・12は大形壺の胴部片で、附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。13～15は大形壺の底部である。

図録番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第67図16	型石	36.4	15.4	8.4	6,880.0	グリーンタフ	覆土下層	Q60, P129

第28号住居跡(第68図)

位置 調査区の東部, D3c区。

規模と平面形 長軸5.2m, 短軸4.6mの隅丸長方形をしている。

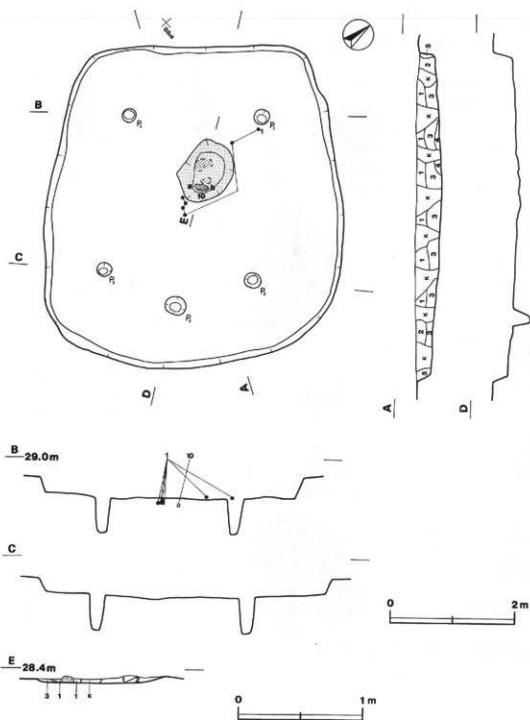
主軸方向 N-34°-W

壁 壁高は28～36cmで、外傾して立ち上がる。

床 耕作による攪乱が床面全体に入り、ルームがブロック状に確認される。

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₄は直径20cmの円形、深さ56~60cmで柱穴と思われる。P₅は長径35cm、短径28cmの楕円形、深さ30cmで出入り口施設に伴うものと思われる。

炉 中央部より北に位置し、長径105cm、短径80cmの不正楕円形で、床面を5cmほど掘り窪めた地床炉である。炉床は、攪乱を受けている。中央部は、火熱を受け焼土がブロック状に赤変硬化している。炉石は、炉の長軸に直行するように炉床の南側に据えられ、上面から側面は火熱を受け赤変し一部欠けている。



第68図 第28号住居跡実測図

炉土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量, ローム小ブロック微量 3 灰褐色 ローム粒子少量
 2 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量

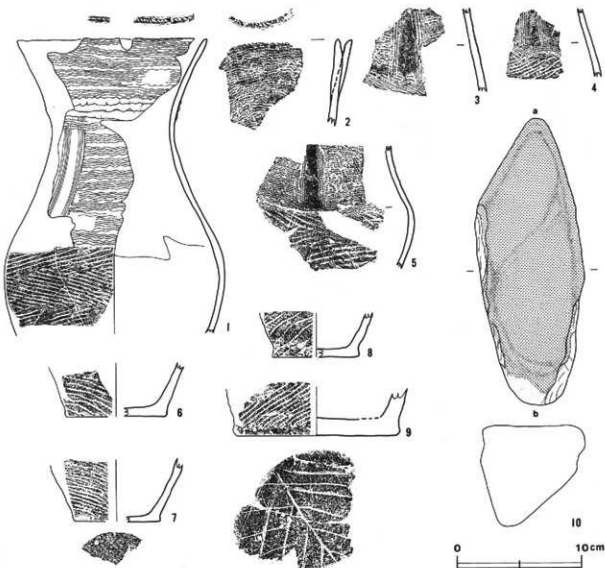
覆土 5層からなる。攪乱が激しく、不明瞭であるが含有物や堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量 4 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子微量
 2 暗褐色 ローム粒子少量 5 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
 3 黒褐色 ローム粒子中量

遺物 弥生土器細片約150点が出土しているが、ほとんどが胴部片で口縁部や底部は微量である。第69図1は
 広口壺の口縁部から胴部片で、炉南部とP₁南北部の床面直上から出土している。10は炉石である。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と思われる。



第69図 第28号住居跡出土遺物実測・拓影図

第28号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第69図 1	広口壺 弥生土器	A	口縁部一割部片。口唇部はへう状工具による割み。口縁部は蓋面状工具(5本)により波状文が施されている。口縁部と胴部の境は低い段差が3本張り懸い押止がある。胴部は上位に波状文が施り、器底状工具による縦区画により分割され区画内は波状文が施されている。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状磨成をとる。	灰石 灰い褐色 普通	P131, P126, 10% 外周ス付者 二次焼成研 伊南部床面
		B			
		H			
		I			

第69図2～9は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。2は片口を有する壺の口縁部である。3～5は頸部片である。6～9は底部片で、6～8は、附加条二種(附加1条)の縄文が、9は附加条一種(附加2条)の縄文が施されている。底部は6・7が布目痕、9が木炭痕である。

図版番号	器種	計測値				石	貫出上地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第69図10	卵石	23.1	8.4	8.1	(1.881.9)	砂岩	伊内	Q61, P.L31

第29号住居跡(第70図)

位置 調査区の東部, D3a, 区。

規模と平面形 長軸5.9m, 短軸[5.1]mの隅丸長方形をしている。

主軸方向 N-11°-W

壁 壁高は10～14cmで、外傾して立ち上がる。

床 耕作による攪乱が床面全体に入り、ロームがブロック状に確認される。P₁・P₂・P₃に囲まれた部分に硬化面が確認できる。

ピット 6か所(P₁～P₆)。P₁～P₃は長径28～32cm, 短径20cmの不正楕円形, 深さ68～78cmで柱穴と思われる。P₄は直径10cmの円形で深さ20cm, P₅は長径15cm, 短径10cmの楕円形, 深さ55cmで出入り口施設に伴うものと思われる。P₆は西壁際に位置し, 直径25cmの円形, 深さ15cmで性格は不明である。

炉 中央部よりやや北に位置する。炉の覆土は削平され, 北半分は攪乱されている。南部を中心に火熱を受けたブロック状のロームを長径[105]cm, 短径[45]cmの半円形の範囲に確認した。

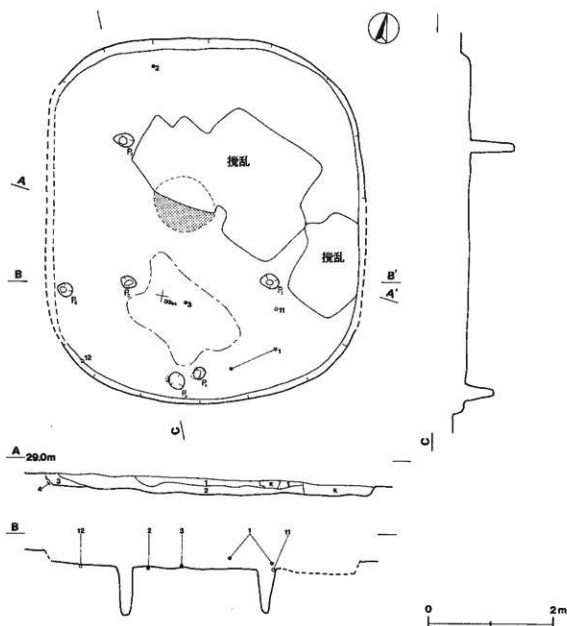
覆土 4層からなる。南東部に攪乱が入るが、レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量	3 暗褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック・炭化粒子微量	4 褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量

遺物 弥生土器細片約130点が出土しているが、ほとんどが胴部片で口縁部や底部は微量である。第71図1は広口壺の口縁部から胴部で南東コーナー付近の覆土中層から、2は頸部から底部でP₃北部の床面直上から、3は大形壺の胴部から底部で伊南部の床面直上から出土している。4は高坏脚部片で、覆土中から出土している。11は土製勾玉で、P₁南部の床面直上から出土している。12は磨石で、南西コーナー付近の床面直上から出土している。

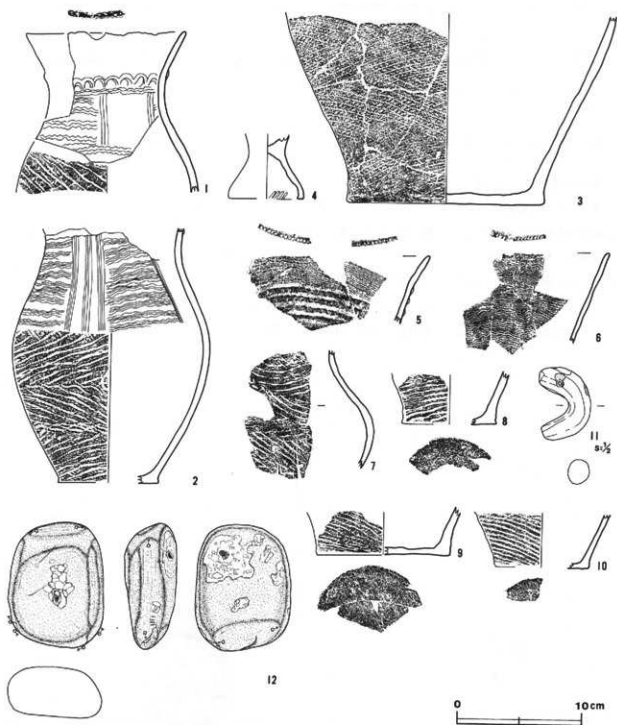
所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と思われる。



第70図 第29号住居跡実測図

第29号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第71回 1	広口壺 弥生上器	A 12.8 B 12.8 C 8.0 D 9.27	口縁部～胴部。口唇部は縄文が施され、口縁部と胴部の境は低い隆帯が1条走り指張による押圧がある。胴部は上位に波状文が走り、胸歯状工具(3本)による縦区画により分割され、区画内は波状文が施されている。胴部と胴部の境は波状文が走り、胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。	スコリア にぶい褐色 普通	P153, P.L.26, 15% 外周スス付着 二次焼成痕 南東部覆土中層
2	広口壺 弥生上器	H (20.4) C 8.0 H 10.8 I (15.7)	胴部～底部。胴部は胸歯状工具(4本)による縦区画により3条を単位に分割され、区画内は波状文が施されている。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され羽状構成をとる。底部布目痕。	灰石、石英 にぶい褐色 普通	P154, P.L.26, 40% 外周スス付着 二次焼成痕 P3北部床面
3	大形壺 弥生上器	B (15.2) C 16.0	胴部～底部。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	石灰、金部母 パミス、スコリア にぶい褐色、普通	P152, P.L.26, 40% 底部スス付着 如南側床面



第71図 第29号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第71図 4	高杯 弥生土器	B (52) D [60]	胴部片。胴部は内壁気味に立ち上がる。内面下位に爪圧痕が残る。内・外面ナデ。	石灰、雲母 にぶい黄褐色。普通	P155, P136, 40% 覆土中

第71図5～10は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。5・6は口縁部片で、5は口唇部に棒状工具による刻み、6はヘラ状工具による刻みがあり、口縁部に波状文が施されている。7は胴部片で、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。8～10は底部片で、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、底部は布目痕である。

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第71図 11	土製勾玉	3.9	2.8	1.3	—	13.2	100	床面直上	DP15, PL29

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第71図 12	磨石	10.1	7.5	4.3	599.0	ホソツェルス	床面直上	Q62, PL30

第30号住居跡 (第72図)

位置 調査区の東部, C3i区。

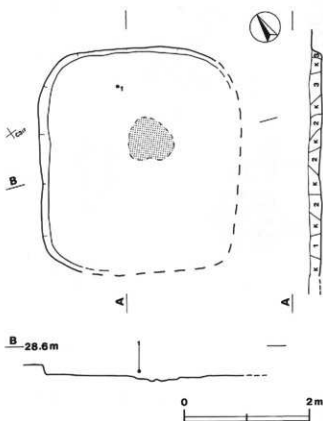
規模と平面形 長軸 [3.6] m, 短軸 [3.2] m の [隅丸長方形] と思われる。

主軸方向 N-30°-E

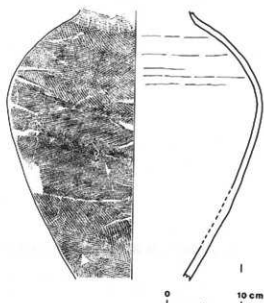
壁 壁高は10~14cmで、外傾して立ち上がる。南壁・西壁は、攪乱が激しいため立ち上がりを確認できない。

床 耕作による攪乱が床面全体に入り、ロームがブロック状に確認される。

ピット 確認できない。攪乱された耕作土の中に存在すると考えられる。



第72図 第30号住居跡実測図



第73図 第30号住居跡出土遺物実測図

炉 中央部よりやや北に位置する。炉の覆土は削平され、攪乱のために灰床には火熱を受けたブロック状のロームを長径〔80〕cm、短径〔70〕cmの楕円形の範囲に確認しただけである。

覆土 3層からなり、全体に攪乱が入る。全体の堆積状況は、不明である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒了・炭化粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒了・焼土粒子微量
- 3 褐色 ローム粒少量、焼土粒子微量

遺物 弥生土器細片約40点が出土しているが、ほとんどが胴部片で口縁部や底部は微量である。第73図1は大形壺の胴部片で北部の覆土下層から出土している。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と思われる。

第30号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備 考
第73図 1	壺 弥生土器	B (35.8) H (35.2)	胴部片。上縁にわずかに上向きの流麗文がみられる。胴部上位には縞状文が基る。胴部には附加条一條(附加2条)の縄文が施され、羽状帯成をとる。	灰石、石英、スクリア にふい褐色 青造	F50、FL27、25% 外面スス付着 北部黄土層

第31号住居跡(第74図)

位置 調査区の西部、D2b₂区。

規模と平面形 長軸4.8m、短軸4.6mの隅丸方形をしている。

主軸方向 N-33°-E

壁 壁高は30cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、南部を中心に炉を囲むように硬化面がある。

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁~P₄は長径30cm、短径20~24cmの不正楕円形、深さ80cmで柱穴と思われる。P₅は直径32cmの円形、深さ33cmで、出入り口施設に伴うものと思われる。

貯蔵穴 南東コーナーに位置し、長径54cm、短径40cmの楕円形で深さ25cmである。

炉 中央部よりやや北に位置し、長径80cm、短径75cmの楕円形で、床を5~8cmほど掘り窪めた地床炉である。中央部は、火熱を受け焼土ブロックが赤変硬化している。炉石は凝灰岩で、炉の長軸に直行するように炉床の中央に据えられ、全体が火熱を受け変色し、もろく剥離している。

炉土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子中量、ローム粒少量、焼土小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子微量

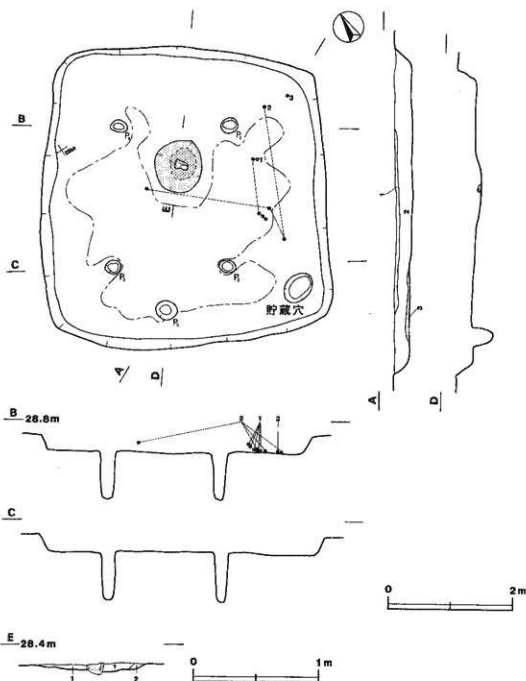
覆土 3層からなる。レンズ状の堆積をしていることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒少量、焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒了・焼土粒子微量

遺物 弥生土器細片約130点が出土しているが、ほとんどが胴部片で口縁部や底部は微量である。第75図1・2は壺の胴部から底部で、1は東部の床面直上から、2は炉西部・東部の床面直上から出土している。3の高坏胴部片は東コーナー付近の床面直上から出土している。

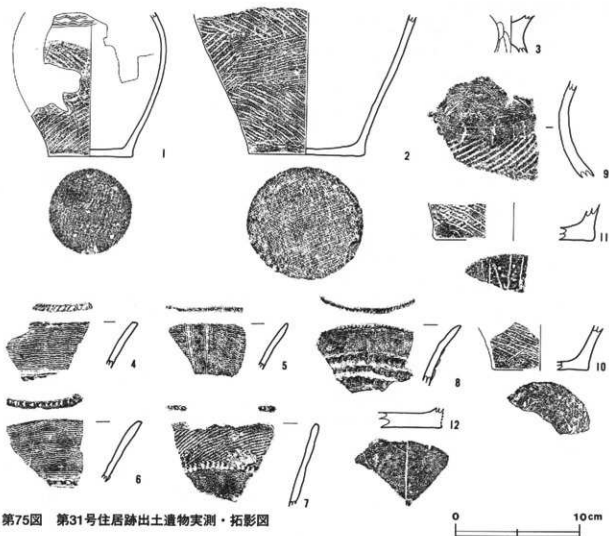
所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と思われる。



第74図 第31号住居跡実測図

第31号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第75図 1	壺 赤生土器	B (11.6)	胴部~底部。上部にわずかに放射文がみられる。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底帯赤目肌。	石英、バミス スコリア に多い黄褐色、普通	P157, P.L.Z. 25% 外面スス付着 東部床面
		C 68.0			
		I [12.2]			
第75図 2	壺 赤生土器	B (11.3)	胴部~底部。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底帯赤目肌。	長石、石英、バミス スコリア に多い棕色 普通	P156, P.L.Z. 40% 外面スス付着 二次焼成痕 が西部床面
		C 9.2			



第75図 第31号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第75図 3	高坏 弥生土器	B (3.0) E (1.6)	胴部片。外面ナデ。	パミス、スコリア にふい黄褐色 普通	P158, PL27, 5% 東部床面

第75図4～12は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。4～8は口縁部片で、4～6は口縁部に波状文、7は口縁部に附加糸一種（附加2条）の縄文が施され、下端に縄文原体による押圧がある。9は頸部片で下向きの連弧文、籠状文、附加糸一種（附加2条）の縄文が施されている。10～12は底部片で、10・11は布目痕、12は木葉痕である。10の底部には粉と思われる痕跡がある。

表2 矢倉遺跡住居跡一覽表

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長×寬)	高さ (cm)	床面	内部構造				土	出土遺物	備考 (旧→新)		
							柱穴	竪穴	柱ノド	入口					
1	E 2 c 3	N-24°-W	隅丸方形	4.5 × 4.3	10~15	平坦	7	-	3	1	伊	-	自然	弥生土器、磁石	弥生
2	E 2 a 4	N-42°-W	不明	4.9 × (4.3)	5~20	平坦	2	-	6	1	伊	凝灰岩	自然	弥生土器、磨石	弥生
3	E 2 a 5	N-40°-E	長方形	3.6 × 2.9	10	平坦	4	-	-	-	伊	-	自然	弥生土器、磨石	弥生
4	E 2 a 6	N-33°-E	不明	(4.9) × (3.0)	10	凹凸	3	-	5	-	伊	安山岩	自然	弥生土器、紡錘車、磨石	弥生SK3→本跡
5	E 2 e 1		不明	不明	-	平坦	2	-	-	-	伊	-	不明	-	時期不明
6	D 2 j 5	N-42°-W	不明	不明	-	凹凸	3	1	-	1	伊	-	不明	弥生土器、高坏、漆器、銅部	弥生
7	D 2 h 7		不明	不明	-	平坦	1	-	-	-	伊	-	不明	-	時期不明
8	D 2 g 8	N-5°-E	隅丸長方形	6.5 × 5.5	10~15	凹凸	4	-	5	1	伊	-	不明	弥生土器、高坏、磨石	弥生
9	D 2 e 0	N-23°-E	隅丸長方形	6.2 × 5.0	15	平坦	4	1	21	3	伊	-	人為	弥生土器、磨石、磨石	弥生
10	E 1 h 0	N-3°-W	不明	不明	-	不明	4	-	-	-	伊	-	不明	-	時期不明
11	D 2 i 2	N-3°-E	不明	不明	-	不明	3	-	2	-	伊	安山岩	不明	-	時期不明
12	D 2 g 2	N-9°-W	長方形	5.8 × 4.0	5~18	平坦	5	-	12	2	伊	砂岩	自然	弥生土器、高坏、土器器小器類、土器、漆器、不明磨石、磨石	弥生
13	D 2 e 5	N-32°-W	隅丸長方形	4.5 × 3.3	6~12	平坦	4	-	-	1	伊	砂岩	人為	弥生土器、高坏、紡錘車、管状土器、磨石	弥生
14	G 1 i 7	N-61°-W	隅丸方形	6.1 × 5.4	40~52	平坦	3	-	-	1	伊	-	人為	弥生土器、紡錘車、管状土器、磨石、磨石、門石、台石	弥生
15	C 2 d 1	N-40°-E	正方形	5.4 × 5.4	30	平坦	5	-	-	1	伊	-	人為	弥生土器、磨石	弥生本跡→SD3
16	C 1 i 9	N-1°-W	隅丸方形	4.6 × 4.5	50~60	平坦	4	-	1	2	伊	凝灰岩	自然	弥生土器、高坏、紡錘車、磨石、磨石、石斧、台石	弥生
17	C 2 f 1	N-17°-E	長方形	5.5 × 4.1	27~33	凹凸	5	-	-	1	伊	凝灰岩	自然	弥生土器、高坏、磨石、石磨、不明磨石	弥生本跡→SD3
18	C 2 i 7	N-45°-W	隅丸方形	4.8 × 4.6	17~28	平坦	5	-	7	1	伊	砂岩	人為	弥生土器、磨石、門石、石磨	弥生本跡→SD1
19	C 2 i 9	N-40°-E	圆形	(6.5) × (5.5)	30	凹凸	5	-	-	1	伊	凝灰岩	人為	弥生土器、高坏、土器、手押土器、土器、土器小器類、磨石	弥生
20	C 2 h 3	N-1°-W	隅丸方形	(1.2) × (1.1)	8	平坦	4	-	-	1	伊	-	自然	弥生土器、紡錘車	弥生本跡→SI21 本跡→SD1
21	C 2 g 5	N-15°-W	隅丸長方形	3.9 × 3.3	10~15	平坦	4	-	-	1	伊	-	人為	-	SI20→本跡
22	C 2 e 6	N-23°-W	隅丸方形	4.1 × 3.7	45~48	平坦	4	-	-	1	伊	-	人為	弥生土器、高坏、漆器、土器、磨石、石斧、台石	弥生
23	D 2 a 6	N-24°-W	隅丸方形	3.8 × 3.5	20	平坦	4	-	1	1	伊	-	人為	弥生土器、紡錘車	弥生本跡→SI2
24	C 3 f 1	N-32°-E	長方形	5.8 × 5.1	10~20	平坦	4	-	4	3	伊	砂岩	自然	弥生土器、高坏、磨石	弥生
25	C 3 h 1		不明	(3.9) × (1.3)	4	平坦	-	-	1	-	-	-	自然	-	時期不明
26	C 3 f 4		不明	(3.1) × (1.7)	18~25	平坦	1	-	1	-	-	-	自然	弥生土器、門石	弥生
27	C 3 b 6	N-17°-W	隅丸方形	5.6 × 5.5	30~40	平坦	4	-	-	1	伊	砂岩	人為	弥生土器、手押土器器部	弥生
28	D 3 e 3	N-34°-W	隅丸長方形	5.2 × 4.6	28~36	不明	4	-	-	1	伊	砂岩	自然	弥生土器	弥生
29	D 3 a 4	N-11°-W	隅丸長方形	5.9 × (5.1)	10~14	不明	3	-	1	2	伊	-	自然	弥生土器、高坏、土器、土器、磨石	弥生
30	C 3 i 7	N-30°-E	隅丸長方形	(3.6) × (3.2)	10~11	不明	-	-	-	-	伊	-	不明	弥生土器	弥生
31	D 2 b 2	N-33°-E	隅丸方形	4.8 × 4.6	30	平坦	4	1	-	1	伊	凝灰岩	自然	弥生土器、高坏、漆器	弥生

2 土坑

本調査区の中央部を中心に14基が検出されている。以下、時期のわかるものや特徴的なものについて解説を加え、その他の土坑については一覧表に記載した。

第2号土坑（第76図）

位置 調査区の南西部，D1g区。

規模と形状 長径0.45m，短径0.3mの楕円形で深さ21cmである。底面は平坦で，壁面は上部になるほどゆるやかに外傾して立ち上がる。

長径方向 N-76°-E

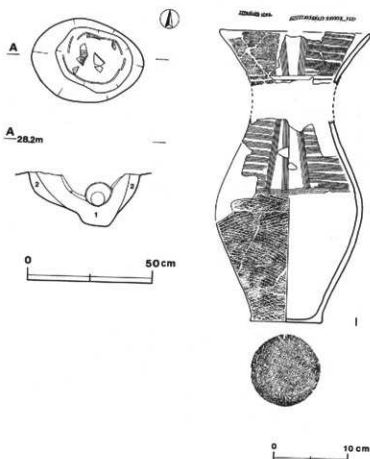
覆土 土層は2層からなる。1層は，極めて強い締まりのある層であることから人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量，締まり有り
2 褐色 ローム粒子微量

遺物 第76図1は，弥生土器大形広口壺の胴部から口縁部にかけての破片で，土坑のほぼ中央部の覆土中から，つぶれた状態で底部を北に傾けて出土している。

所見 本跡は，出土遺物から弥生時代後期の土坑と考えられる。性格については不明である。



第76図 第2号土坑・出土遺物実測図

第2号土坑遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第76図	広口壺	A [20.1]	口唇部は縄文が施され口縁部は磨崖状工具(6本)による縦区画により3条を単位に分割され，区画内は緻密な波状文が施される。口縁部と頸部の境は隆帯が走り，軽い押圧がある。胴部は磨崖状工具による縦区画により3条を単位に3分割され，区画内は緻密な波状文が施される。胴部と胴部の境には波状文が走る。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され，羽状構成をとる。底部帯目肌。	雲母 にふい褐色 普通	P159, P.L27, 70% 特殊スチ付着
		B (38.5)			
		C 9.6			
1	弥生土器	I 19.5			

第4号土坑（第78図）

位置 調査区の南部，E2a区。

重複関係 本跡の上部に，第4号住居跡が構築されている。

規模と形状 掘り方は長径(1.14)m，短径1.72m不整長楕円形で深さ1.10mである。底面は平坦で，壁面は急傾斜に立ち上がる。

長径方向 N-46°-W

覆土 7層からなる。ローム大・中ブロック、鹿沼バミスの含有が認められ、不自然な堆積状況を示していることから人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------------------|-------|----------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子極少量 | 5 褐色 | ローム中ブロック中量、ローム粒子少量、鹿沼バミス多量 |
| 2 褐色 | ローム中ブロック微量、ローム粒子少量、鹿沼バミス微量 | 6 黄褐色 | ローム中ブロック少量、鹿沼バミス多量 |
| 3 暗褐色 | ローム大・中ブロック少量、ローム粒子中量、炭化粒子微量 | 7 黄褐色 | ローム中・小ブロック少量 |
| 4 褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、鹿沼バミス少量 | | |

遺物 覆土下層から縄文土器片（底部）が2点出土している。

所見 本跡は、出土遺物・形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第5号土坑（第77図）

位置 調査区の北東部、B3i区。

規模と形状 長径1.00m、短径0.8mの楕円形で深さ50cmである。底面は皿状で、壁面はゆるやかに外傾して立ち上がる。

長径方向 N-16°-W

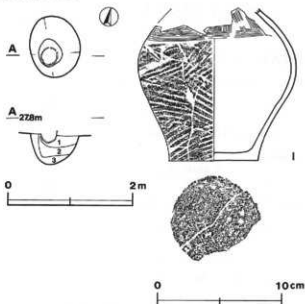
覆土 3層からなる。不自然な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子極少量 |
| 2 褐色 | ローム中ブロック微量、ローム粒子少量、鹿沼バミス微量 |
| 3 暗褐色 | ローム大・中ブロック少量、ローム粒子中量、炭化粒子微量 |

遺物 第77図1は、弥生土器小形壺で、覆土中層から底部をやや東に傾けて出土している。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期の土坑と考えられる。性格については不明である。



第77図 第5号土坑・出土遺物実測図

第5号土坑跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・地蔵	備考
第77図 1	小形壺 弥生土器	B [12.2]	頸部には筒筒状工具(7本)による縦区画と波状文がみえる。頸部と胴部の境には波状文が高る。胴部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状横線をとり、底部布目紋。	長石、スコリアにぶい橙色 普通	P160, PL27, 40%
		C 7.2			
		I [12.6]			

第7号土坑（第78図）

位置 調査区の南西部、D1j3区。

重複関係 第1・2号溝の下層部に位置する。

規模と形状 長径3.90m、短径1.76m長楕円形で深さ45cmである。底面は凹凸で、P₁、P₂、P₃がある。壁面は、ゆるやかに外傾して立ち上がる。

長径方向 N-28°-W

覆土 10層からなり、ブロック状の堆積をしていることから人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量, 締まり有り
 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
 4 暗褐色 ローム粒子少量
 5 黒褐色 腐植バミス多量
 6 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
 7 暗褐色 ローム中・小ブロック少量, ローム粒子中量
 8 黒褐色 ローム中・小ブロック微量, ローム粒子少量
 9 暗褐色 ローム中ブロック少量, ローム小ブロック・ローム粒子少量
 10 黒褐色 ローム粒子少量

遺物 覆土上層から弥生土器片7点, 中層から鏝が2点出土している。

所見 本跡は, 土層から第1号・第2号溝以前か, または同時期の土坑である。特定する時期・性格については, 遺構に伴う遺物がないことから不明である。

第1号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子微量
 2 褐色 ローム粒子微量, 締まり有り

第6号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
 2 暗褐色 ローム粒子微量

第8号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
 2 褐色 ローム粒子少量

第9号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
 2 暗褐色 ローム粒子少量
 3 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量

第10号土坑土層解説

- 1 黒褐色 10YR 2/2 ローム粒子微量
 2 黒褐色 10YR 2/3 ローム粒子微量
 3 黒褐色 ローム粒子少量
 4 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック微量
 5 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック微量

第11号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
 2 黒褐色 ローム小ブロック微量, ローム粒子少量

第12号土坑土層解説

- 1 褐色 10YR 4/1 ローム粒子微量
 2 褐色 10YR 4/6 ローム粒子微量
 3 暗褐色 ローム粒子微量

第13号土坑土層解説

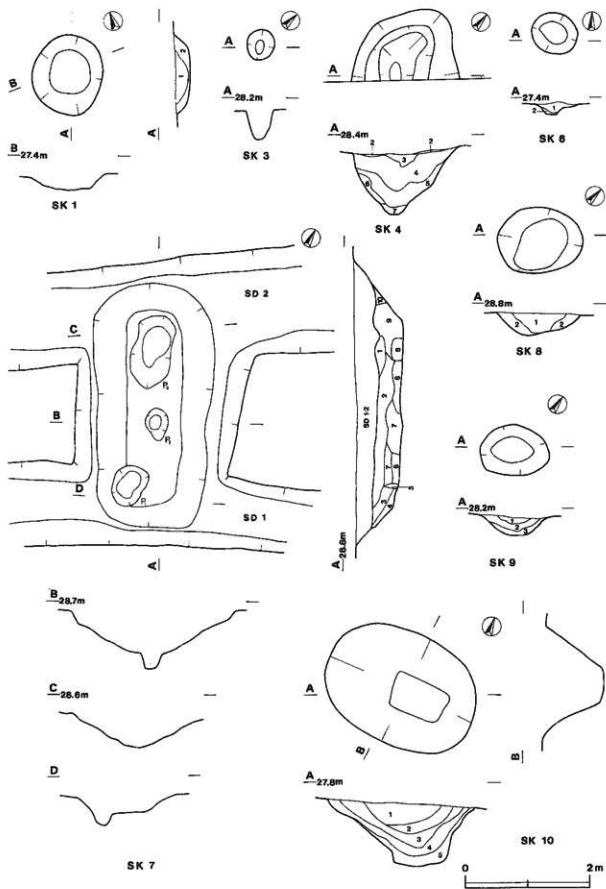
- 1 黒褐色 ローム粒子微量
 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
 3 暗褐色 ローム小ブロック・焼土粒子微量, ローム粒子少量

第14号土坑土層解説

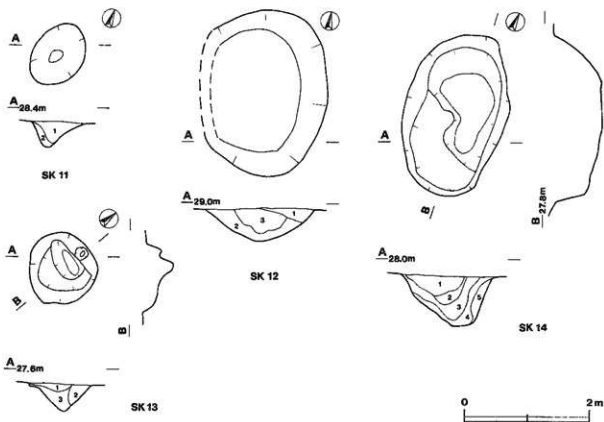
- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
 3 黒褐色 ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子微量, ローム粒子少量
 4 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
 5 褐色 ローム小ブロック中量, 焼土粒子微量

表3 矢倉遺跡土坑・覧表

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		傾面	底面	覆土	出 上 遺 物	備 新旧関係 (旧→新)	考 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)						
1	E 1 a a	N-36°-E	楕円形	1.23 × 1.10	34	緩斜	平坦	自然		(旧) S 1 10→S K 1 (新)	
2	D 1 g a	N-76°-E	楕円形	0.45 × 0.30	21	緩斜	平坦	人為	弥生土器 P 159, P L 27		
3	E 2 b a		円形	0.45 × 0.45	48	垂直	底状	人為			
4	B 2 a a	N-46°-W	不整形楕円形	(1.14) × 1.72	110	急斜	平坦	人為	縄文土器片	陥し穴 本跡→S 1 4	
5	B 3 i a	N-16°-W	楕円形	1.00 × 0.80	30	外傾	底状	人為	弥生土器 P 160, P L 27		
6	C 4 b a		円形	0.76 × 0.66	20	緩斜	底状	自然	縄文土器片		
7	D 1 j a	N-28°-W	長楕円形	3.90 × 1.76	45	緩斜	凹凸	人為	弥生土器片, 鏝	本跡→S D 1, S D 2または同時期	
8	B 3 e a	N-46°-E	楕円形	1.37 × 1.06	38	緩斜	底状	自然			
9	B 3 h a	N-53°-E	楕円形	1.10 × 0.81	29	緩斜	平坦	自然			
10	B 3 h a	N-85°-W	楕円形	2.53 × 1.81	102	外傾	平坦	自然			
11	B 3 c a	N-17°-E	楕円形	1.08 × 0.80	42	外傾	底状	自然			
12	C 4 a 1	N-10°-W	不整形楕円形	1.33 × (1.02)	26	緩斜	底状	人為			
13	C 4 e a		円形	1.13 × 1.08	45	緩斜	凹凸	人為	弥生土器片		
14	C 3 d a	N-5°-W	楕円形	2.61 × 1.68	76	急斜	底状	自然	縄文土器片		



第78图 第1·3·4·6·7·8·9·10号土坑实测图



第79図 第11・12・13・14号土坑実測図

3 溝

今回の調査では、溝8条を検出した。以下、検出された溝について記載する。

第1号溝 (第80図)

位置 調査区の中央部、C2h₂区からD1c₂区。

重複関係 第18・20号住居跡、第6号溝を掘り込んでいる。

規模と形状 西部は、調査区外へ延びているため全容は不明である。検出した部分の規模は、上幅0.6~1.4m 下幅0.2~0.7m、深さ40cm、全長(45)mである。平面形は、ほぼ直線である。断面形は、ゆるやかな「U」字状で、底面は凹凸である。

方向 C2h₂から南西方向(S-60°-W)に45mほど直線的に延び、D1c₂区で調査区外に至る。

覆土 レンズ状の堆積をしており、自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

3 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子中量

2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

遺物 覆土中層から、混入と思われる弥生土器片2点と敷石1点が出土している。

所見 本跡は、第18・20号住居跡、第6号溝より新しい。時期・性格については、遺構に伴う遺物がないことから不明である。

第2号溝 (第80図)

位置 調査区の西部、B2g₂区からD1b₂区。

重複関係 第23号住居跡、第6号溝を掘り込んでいる。

規模と形状 両端とも調査区外へ延びているため全容は不明である。検出した部分の規模は、上幅0.4～1.2m
下幅0.2～0.7m、深さ40cm、全長(76)mである。平面形は、ゆるやかな「L」字状で、断面形は、ゆるやかな「U」字状である。

方向 B2g₂区から南東方向へ30mほど直線的に延び、C2c₂区付近から南西に方向を変えて、D1b₂区で調査区外に至る。

覆土 レンズ状の堆積をしており、自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量

2 暗褐色 ローム小ブロック微量、ローム粒子少量

3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

4 褐色 ローム中ブロック中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物 覆土中層から混入と思われる弥生土器片2点、土玉1点、常滑系控鉢底部片、播鉢底部片が出土している。第81図1は常滑系片口鉢底部片で覆土上層から、2は土玉で覆土中層から出土している。

所見 本跡は、第23号住居跡、第6号溝より新しい。時期・性格については、遺構に伴う遺物がないことから不明である。

第3号溝 (第80図)

位置 調査区の北西部、C1b₂区からC2e₂区。

重複関係 第15号住居跡、第17号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北部は、調査区外へ延びているため全容は不明である。検出した部分の規模は、上幅0.4～1.2m
下幅0.2～0.6m、深さ70cm、全長(24)mである。平面形は「T」字状である。断面形は、「U」字状である。

方向 C1b₂区から南東方向へ17mほど直線的に延びC2f₂区に至る。一方は、C2e₂区付近から東に方向を変えて9mほど延びC2e₂区に至る。

覆土 レンズ状の堆積をしており、自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子微量

2 黒褐色 ローム中ブロック・ローム粒子微量

遺物 第81図3は高坏脚部で、覆土中層から出土しているが混入と思われる。

所見 本跡は、第15号住居跡、第17号住居跡より新しい。時期・性格については、遺構に伴う遺物がないことから不明である。

第4号溝 (第80図)

位置 調査区の北部、B2i₂区からB2j₂区。

規模と形状 北部は、調査区外へ延びているため全容は不明である。検出した部分の規模は、上幅0.9～1.6m
下幅0.2m、深さ70cm、全長(12)mである。平面形は、「L」字状である。断面形は、栗研掘りの様相を呈する。

方向 B2i₂区から南東方向へ(4)m程直線的に延び、B2j₂区で90°の角度で北東方向へ8m程延びている。

覆土 レンズ状の堆積をしており、6層からなる自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------------|-------|-------------------------|
| 1 灰褐色 | ローム粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム小ブロック微量、ローム粒子少量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子・焼上粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子微量 |

所見 時期・性格については、遺構に伴う遺物がないことから不明である。

第5号溝(第80図)

位置 調査区の北部、B2d₁区からB2i₁区。

規模と形状 北部は、調査区外へ延びているため全容は不明である。検出した部分の規模は、上幅0.9～1.6m 下幅0.2m、深さ70cm、全長(31)mである。平面形は、「L」字状である。断面形は、葉研掘りの様相を呈する。

方向 B2i₁区から南東方向へ(15)m程直線的に延び、B2g₁区で90°の角度で南西方向へ16m程延びている。

覆土 レンズ状の堆積をしており、3層からなる自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|------|--------------------|
| 1 灰褐色 | ローム小ブロック微量、ローム粒子少量 | 3 褐色 | ローム小ブロック少量、ローム粒子中量 |
| 2 褐色 | ローム小ブロック微量、ローム粒子中量 | | |

遺物 第81図4・5は散石で、覆土中層から出土しているが混入と思われる。

所見 時期・性格については、遺構に伴う遺物がないことから不明である。

第6号溝(第80図)

位置 調査区の北部、C2c₁区からC2c₂区。

重複関係 第2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 検出した部分の規模は、上幅1.0～1.1m、下幅0.2m、深さ30cm、全長10mである。平面形は、直線である。断面形は、ゆるやかな「U」字状である。

方向 C2c₂区から東に(N-90°-E)10m程延びている。

覆土 レンズ状の堆積をしており、2層からなる自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------|-------|--------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 2 暗褐色 | ローム小ブロック微量、ローム粒子少量 |
|-------|---------|-------|--------------------|

遺物 第81図6は散石で、覆土中層から出土しているが混入と思われる。

所見 第2号溝より古い。時期・性格については、遺構に伴う遺物がないことから不明である。

第7号溝(第80図)

位置 調査区の東部、B3j₁区からB4e₁区。

規模と形状 東部は、調査区外へ延びているため全容は不明である。検出した部分の規模は、上幅1.2～2.3m 下幅0.7m、深さ30cm、全長(33)mである。平面形は直線である。断面形はゆるやかな「U」字状である。

方向 B3j₁区から東に(N-53°-E)33m程延び、B4e₁区で調査区外に至る。

覆土 レンズ状の堆積をしており、2層からなる自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------|-------|---------|
| 1 灰褐色 | ローム粒子微量 | 2 暗褐色 | ローム粒子少量 |
|-------|---------|-------|---------|

所見 時期・性格については、遺構に伴う遺物がないことから不明である。

第8号溝 (第80図)

位置 調査区の東部, C3h区からC3g区。

規模と形状 東部は、調査区外へ延びているため全容は不明である。検出した部分の規模は、上幅2.2~2.8m
下幅2.1m、深さ40cm、全長(13)mである。平面形は、直線である。断面形はゆるやかな「U」字状で、底面
は凹凸がある。

方向 C3h区から北西(N-70°-W)に(13)m程直線的に延びる。

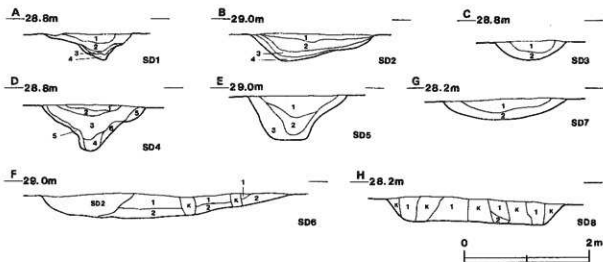
覆土 2層からなる自然堆積である。上面から底面まで、耕作により攪乱されている。

土層解説

1 黒褐色 ローム較少量

2 暗褐色 ローム小ブロック微量, ローム粒子少量

所見 時期・性格については、遺構に伴う遺物がないことから不明である。

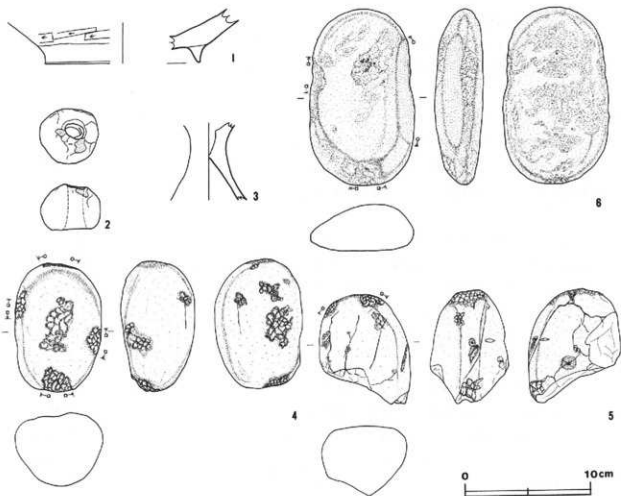


第80図 第1・2・3・4・5・6・7・8号溝土層実測図

第2号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第80図 1	片口鉢 陶器	B (4.3) C [12.4]	底部・体部片。平底。高台は短く「ハ」字状に開く。体部は真鍮的に外傾する。	体部・底部外面回転へつ傾り調整。内面ナデ。	灰黄褐色	P162, P.L27, 5% 常浴系 黄土中研

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径(mm)	重量(g)	残存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第80図 2	土 式	2.5	3.1	3.1	10.0	(21.3)	98	覆土中研	DP16, PL29



第81図 第2・3・5・6号溝出土遺物実測図

第3号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第81図 3	高坏 弥生土器	B (6.1)	脚部、下端部欠損。内・外面ナデ。	長石、金雲母 にふい貴棕色 普通	P164, P.L27, 10% 覆土中層

第5号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第81図 4	敲石	10.3	7.0	5.8	601.8	カレンツェルス	覆土中層	Q65, P.L30
5	敲石	8.9	7.3	6.4	(419.3)	砂岩	覆土中層	Q66, P.L30

第6号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第81図 6	敲石	14.0	8.4	3.9	653.2	カレンツェルス	覆土中層	Q67, P.L30, 31

4 遺構外出土遺物

今回の調査では、表土、確認面及び遺構の覆土中から、遺構に伴わない遺物が出土している。ここでは、特徴的な遺物の実測図及び拓影図を掲載し、土製品、石器等の解説は一覧表等に記載した。

(1) 縄文土器

第82図は、調査区から表面採集された縄文土器片の拓影図である。

1～3は前期後葉の土器で、興津式に比定されるものである。1～2は口縁部片で、1は1唇部に棒状工具の刻みがみられる。2は口唇部に刻み、口縁部には2本の平行沈線がみられる。3は胴部片で、条痕文系の文様がみられる。

4～7は、いずれも中期の土器で、4は五領ケ台式、5は阿玉台I式、6は大木8a式、7は加曾利E3式に比定されるものである。4～6は口縁部片で、4は口唇部に刻み、平行沈線、隆帯には刻みがみられる。5は上位に半葎竹筭による刻み、下位に断面三角形の隆帯がみられる。6は主な文様構成を隆帯で施している。7は胴部片で、沈線の間に縄文の磨消がみられる。

(2) 弥生土器

第82図8は、調査区南部から採集した弥生土器細片を接合した小形広口壺である。

第82・83・84図9～57は、調査区から採集した弥生土器片の拓影図及び実測図で、いずれも弥生後期の土器である。9～14は口縁部片である。9～14は口唇部にヘラ状工具による刻みが施されている。9は1唇部に突起が付き、口縁部は無文、10は附加条二種（附加1条）の縄文が、11は附加条一種（附加2条）の縄文が、12～14はいずれも波状文が施されている。15～18は1唇部に縄文が施されている。15～17は波状文が施され、下位に隆帯がみられる。18は横走文が施されている。

19～34は胴部片である。19は上位に指頭による押圧のある隆帯が3条あり、下位に附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。20は上位に縄文原体による刺突文のある隆帯が3条あり、下位に波状文が施され、縦方向に櫛歯状工具の痕跡がある。21～26は櫛歯状工具による縦区画により分割され、区画内は波状文が施されている。21はスリット内は縦の波状文が、24・25は頸部と胴部の境に波状文が、26は下向きの連弧文が施されている。27の縦区画内は山形文が、28は櫛歯状工具により不規則な文様が施されている。

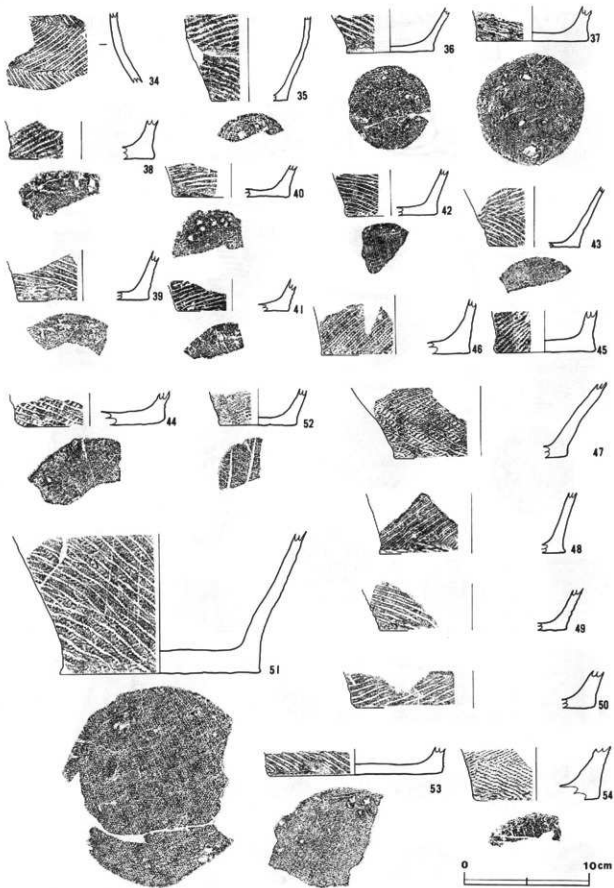
29～33は、いわゆる二軒層系の土器に比定されるものである。30は大きな波状文の下位に横走文（縹状文）、31は縦の櫛歯文が波状文を区画するように施されている。32・33は附加条一種（附加2条）の縄文が施され、ボタン状の貼り瘤が付く。34は上稲吉系の上器と比定され、上位は無文、下位に附加条一種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとる。

35～54は底部片である。35～52は胴部に附加条二種（附加1条）の縄文が、53・54は附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。35～44、51・53の底部は布目痕、52・54の底部は木葉痕が認められる。35の胴部には焼成後の穿孔がある。37・44の底部には靫と思われる痕跡がある。

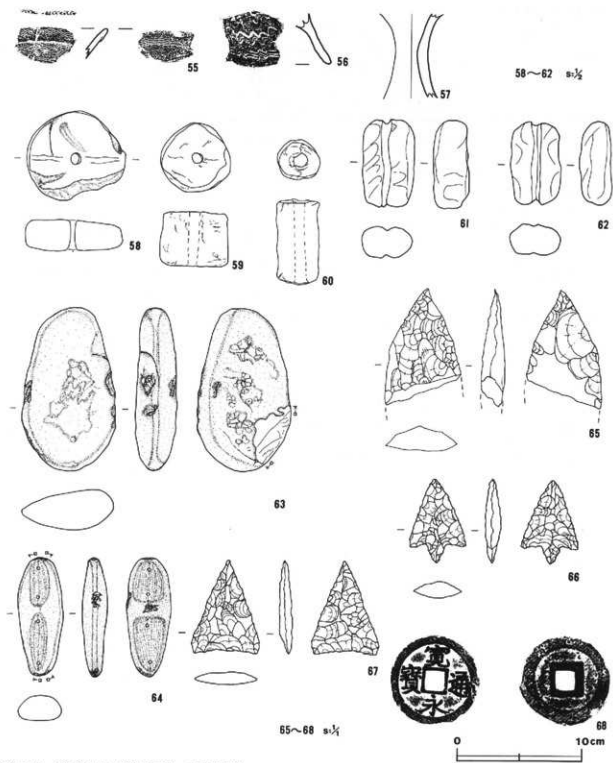
55は高坏坏部、56・57は高坏脚部である。



第82圖 遺構外出土遺物実測・拓影図(1)



第83图 遺構外出土遺物実測・拓影図(2)



第84図 遺構外出土遺物実測・拓影図(3)

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第82図 8	灰土器 弥生土器	A 13.2	口唇部はヘラ状工具による彫み、口縁部は剛角状工具(6本)による波状文が施されている。口縁部と腹部の境は寛帯が3条張り、強い押圧がある。腹部は剛角状工具による縦区画により3条を単位に3分割され(横内は波状文が施されている。底部と胴部の境には波状文が張り、側部は附加条(附加1条)の波文が施され、羽状焼成をとる。底部を計概。	紫褐色、SP7 棕色 普通	P167, P.L.28, 70% 調査区南部 覆土中
		B 17.4			
		C 7.1			
		H 8.1 I 10.3			

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大径	最大幅	最大厚					
第84図 58	紡錘車	4.9	3.2	1.7	6.0	48.9	70	覆土中	DP17, P.L.28
59	紡錘車	3.0	3.6	3.7	6.0	50.7	100	覆土中	DP18, P.L.28
60	竹状土器	1.6	2.2	2.3	7.0	29.9	100	覆土中	DP19, P.L.29
61	有溝土器	4.8	2.7	2.0	—	28.5	100	覆土中	DP20, P.L.29
62	有溝土器	4.4	2.6	1.8	—	25.0	100	覆土中	DP21, P.L.29

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第84図 63	磁石	13.1	7.5	3.3	443.8	砂岩質	覆土中	Q69, P.L.30
64	磁石	9.5	3.5	2.1	90.9	砂岩質	覆土中	Q64, P.L.30
65	尖頭器	2.0	3.1	0.7	33.3	安山岩	覆土中	Q29, P.L.31
66	石鏃	2.2	1.5	0.4	0.9	黒曜石	覆土中	Q70, P.L.31
67	石鏃	2.5	1.5	0.4	1.4	黒曜石	覆土中	Q71, P.L.31

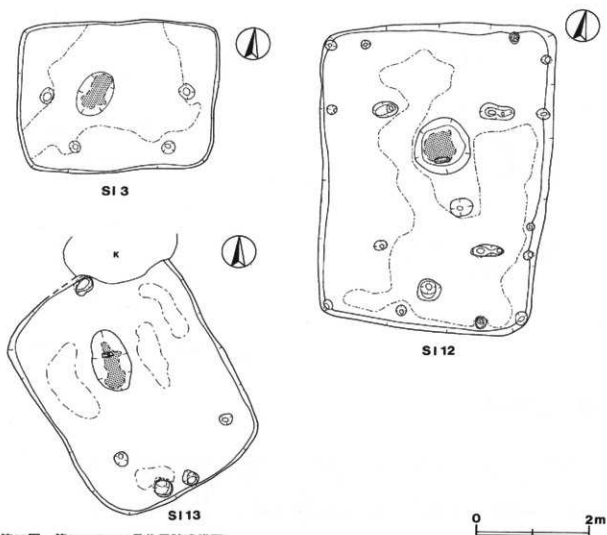
第84図68の占銭は表面採集資料であり、初鑄年1765年の「寛永通宝」である。

第4節 まとめ

矢倉遺跡の調査の結果、弥生時代後期後半の集落の一部とそれに伴う弥生土器（十王台式土器）が、良好な状態で多数確認された。ここでは、検出された31軒の住居跡のうち、6軒については前節で述べた理由から除外し、弥生時代後期後半の住居跡25軒について検討を加えまとめとしたい。

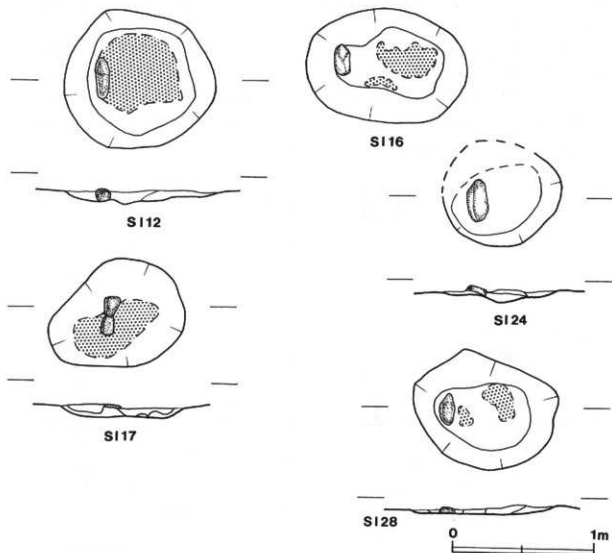
検出された住居跡は、調査区の南部から西部に密に分布している。北部から東部になるにつれ分布は薄く、見当たらなくなることから、集落はさらに南西部に広がることが考えられる。このことは、南部の畑地から表面採集資料として十王台式土器片が確認されていることから裏付けられる。また、ほとんどの住居跡は、標高が27~28mに立地している。潤沼前川、赤穂川の標高が6mほどあり、低地との比高が22mほどの丘陵地に立地していたことになる。

集落内での住居跡の形態は、隅丸方形、隅丸長方形を主とし長方形を若干含む様相が見られる。掘り込みは深いものと浅いものがある。主柱穴は4本を基本とし、出入り口施設に伴うものと思われるピットを有するものが多い。他に、主柱穴と何らかの対応関係にあると思われるピットをもつ住居跡（第12号住居跡）、他の住居跡と比較してやや小型で、主柱穴が2本ある住居跡（第3号住居跡）、隅丸長方形で4本の柱穴の配置が異なる住居跡（第13号住居跡）等が検出されている。（第85図）

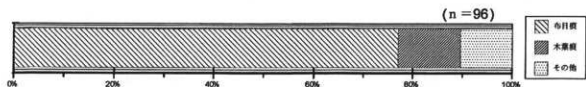


第85図 第3・12・13号住居跡遺構図

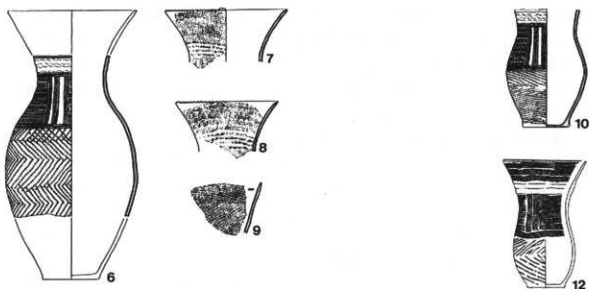
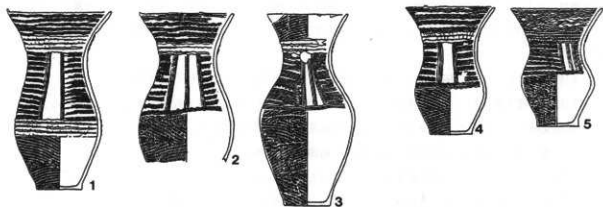
当遺跡においては、ほとんどの住居跡から炉跡が検出された。炉跡は、住居中央部からやや北寄り（出入り口方向と反対側）にあるものが多いが、住居跡内に炉跡を2基持つ住居跡（第19号住居跡）や先に述べた第3号住居跡のような例もみられる。また、茨城県北部から湖沼周辺地域においては、同時期の炉跡から炉石が検出される割合が高いことが指摘されており¹¹、当遺跡においても炉石が検出された住居跡は13軒（全体の52%）と高い割合で確認された。石材は砂岩、凝灰岩、流紋岩等であり、炉石の形状は棒状のもの、角柱状のものが主である。軟質の凝灰岩については、板状で検出されている（第17・19・31号住居跡）。廃絶時の炉の状況を良好に留めていると思われる住居跡（第12・16・24・28号住居跡）の出土状況からは、炉石は炉の長軸線に対して直交し、中央よりも出入り口側に寄った位置に据えられて検出されている。（第86図）



第86図 炉跡実測図



第87図 十王台式に見られる底部文様構成



- 1 矢倉第14号住居跡
 2 * 第19号住居跡
 3・5 * 第24号住居跡
 4 * 第23号住居跡

- 6~10 団子内第26号住居跡
 11・12 製 釜第43号住居跡



第88圖 矢倉・団子内・製釜遺跡出土遺物

遺物は、十王台式土器の広口の壺形土器が主である。その型式についてはいくつかの変遷が発表されており、最近ではさらに細分化されつつある。当遺跡から出土した十王台式土器の文様帯の特徴を挙げると、以下の8点になる。

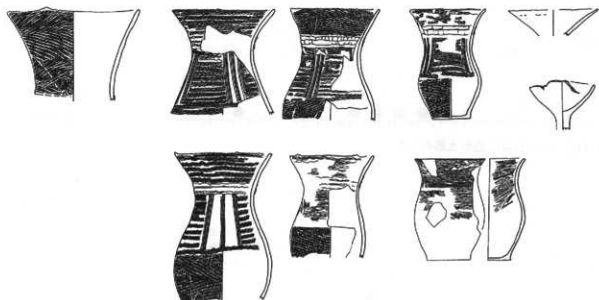
- (1) 口唇部には縄文による施文又はヘラ状工具による刻みがあり、突起が付く頻度が高い。
- (2) 口縁部は櫛歯状工具により波状文が施されるものが多いが、縄文を施すもの、無文のものもある。
- (3) 頸部文様帯の大部分がスリット手法による充填波状文に規格化されている。
- (4) 口縁部と頸部の境にある隆帯は全体に低く、指頭による押圧がある。
- (5) 波状文を施す櫛歯状工具の歯の数は4～6本のものが多い。
- (6) おもに頸部文様帯と胴部文様帯を区画するものは櫛歯波状文であり、連縄文は少ない。
- (7) 胴部に施される縄は、附加条二種(附加1条)で、羽状構成をとるものがほとんどである。
- (8) 底部は、布目を残すものが多い。(第87図)

当遺跡の出土土器をこれらの特徴をふまえながら那珂川流域の遺跡の出土例と比較すると、大洗町「団子内遺跡」第26号住居跡や同町「巽釜遺跡」第43号住居跡出土の土器と同型式と思われる(第88図)。このうち「団子内遺跡」第26号住居跡から出土した土器(中・小形の広口壺)を比較観察したところ、全体の形態、文様構成の割合、(1)～(3)・(5)～(8)に類似点を認めることができた。このことから、当遺跡出土の十王台式土器のほとんどが「団子内遺跡」第26号住居跡とはほぼ同時期と考えることができる。

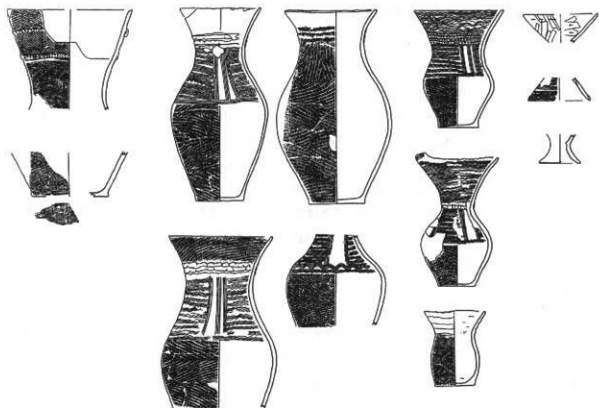
当遺跡における十王台式土器の器種構成は、壺形の土器の他に高坏形土器・ミニチュア土器があり、鉢形土器や甕形土器は見あたらない。高坏形土器を出土した住居跡は11軒であり全体の48%である。また、片口を有する壺形土器(第24号住居跡・No10)や片口を有する高坏形土器(第13号住居跡・No3, 第16号住居跡・No5, 第19号住居跡・No14)も見られる。各住居跡の出土数は、住居跡の埋没状況にかかわらず一概には言えないが、ミニチュア土器は遺物を比較的多くもつ住居跡に見られる。

第89図は、第12号住居跡と第24号住居跡の器種構成を示したものである。広口の壺形土器が煮炊き具・非煮炊き具の用途を受け持つと推察される。そこで、壺形土器の用途を器高の分布と二次焼成痕の有無により捉えることを目的として作成したのが第90図である。器高を測れるもの13個体を抽出すると、20cm前後(小形)と30cm前後(中形)に山があることがわかる。また、かなりの割合で二次焼成痕の存在を確認することができる。しかし、この図からは大形のものの存在をうかがい知ることができない。この課題を補うために、器高と胴部径の関係は相関すると思われることから、第91図を作成した。図からは、小形・中形と思われるものの割合は高く、大形のものも存在するが割合は低いことがわかる。また、胴部径から推察される大形の器高は、中形のものとは比べるとかなりの器高差があることが予想される。このことは、大形の器種と思われる胴部片の形状や底部径からも推察される。また、中形以下のものについては二次焼成痕の割合が高いが、大形のものについてはほとんど見当たらない。この傾向は、底部の観察からも確かめられ、壺形の大形土器は、非煮炊き具として、中形・小形土器は煮炊き具として使用される割合が高いと想定される。

十王台式土器とともに上桶吉式土器片(第1・2・9・12・13・17・31号住居跡)、二軒屋式土器片(第8・9・12・18・31号住居跡)が出土している。これら両型式の土器を出土する住居跡は3軒である(第9・12・31号住居跡)。このうち、第9号住居跡は主柱穴以外に多くのピットをもち、第12号住居跡は土師器、鉄器を伴しているなどの特徴が認められ興味深い。また、二軒屋式土器片の観察から、二軒屋式土器は比較的大形のものであることが推察できる。二軒屋式土器片の胎土に注目すると、大きな角礫状の石英、長石を多く含み、明らかに十王台式土器の胎土とは異なることから、搬入されたものであろう。これに対し上桶吉式土器



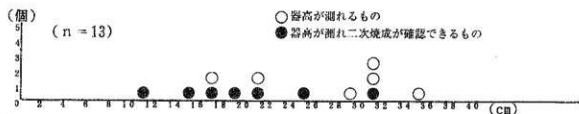
第19号住居跡



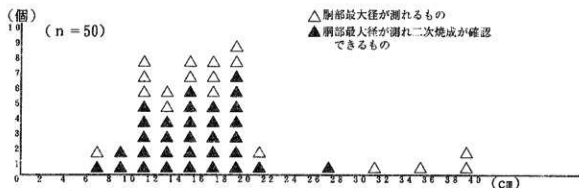
第24号住居跡

第89図 第19・24号住居跡出土遺物





第90図 器高による壺形土器の分布



第91図 胴部最大径による壺形土器の分布

片からは中形以下のものが多いことが推察できる。また、第19号住居跡における樽式土器の出土は、茨城県においては稀な例であり、弥生時代後期後半の交流や物資の流通を考えるうえで貴重な資料になるであろう。

今回の調査では、弥生時代後期後半において住居跡の形状が多様であることや多くの石器類を使用していたこと、他地域とは広範囲に交流があったことなど出土遺物等を通して明らかになった。一方、土器に残る刷の痕跡を手がかりに、おもな住居跡の如跡の覆上、土器内の上はウォーターセパレイションにより含有物の抽出・分類を試みたが、籾・種子等の資料を得ることはできなかった。また、土器に残る布の痕跡から、豊富な布が存在していたと考えられるが、紡錘車以外、布の製作にかかわるとされる遺物等は確認されなかった。

以上を含め、その他多くの課題については、さらに同時期の調査遺跡の類例の蓄積を待って検討を加えなければならないと思う。

註

- (1) 鶴見貞雄氏は、茨城県内において報告されている炉石をもつ住居跡を取り上げ、時期ごとにかの位置・炉石の位置・石材等を分析し、炉石の用途について考察している。鶴見氏の資料をもとに県北部から瀬沼周辺における弥生時代後期後半の住居跡から炉石が検出される割合は、およそ45%になる(16遺跡98軒中44軒報告されている)。鶴見氏は、弥生時代中期末まで炉石を伴わないこと、茨城県内において確認された弥生時代後期の住居跡をおよそ600軒として炉石を伴う住居跡の割合は15%であること、また、調査された古墳時代前期の住居跡をおよそ900軒として炉石住居の割合は4%弱であると指摘している。

・鶴見貞雄 一炉石住居覚書一「研究ノート5号」茨城県教育財団 1995年

- (2) 鈴木素行氏は(1a・1b・1c・2a・2b式)を、茨城県教育財団弥生時代研究班は(1a・1・1新・2式)をそれぞれ設定している。
- ・鈴木素行 一弥生時代遺物の編年的位置・Ⅱ―『武田Ⅶ―1993年度武田遺跡群発掘調査の成果―』(財)勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第9集(財)勝田市文化・スポーツ振興公社1994年
 - ・弥生時代研究班 一十王台式土器について(3)―『研究ノート3号』茨城県教育財団 1993年
- (3) 鈴木素行氏は「岡子内遺跡」第26号住居跡出土の十王台式土器を2a式と位置付けている。
- ・鈴木素行 一弥生時代遺物の編年的位置―Ⅰ武田Ⅴ―1991年度武田遺跡群発掘調査の成果―』(財)勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第7集(財)勝田市文化・スポーツ振興公社1992年
- (4) 弥生時代研究班は「髭釜遺跡」第43号住居跡出土の十王台式土器を1(新)式と位置付けている。
- ・弥生時代研究班 一十王台式土器について(3)―『研究ノート3号』茨城県教育財団 1993年
- (5) 大畑遺跡(平成10年3月刊行予定・茨城県教育財団)は、当遺跡から南西へ500mほど離れた酒沼前川を挟んだ対岸にある遺跡で、弥生時代後期後半(十王台式期)の住居跡が1軒検出されている。大畑遺跡から出土した遺物を当遺跡の出土遺物と比較・観察すると、多くの相違点がある。
- ・器種が多様である。(台付広口壺・蓋・片口を有する浅い鉢形土器等)
 - ・中形土器において胴部最大径が比較的上位にある。(胴部文様帯の占める割合が高い)
 - ・I(唇部)に突起はみられない。
 - ・頸部文様帯の文様構成は多様である。(綾杉文、山形文、規則性のないヘラ描文等)
 - ・隆帯は比較的厚く貼られ、指頭による押圧も凹凸がはっきりとしている。
 - ・歯肉状工具は2~4本が多く、多象化を示さない。
- このようなことから、大畑遺跡の十王台式土器は当遺跡より前の型式の土器が主体であり、当遺跡よりも古い時代の遺跡であると推察される。
- (6) 鈴木素行氏は、十王台式土器の器種・法量・形態について詳しく分析し、その用途についても言及している。
- ・鈴木素行 一弥生時代遺物の編年的位置・Ⅱ―『武田Ⅶ―1993年度武田遺跡群発掘調査の成果―』(財)勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第9集(財)勝田市文化・スポーツ振興公社1994年
- (7) (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の大木神一郎氏より、形態・製作技法の上から樽式(Ⅲ式)であり、搬入品の可能性があるというコメントをいただいた。なお、県内における樽式土器の報告例として、那珂郡瓜連町大塚遺跡から出土した台付甕がある。

参考文献

- ・鈴木正博 一「十王台式」理解のために(1)―『常総台地7』常総台地研究会 1976年
- ・鈴木正博 一「十王台式」理解のために(2)―『常総台地8』常総台地研究会 1976年
- ・鈴木正博 一「髭釜」研究抄―『婆良岐考古第4号』婆良岐考古同人会 1982年
- ・鈴木正博 一断木「先史土器」研究の課題―『古代89号』早稲田大学考古学会 1990年
- ・鈴木正博 一茨城弥生式の終焉―『古代100号』早稲田大学考古学会 1995年

- ・海老沢 稔 —土上台式と伴出する土器群の考察—『駿良岐考古第9号』駿良岐考古同人会 1987年
- ・鈴木素行ほか 『武田Ⅱ—1988年度武田遺跡群発掘調査の成果—』(財) 勝田市文化振興公社文化財調査報告第1集 (財)勝田市文化振興公社文化財保護課 1989年
- ・鈴木素行ほか 『武田Ⅲ—1995年度武田遺跡群発掘調査の成果—』(財) ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第12集 (財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 1996年
- ・井上義安 『富上山遺跡調査報告書Ⅰ』大宮町教育委員会 1979年
- ・山武考古学研究所 『岩本前遺跡発掘調査報告書Ⅰ』日立市文化財調査報告書第35集 日立市教育委員会 1995年
- ・大宮町歴史民族資料館 『町村合併40周年記念特別展「大宮の考古遺物」』大宮町教育委員会 1995年
- ・大洗町団子内遺跡発掘調査会 『団子内』 1987年
- ・大洗地区遺跡発掘調査会 『崑崙』鹿島線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 1980年
- ・那珂湊市山崎遺跡群発掘調査会 『那珂湊市部田野山崎遺跡』 1990年
- ・高野寺畑遺跡調査団 『高野寺畑遺跡調査報告書』 勝田市教育委員会 1979年
- ・福島県立博物館 『企画展 東北からの弥生文化』 1983年
- ・栃木県立なす風1記の丘資料館 『企画展 弥生人のくらし』 1996年
- ・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『有馬遺跡Ⅱ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第102集 群馬県教育委員会 1990年
- ・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『群馬の考古学 創立十周年記念論集』 1988年
- ・茨城県 『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』 1991年
- ・茨城県教育財団 『原田北遺跡Ⅰ 原田西遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第80集 1993年
- ・茨城県教育財団 『原出口遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第94集 1995年
- ・弥生時代研究班 —「土上台式土器について(1)・(2)」—【研究ノート2・3号】 1991・1992年
- ・弥生時代研究班 —「土上台式土器について(1)～(3)」—【研究ノート4～6号】 1994～1996年

第4章 後口原遺跡

第1節 遺跡の概要

後口原遺跡は、茨城町の北西部にあり、南部を東西に流れる酒沼川、北部を東西に流れる酒沼前川に挟まれた舌状台地上に位置している。遺跡は、標高27~29mに位置し、現況は、畑地・栗林である。

当遺跡は、東西約240m、南北約35m、面積6,476m²で、旧石器時代、縄文時代、奈良・平安時代にかけて断続的に営まれた複合遺跡である。南東へ500mの地点には、平成7年度に当財団が調査した南小割遺跡が存在している。

今回の調査により、土坑49基、溝6条、及び埋葬施設2基を検出した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に5箱出土した。縄文土器片、土師器片（坏・甕）、須恵器片（坏・高台付坏・甕）、石器（尖頭器・石鏃・剥片・石核）などが出土している。

第2節 基本層序

調査区内（B2b区）にテストピットを掘り、基本土層の観察を行った（第92図）。

第1層は、14~25cmの厚さの耕作土層で、暗褐色をしている。

第2層は、15~40cmの厚さで、黒色土混じりの暗褐色をしたソフトロームの漸移層である。

第3層は、13~32cmの厚さで、褐色をしたソフトローム層である。

第4層は、13~30cmの厚さで、褐色をしたハードローム層である。ガラス質の粒子を含んでいる。

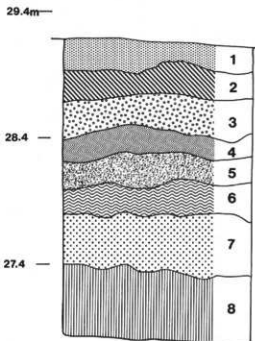
第5層は、19~25cmの厚さで、褐色をした黒色帯である。

第6層は、20~32cmの厚さで、褐色したハードローム層である。鹿沼パミス少量を含んでいる。

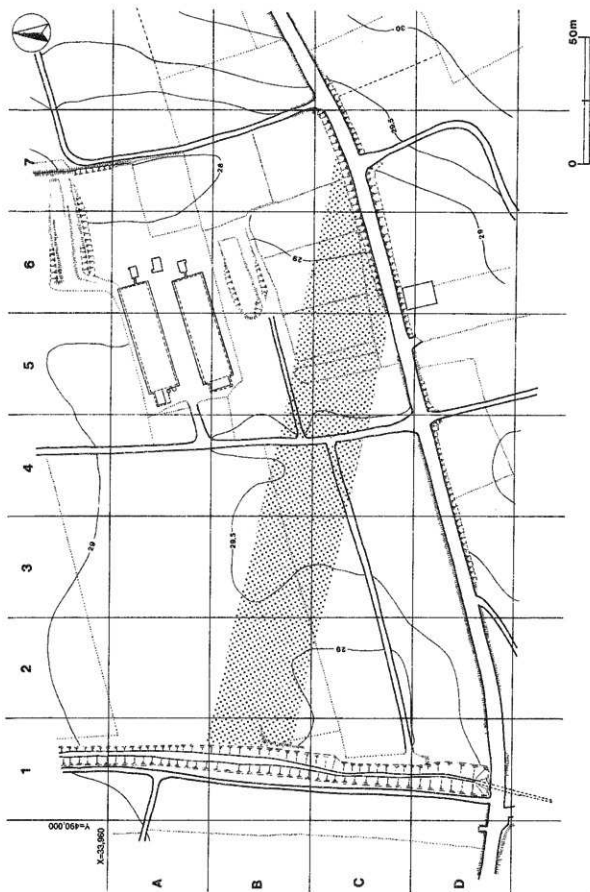
第7層は、30~50cmほどの厚さで、明褐色をした鹿沼パミス層である。

第8層は、50cmをこえる厚さで、褐色をした粘土分の多いローム層である。黒色粒子微量を含んでいる。

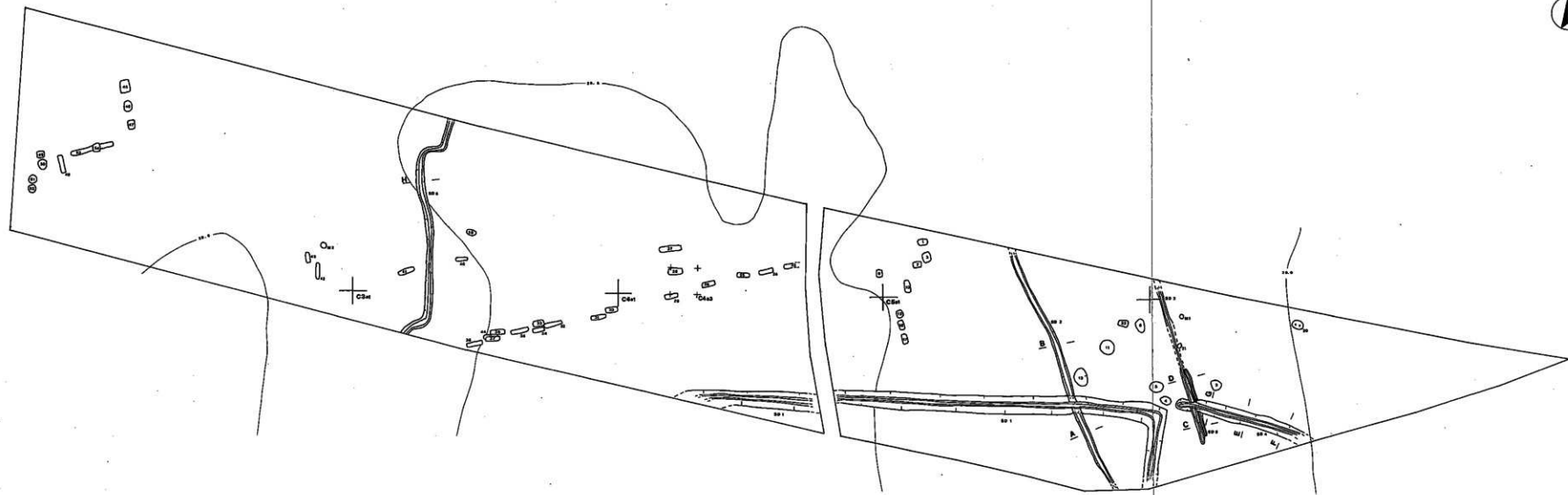
住居跡などの遺構は、第2層上面で確認した。



第92図 後口原遺跡基本土層図



第93圖 後口原遺跡地区設定圖



第94回 後口原遺跡全体図

第3節 遺構と遺物

1 土坑

今回の調査では、調査区のほぼ全域から土坑49基を検出された。ここでは、それらの土坑について実測図及び土坑一覧表で掲載した。

表4 後Ⅰ原遺跡土坑一覧表

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	縦		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 新田開保(旧→新)
				長径×幅径(m)	深さ(cm)					
1	B5h	N-80°-E	長方形	1.41×1.00	65	垂直	平坦	人土		
2	C6d	N-55°-W	不定形	1.65×1.44	21	緩斜	平坦	自然		
3	B5i	N-18°-W	隅丸長方形	1.45×1.18	65	垂直	平坦	人土		
4	C6e	N-39°-W	長楕円形	1.62×1.25	32	緩斜	緩状	自然		
5	C6d	N-82°-W	楕円形	1.98×1.61	25	緩斜	平坦	自然		
6	C6a	N-28°-W	不定形	1.93×1.44	34	緩斜	緩状	自然		
7	B5i	N-81°-E	隅丸長方形	1.27×0.85	46	垂直	平坦	人土		
9	B5i	N-8°-W	隅丸長方形	1.15×0.90	68	垂直	平坦	人土		
10	B5i	N-10°-W	隅丸長方形	1.83×0.81	68	垂直	平坦	人土	短冊器片(残部)	
11	B5b		円形	2.22×2.09	19	外傾	凹凸	自然		
12	C5a	N-30°-W	隅丸正方形	1.00×0.95	50	外傾	平坦	人土	礎	
13	C5c	N-16°-W	不定形	2.65×1.88	24	緩斜	平坦	自然		
16	C5a	N-17°-W	隅丸長方形	1.38×0.83	33	緩斜	平坦	人土	縄文土器片、刺片	
17	C5h	N-19°-W	隅丸長方形	1.48×0.77	44	外傾	平坦	人土		
20	C6a	N-75°-W	長楕円形	2.20×1.52	100	外傾	凹凸	人土		陥し穴
21	C6a	N-19°-E	楕円形	7.60×5.30	67	外傾	平坦	自然		
22	C5a	N-70°-E	隅丸長方形	1.46×0.83	27	緩斜	平坦	人土		
23	B4i	N-79°-E	隅丸長方形	1.34×0.73	60	垂直	凹凸	人土		
24	B4j	N-75°-E	隅丸長方形	2.45×0.62	55	垂直	凹凸	人土		
25	B4j	N-75°-E	隅丸長方形	1.91×7.20	53	垂直	平坦	人土		
26	B4j	N-76°-E	隅丸長方形	1.93×7.20	37	垂直	平坦	人土		
27	B4i	N-76°-E	隅丸長方形	3.19×0.80	17	垂直	凹凸	人土		
28	B4j	N-81°-E	隅丸長方形	2.06×0.92	60	垂直	凹凸	人土	礎	
29	B4j	N-70°-E	隅丸長方形	1.98×0.66	58	垂直	平坦	人土	縄文土器片	
30	C3a	N-76°-E	隅丸長方形	1.83×0.75	60	垂直	平坦	人土		
31	C3a	N-76°-E	隅丸長方形	2.20×0.59	36	垂直	平坦	人土		
32	C3b	N-77°-E	隅丸長方形	2.72×0.68	38	垂直	平坦	人土	縄文土器片、土師器片、短冊器片	
33	C3b	N-75°-E	隅丸長方形	1.66×0.88	43	外傾	平坦	人土		
34	C3b	N-73°-E	隅丸長方形	1.80×0.65	46	垂直	平坦	人土		
35	C3b	N-75°-E	隅丸長方形	2.73×1.16	44	垂直	平坦	人土	土師器片	
36	C3b	N-77°-E	隅丸長方形	2.12×(0.70)	53	垂直	平坦	人土		(旧)SK36-SK44-SK37(新)
37	C3b	N-77°-E	隅丸長方形	2.16×(0.70)	53	垂直	平坦	人土		(旧)SK36-SK44-SK37(新)

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土 遺 物	備 考 新旧関係 (旧→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
38	C 3 b	N-80°-E	隅丸長方形	2.45×0.63	42	垂直	平坦	人為		
39	B 3 j	N-77°-W	楕円形	1.35×0.85	128	外傾	平坦	人為		
40	B 3 j	N-72°-E	隅丸長方形	1.74×0.65	72	垂直	平坦	人為		
41	H 3 j	N-74°-E	隅丸長方形	2.57×0.70	100	垂直	平坦	人為		
42	B 2 j	N-5°-W	隅丸長方形	2.37×0.65	40	緩斜	平坦	人為		
43	B 2 j	N-8°-W	隅丸長方形	1.60×0.58	37	垂直	平坦	人為		
44	C 3 b	N-77°-E	隅丸長方形	2.14×(0.80)	53	垂直	平坦	人為	(旧) S K 36→S K 44→S K 37(新)	
45	B 2 c	N-13°-W	隅丸長方形	1.90×1.40	28	緩斜	平坦	人為		
46	B 2 d	N-6°-W	不定形	1.64×1.10	12	緩斜	平坦	人為		
47	B 2 e	N-9°-W	隅丸長方形	1.37×1.08	20	緩斜	平坦	人為		
48	B 1 f	N-15°-W	隅丸長方形	2.58×0.74	23	垂直	凹凸	人為		
49	B 1 f	N-80°-E	隅丸長方形	1.10×0.91	20	緩斜	凹凸	人為		
50	B 1 g	N-7°-W	楕円形	1.58×1.27	44	緩斜	皿状	人為		
51	B 1 g		円形	1.38×1.29	50	垂直	平坦	人為		
52	B 1 g	N-40°-W	不定形	1.15×1.04	46	緩斜	平坦	自然		
53	B 2 e	N-74°-E	隅丸長方形	6.55×0.67	24	外傾	凹凸	人為	(旧) S K 53→S K 54(新)	
54	B 2 e	N-7°-W	隅丸長方形	1.22×1.06	68	垂直	凹凸	人為	(旧) S K 53→S K 54(新)	

第1号土坑土層解説

1 黒褐色 ローム大ブロック微量、ローム中・小ブロック・ローム粒子少量

第2号土坑土層解説

1 暗褐色 ローム大ブロック微量、ローム中ブロック少量、ローム粒子中量、炭化粒子微量

2 褐色 ローム大・中ブロック微量、ローム粒子多量、炭化粒子微量

第3号土坑土層解説

1 黒褐色 ローム大ブロック微量、ローム中・小ブロック・粒子少量

第4号土坑土層解説

1 暗褐色 ローム中・小ブロック微量、ローム粒少量、炭化粒子微量

2 褐色 ローム小ブロック微量、ローム粒少量、炭化粒子微量

第5号土坑土層解説

1 暗褐色 ローム大ブロック微量、ローム小ブロック少量、ローム粒子中量、炭化粒子微量

2 褐色 ローム大・中ブロック微量、ローム粒少量、炭化粒子微量

第6号土坑土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

2 灰褐色 ローム中・小ブロック微量、ローム粒子中量、炭化粒子微量

3 褐色 ローム中・小ブロック微量、ローム粒子多量、炭化粒子微量

第7号土坑土層解説

1 黒褐色 ローム大ブロック微量、ローム中・小ブロック粒少量

第9号土坑土層解説

1 黒褐色 ローム大ブロック微量、ローム中ブロック少量、ローム小ブロック多量、ローム粒子少量

第10号土坑土層解説

1 黒褐色 ローム大ブロック微量、ローム中・小ブロック・ローム粒子少量

第11号土坑土層解説

1 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒少量

2 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

第12号土坑土層解説

1 黒褐色 ローム大・中・小ブロック少量、炭化粒子微量

第13号土坑土層解説

1 黒褐色 炭化粒子微量、焼土粒子微量

2 褐色 ローム大ブロック少量、ローム粒子多量、炭化粒子微量、焼土粒少量

第16号土坑土層解説

1 黒褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量

第17号土坑土層解説

1 黒褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量

第20号土坑土層解説

1 黒褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子微量、炭化粒子中量、焼土粒少量

2 黒褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子少量、炭化粒子微量

3 褐色 ローム中ブロック少量、ローム粒子多量、炭化粒子微量

4 褐色 ローム粒子中量、ローム粒子多量、炭化粒子少量、焼土粒少量

5 褐色 ローム大ブロック微量、ローム中ブロック少量、ローム粒子多量、炭化粒子微量

第21号土坑土層解説

1 暗褐色 ローム大・小ブロック微量、ローム粒子少量、炭化粒子少量

2 黒褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子少量

3 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量

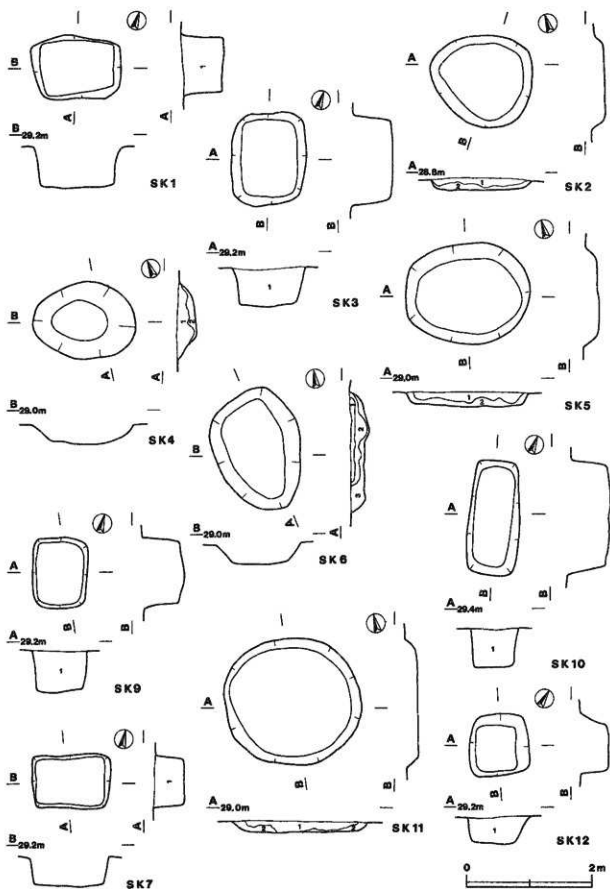
4 黒褐色 ローム大・中ブロック微量、ローム粒子中量

5 黒褐色 ローム小ブロック多量、ローム粒少量

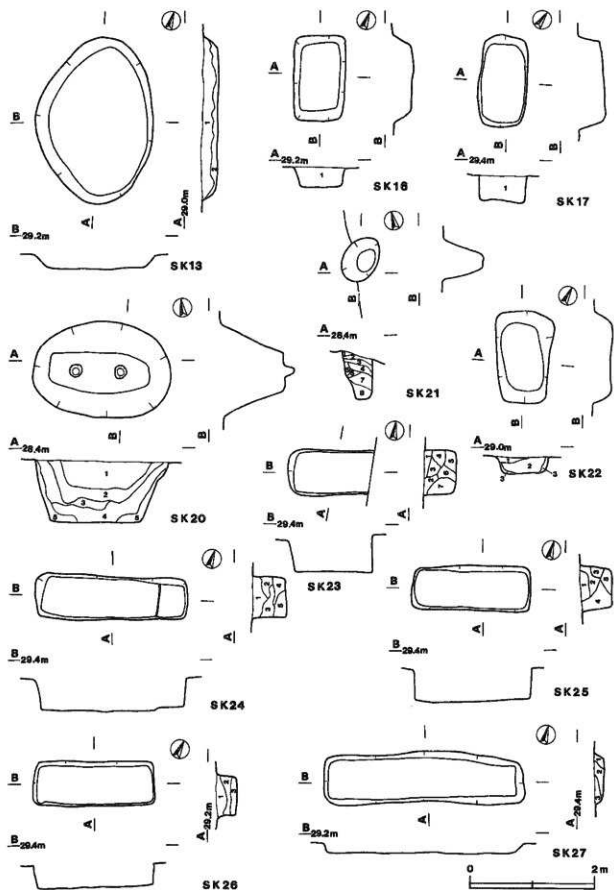
6 黒褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量

7 褐色 ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量、ローム粒子少量、炭化粒子微量

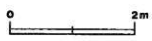
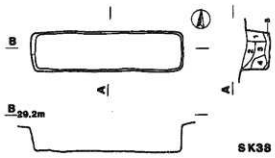
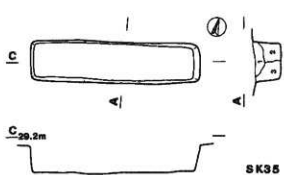
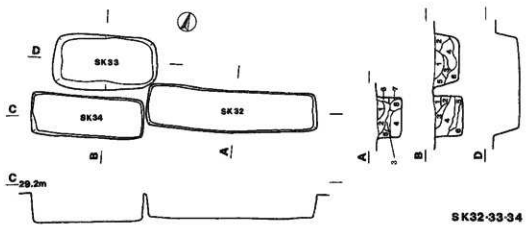
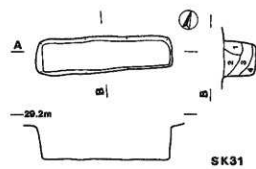
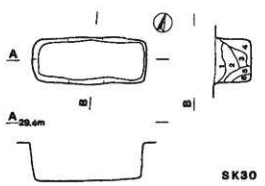
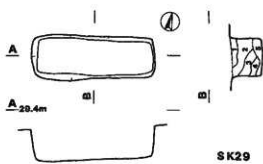
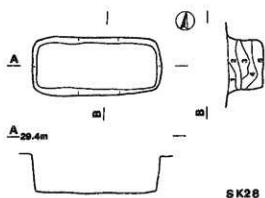
8 暗褐色 ローム中ブロック中量、ローム小ブロック微量、ローム粒子中量



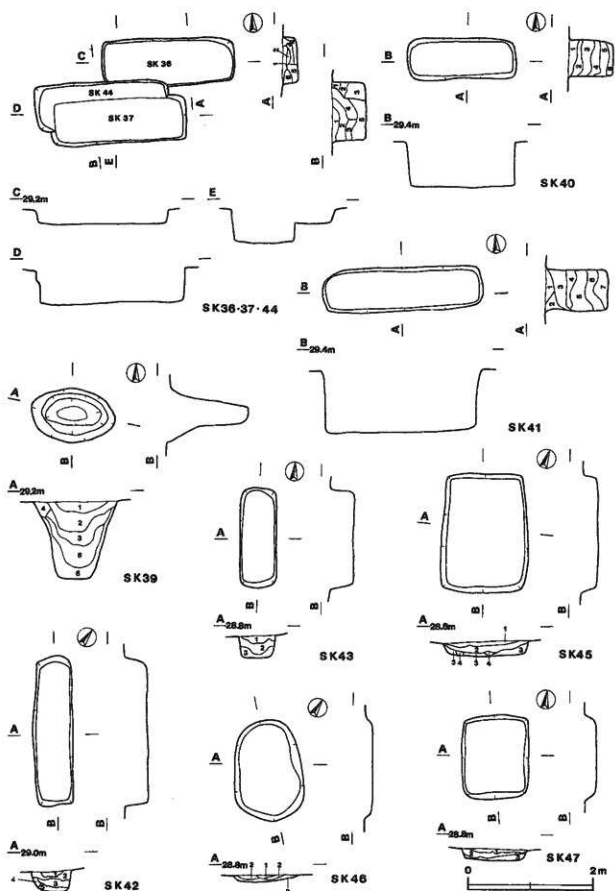
第95图 第1·2·3·4·5·6·7·9·10·11·12号土坑实测图



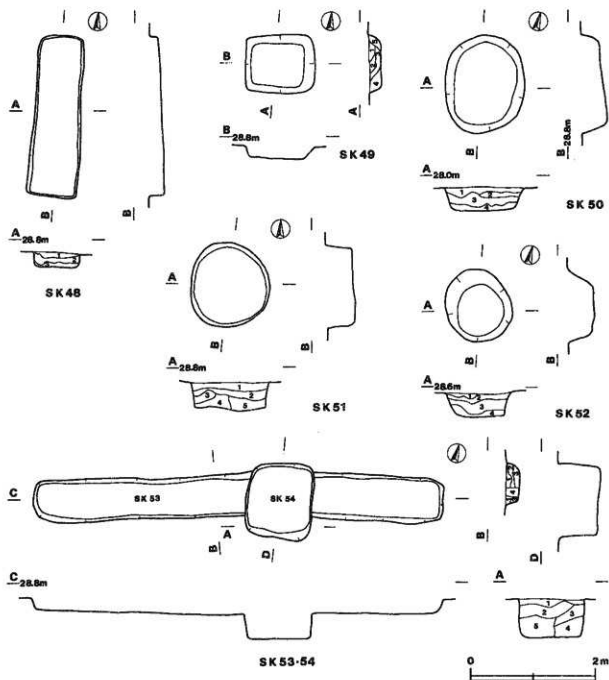
第96图 第13·16·17·20·21·22·23·24·25·26·27号土坑实测图



第97图 第28·29·30·31·32·33·34·35·38号土坑实测图



第98图 第36·37·39·40·41·42·43·44·45·46·47号土坑实测图



第99図 第48・49・50・51・52・53・54号土坑実測図

第22号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム中ブロック少量, ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム大・中ブロック少量, ローム小ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム中ブロック少量, ローム粒子多量, 炭化粒子微量

第23号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ローム大・中・小ブロック少量, ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム大・中ブロック中量, ローム小ブロック少量, ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム大・中ブロック少量, ローム小ブロック中量, ローム粒子中量
- 4 褐色 ローム大・小ブロック少量, ローム中ブロック中量, ローム粒子少量
- 5 褐色 ローム大ブロック多量, ローム中・小ブロック少量, ローム粒子少量
- 6 褐色 ローム大・中ブロック・ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 7 灰褐色 ローム大ブロック少量, ローム中・小ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子微量

- 4 褐色 ローム小ブロック微量, ローム小ブロック少量, ローム粒子中量
- 5 褐色 ローム小ブロック多量, ローム粒子中量
- 6 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

第41号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム中・小ブロック少量, ローム粒子中量
- 2 灰褐色 ローム大・中ブロック, ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム大・中・小ブロック中量, ローム粒子少量
- 4 褐色 ローム大・中ブロック, ローム粒子少量
- 5 灰褐色 ローム大ブロック少量, ローム中・小ブロック中量
- 6 黒褐色 ローム大・小ブロック, ローム粒子少量, ローム中ブロック中量
- 7 暗褐色 ローム大・小ブロック, ローム粒子少量, ローム中ブロック中量

第42号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム大・中ブロック少量, ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック少量, ローム粒子中量
- 5 暗褐色 ローム中・小ブロック少量, ローム粒子中量

第43号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム大・中ブロック少量, ローム小ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム小ブロック・ローム粒子中量

第44号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム大ブロック微量, ローム中ブロック中量, ローム小ブロック
- 3 黒褐色 ローム小ブロック多量, ローム粒子少量

第45号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 灰褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム中ブロック少量, ローム粒子多量, 炭化粒子微量

第46号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム大ブロック少量, ローム小ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 3 灰褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子多量

第47号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量, ローム小ブロック中量
- 2 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 3 灰褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量, ローム小ブロック少量

第48号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム中ブロック中量, ローム粒子少量
- 2 灰褐色 ローム大ブロック微量, ローム中ブロック・ローム粒子少量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子微量, 焼土小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土小ブロック微量

第49号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム中ブロック微量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック微量, ローム小ブロック少量, ローム粒子中量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量

第50号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子微量
- 2 灰褐色 ローム大・中ブロック微量, ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム大ブロック微量, ローム中ブロック少量, ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量

第51号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム大・中ブロック・ローム粒子少量, ローム小ブロック中量
- 2 暗褐色 ローム大ブロック少量, ローム中・小ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 3 灰褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ローム大・中・ローム粒子少量, ローム小ブロック中量
- 5 暗褐色 ローム大ブロック・ローム粒子少量, ローム小ブロック中量

第52号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム中ブロック微量, ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 3 黒褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量, ローム小ブロック中量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子微量

第53号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量, ローム小ブロック中量

第54号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム大・中・ローム粒子少量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム大・中・ローム粒子少量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子微量
- 3 灰褐色 ローム大ブロック微量, ローム中ブロック・ローム粒子中量, ローム小ブロック多量

2 埋葬施設

今回の調査区において、埋葬施設が2基検出されている。これらの遺構について、形状、規模、覆土の状態及び出土遺物について記載する。

第1号埋葬施設（第100図）

位置 調査区の東部，C6a1区。

規模と形状 長径0.6m，短径1.2mの楕円形で、深さ18cmである。

長径方向 N-46°-W

壁面 挿鉢状に外傾して立ち上がる。

底面 皿状である。

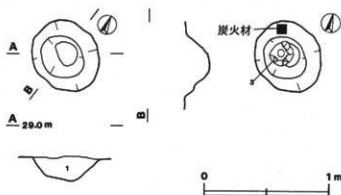
覆土 炭化材・粒子，焼土粒子を含んだ黒褐色土が堆積している。人為堆積。

土層解説

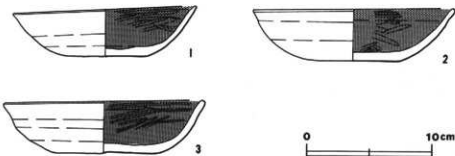
- 1 黒褐色 ローム小ブロック微量，ローム粒子少量，炭化材微量，炭化粒子中量，焼土粒子微量

遺物 遺構の中央部，覆土中層からはほぼ完形に近い状態で，土師器坏3点が出土した。第101図3の坏を正位にし，1・2の坏を重ねて逆位に口縁を合わせた状態で出土した。坏と坏の中には，黒色土が少量入っていたが骨片等は，確認できなかった。

所見 本跡は，遺物の出土状況及び覆土の状況から，土師器坏を藏骨器とした埋葬施設であると思われる。時期については，出土遺物から平安時代(10世紀以降)と考えられる。



第100図 第1号埋葬施設実測図



第101図 第1号埋葬施設出土遺物実測図

第1号埋葬施設出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第102図 1	土師器 坏	A 14.8	口縁部一部欠損。平底。体部は、内彎し、口縁部は、やや外傾して立ち上がる。	口縁部・体部外面ロクロナデ。体部下位回転ヘラ削り。内部ヘラ磨き。底部ヘラ削り。	灰石、石英、スズイ 雲母、針状鉱物 褐色、普通	P1, P.L.38, 95% 内面黒色処理 中央部 覆土中層 逆位
		B 4.1				
		C 6.4				
2	土師器 坏	A 16.2	口縁部～体部一部欠損。平底。体部は内彎し、口縁部は、外傾して立ち上がる。	口縁部・体部外面ロクロナデ。体部下位～中位回転ヘラ削り。内部ヘラ磨き。底部ヘラ削り。	灰石、石英、スズイ 雲母、針状鉱物 褐色、普通	P2, P.L.38, 95% 内面黒色処理 中央部 覆土中層 逆位
		B 4.2				
		C 7.0				
3	土師器 坏	A 16.1	口縁部～体部一部欠損。平底。体部は内彎し、口縁部は、外傾して立ち上がる。	口縁部・体部外面ロクロナデ。体部下位～中位回転ヘラ削り。内部ヘラ磨き。底部ヘラ削り。	灰石、石英、スズイ 雲母、針状鉱物 褐色、普通	P3, P.L.38, 60% 内面黒色処理 中央部 覆土中層 正位
		B 4.3				
		C 8.0				

第2号埋葬施設 (第102図)

位置 調査区の西部, B25区。

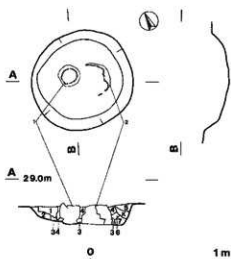
規模と形状 径0.8mの円形で, 深さ16cmである。

長径方向 N-60°-W

壁面 はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 炭化粒子, 焼土粒子を含んだ黒褐色土が堆積している。人為堆積。

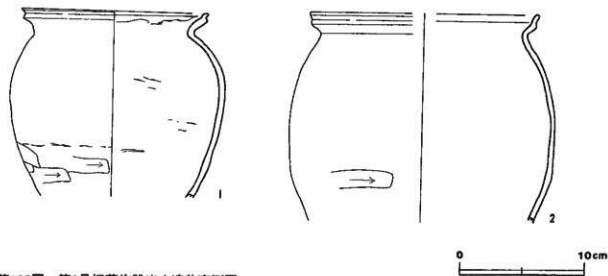


第102図 第2号埋葬施設実測図

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子・焼土粒子微量, 炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子微量, ローム粒了中景
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 4 黒色 炭化粒子・焼土粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒了中景, 炭化粒子微量

遺物 土師器甕が2点出土している。第103図1の甕は北西部から, 2の甕は南東部から, それぞれ覆上下層より逆位に掘えられた状態で出土している。1の甕からは, 火葬されたと思われる骨片が少量確認された。所見 本跡は, 骨片等の出土状況から土師器甕を藏骨器とした埋葬施設であると思われる。時期については, 出土遺物から平安時代(9世紀後半)と考えられる。



第103図 第2号埋葬施設出土遺物実測図

第2号埋葬施設出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第103図 1	甕 土師器	A 15.0 B (15.0)	体部下位・口縁部一部欠損。体部は内厚し, 口縁部は, 「く」字状に外傾して立ち上がる。口縁上部に凹線が走る。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部内・外面ナデ。外面一部ヘラ削り。	灰石, 石英, 雲母 明赤褐色 普通	P4, P.L.38, 70% 北西部 底面 逆位

図像番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徵	手法の特徵	胎土・色調・地成	備 考
第103図 2	壺 十 師 器	A [18.4] H (16.7)	口縁部・体部片。体部は内厚し、口縁部は、外傾して立ち上がる。口縁部上端は、外側につまみ上げられている。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部内・外面ナデ。外側へ部張り。	灰石、石英、雲母 スコリア にふい橙色 普通	P5, P.L.38, 20% 清泉部 底面 逆位

3 溝

今回の調査では、溝6条を検出した。以下、検出された溝について記載する。

第1号溝 (第104図)

位置 調査区の中央部、C4dからC5g区。

重複関係 本跡は、第2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 西部及び南部は、調査区外へ延びているため全容は不明である。検出した部分の規模は、上幅1.8~2.8m、中幅ほぼ0.8m、下幅0.3~0.5m、深さ1.3~0.6m、全長(61)mである。平面形は、「L」字状をしている。断面形は、直線的に緩やかに立ち上がり、底面は皿状である。

方向 調査区外から東方向(N-90°-E)に51mほど直線的に延び、C6d区でほぼ垂直に南に10mほど延びて調査区外に至る。

覆土 レンズ状の堆積をしており、自然堆積である。土層A~Dにおいて堅く踏み締められた層がある。

土層A解説

- 黒褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子微量
- 黒褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 黒褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 黒褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 黒褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 黒褐色 ローム小ブロック・炭化粒子微量、ローム小ブロック少量、ローム粒子中量

土層B解説

- 黒褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量
- 黒褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子微量
- 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 暗褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 黒褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 褐色 ローム大・中ブロック・ローム粒子多量、炭化粒子少量、焼土粒子微量、締まり有
- 黒褐色 ローム大・中ブロック少量、ローム小ブロック・炭化粒子中量、ローム粒子少量、締まり有
- 黒褐色 ローム大・小ブロック・焼土粒子微量、ローム粒子少量、炭化粒子中量、締まり有

土層C解説

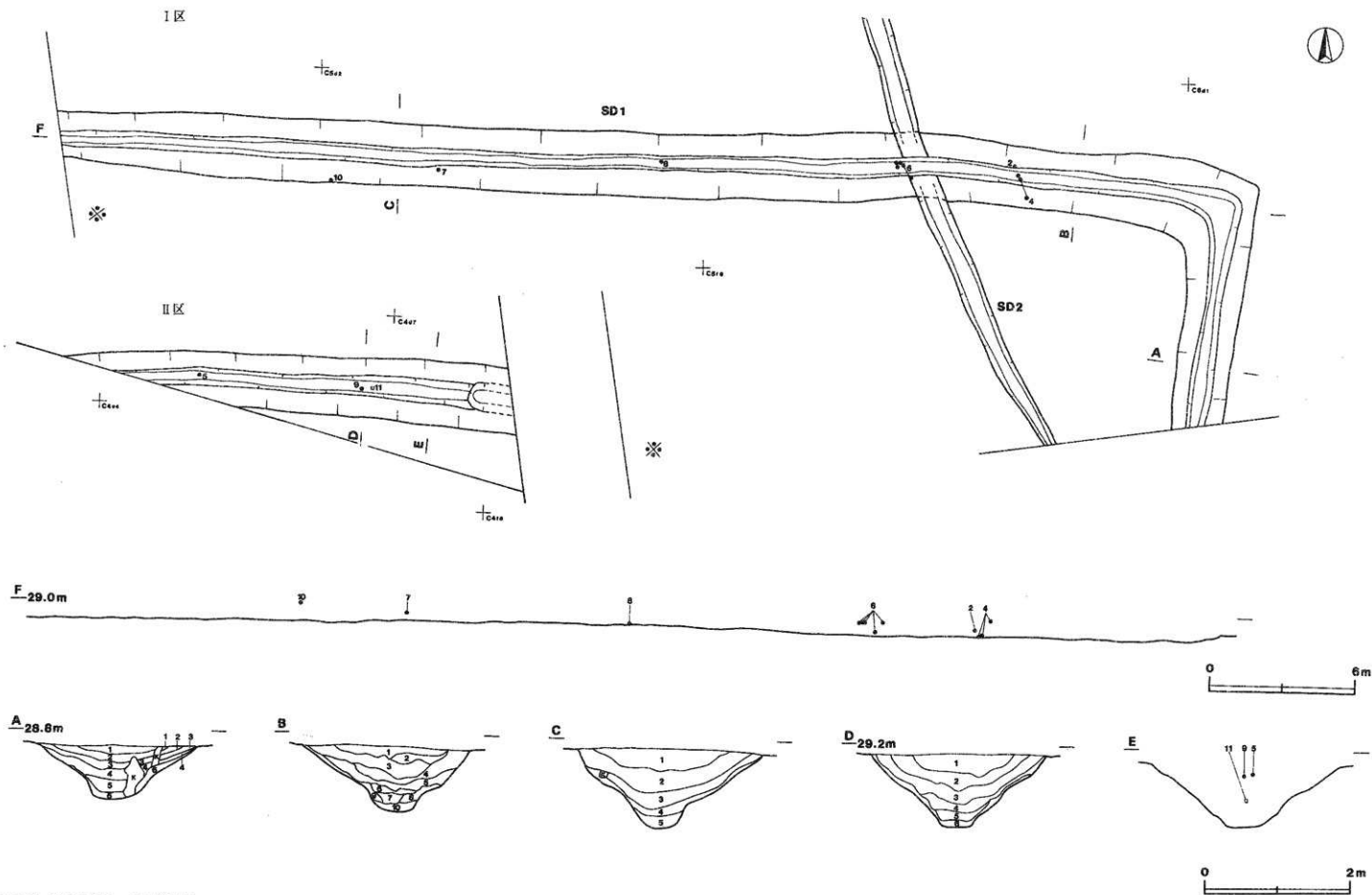
- 黒褐色 ローム中ブロック・炭化粒子微量、ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 黒褐色 ローム中ブロック・炭化物・粒子微量、ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 暗褐色 ローム中ブロック・炭化粒子少量、ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 暗褐色 ローム大ブロック微量、ローム中ブロック・炭化粒子少量、ローム小ブロック中量、ローム粒子多量
- 褐色 ローム大・中・小ブロック中量、ローム粒子多量、炭化粒子少量、締まり有

土層D解説

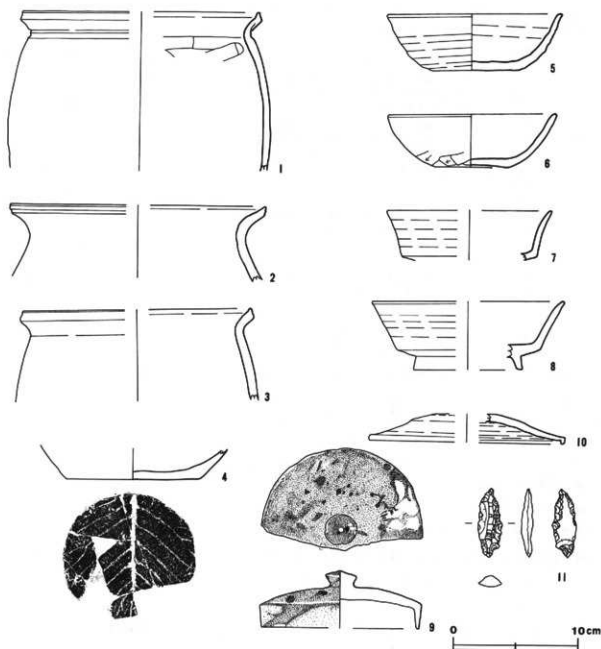
- 黒褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量、ローム小ブロック中量、炭化粒子微量
- 暗褐色 ローム中ブロック・炭化粒子少量、ローム小ブロック多量、ローム粒子中量
- 黒褐色 ローム大・中ブロック少量、ローム小ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量
- 暗褐色 ローム中ブロック・炭化粒子少量、ローム小ブロック多量、ローム粒子微量、締まり有
- 暗褐色 ローム大ブロック少量、ローム中量ブロック・ローム粒子中量、ローム小ブロック多量、炭化粒子微量、締まり有
- 褐色 ローム大・中ブロック少量、ローム小ブロック微量、ローム粒子多量

遺物 遺構全域から十師器片21点、須恵器片9点、石器1点、礫16点が出土している。C5c~C5e区付近の覆土からは、比較的多くの須恵器高台付坏片や坏片が出土している。第105図1~4は十師器片、2と4は第2号溝と交差する点から東へ3mほどの底面より、5~10の須恵器片は、中央部から西寄りの位置で覆土中から出土している。

所見 本跡は、第2号溝より古い。時期・性格については、遺構に伴う遺物がないことから不明である。



第104图 第1号沟 I·II区实测图



第105図 第1号溝Ⅰ・Ⅱ区出土遺物実測図

第1号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第105図 1	甕 土師器	A [18.8] B (12.8)	口縁部・体部片。体部は内彎し、頸部は「く」字状に外反する。口縁端部は上方につまみ上げられている。	口縁部・体部内・外面ナデ。体部内面一部へら削り。	長石・石英・雲母 棕色 普通	P 6, P L 38, 5% Ⅱ区 覆土中
2	甕 土師器	A [20.4] B (5.8)	口縁部～体部片。体部は内彎し、頸部は強く「く」字状に外反する。	口縁部・体部内・外面ナデ。	長石・石英・雲母・スリ 棕色 普通	P 7, P L 38, 10% Ⅰ区 覆土中層
3	甕 土師器	A [18.2] B (7.3)	体部・口縁部片。体部は内彎し、口縁部は中位に梗を持つ。口縁端部はわずかにつまみ上げられている。	口縁部・体部内・外面ナデ。	長石・石英・雲母・小礫 棕色 普通	P 19, P L 39, 5% Ⅱ区 覆土中

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第105図 4	土師器	B (2.3) C 19.4	体部ト段~底部分。平底。	底部内部へう割り。底部木炭痕。	長石・石英・雲母・コブ にぶい棕色 普通	P 8, P. L. 39, 5% I 区 底面
5	坏 須臾器	A 14.1 B 4.6 C 7.0	口縁部~底部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は、わずかに外反する。	口縁部・体部外面口ロナデ。底部内反へう割り。	長石・白色粒子 灰白色 普通	P 9, P. L. 39, 65% II 区 覆土上層
6	坏 須臾器	A 13.6 B 4.4 C 5.8	口縁部~体部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、内彎して立ち上がる。	口縁部・体部内・外面口ロナデ。体部下位は、へう割り。底部へう割り。	長石・灰色粒子・雲母 灰黄色 普通	P 10, P. L. 39, 60% I 区 覆土中層
7	高台付坏 須臾器	A [12.2] B (4.0)	口縁部~底部分。体部は外反して開く。	口縁部・体部外面口ロナデ。	長石・灰色粒子針状炭物 灰色 普通	P 11, 10% I 区 覆土下層
8	高台付坏 須臾器	A [15.4] B 4.3 D [8.4] E 1.2	口縁部~底部分。体部は外反して開き、口縁部は、わずかに外反する。	口縁部・体部外面口ロナデ。	長石・灰色粒子針状炭物 灰色 普通	P 12, P. L. 39, 20% I 区 底面
9	坏 須臾器	A [11.8] B 4.5 F 2.5 G 1.3	口縁部~つまみ片。天井部はわずかに丸みを持ち、口縁部は、直線的に伸びる。	口縁部口ロナデ。	長石・灰色粒子針状炭物 灰キリーブ色 普通	P 13, P. L. 39, 30% 天井部内然物 II 区 覆土上層
10	坏 須臾器	A [15.6] B (2.3)	口縁部分。天井部はわずかに丸みを持ち、口縁部端は、かえりが付く。	天井部内反へう割り。口縁部口ロナデ。	長石・石英・灰色粒子針状炭物 灰キリーブ色 普通	P 14, P. L. 39, 20% I 区 覆土上層

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重量(g)			
第105図11	石鏃	2.8	0.9	0.5	1.1	チャート	II 区 覆土上	Q. 1, P. L. 39

第2号溝 (第94・108図)

位置 調査区の東部, B5₁ から C5₅ 区。

重複関係 本跡は、第1号溝を掘り込んでいる。

規模と形状 北西部及び南東部は、調査区外へ延びているため全容は不明である。確認した部分の規模は、上幅0.6~1.2m, 下幅0.4~0.5m, 深さ0.1~0.2mで全長(37)mである。断面形は、緩やかな「U」字形をしており、底面は平坦である。

方向 調査区外から、北西方向(N-30°-W)に(37)mほど直線的に延びて、調査区外に至る。

覆土 2層からなる自然堆積である。

土層解説

I 黒褐色 ローム大・中・ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 2 褐色 ローム中ブロック少量・炭化粒子微量、ローム粒子多量

遺物 覆土上層から、土師器片1点が出土している。

所見 本跡は、第1号溝より新しい。時期・性格については、遺構に伴う遺物がないことから不明である。

第3号溝 (第94・108図)

位置 調査区の東部，C6a₁からC6b区。

重複関係 第4号・第5号溝を掘り込んでいる。

規模と形状 本跡の北部は，調査区外へ延びているため全容は不明である。また，北部の1/2は耕作による擾乱を受けている。確認した部分の規模は，上幅0.9～1.3m，下幅0.2～0.3m，深さ0.7～0.8mで全長(23)mである。断面形は，緩やかな「U」字形をしており，底面は皿状である。

方向 C6b区から北西方向(N-15°-W)に(23)mほど直線的に延びて，調査区外に至る。

覆土 6層からなる自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量	4 褐色	ローム小ブロック中量，ローム粒子多量
2 暗褐色	ローム中ブロック少量，ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子微量	5 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
3 灰褐色	ローム中ブロック少量，ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子微量	6 褐色	ローム小ブロック少量，ローム粒子多量

遺物 覆土上層から，土師器片2点が出土している。

所見 本跡は，第4号・第5号溝より新しい。時期・性格については，遺構に伴う遺物がないことから不明である。

第4号溝 (第94・108図)

位置 調査区の東部，C6e₂からC6es区。

重複関係 本跡は，第3号・第5号溝に掘り込まれている。

規模と形状 本跡の東部は，調査区外へ延びているため全容は不明である。確認した部分の規模は，上幅2.0～2.2m，下幅0.6～0.7m，深さ1.0～1.81mで全長(18)mである。断面形は，緩やかに直線的に立ち上がり底面は皿状である。

方向 C6e₂区から南東方向(S-20°-E)に(18)mほど直線的に延びて，調査区外に至る。

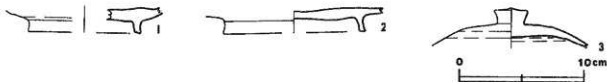
覆土 6層からなる自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ローム小ブロック中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量	4 黒褐色	ローム大・小ブロック・炭化粒子微量，ローム粒子少量
2 黒褐色	ローム小ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子微量	5 暗褐色	ローム中ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子微量
3 黒色	ローム小ブロック・炭化粒子少量，ローム粒子微量	6 褐色	ローム小ブロック・炭化粒子少量，ローム小ブロック・ローム粒子中量

遺物 本跡東部の覆土中から，須恵器片5点が出土している。第106図1は高台付杯の底部片，2は壺の底部片，3は蓋の天井部片である。

所見 本跡は，第3号・第5号より古い。時期・性格については，遺構に伴う遺物がないことから不明である。



第106図 第4号溝出土遺物実測図

第4号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第107図 1	高台付杯 須恵器	B (1.6) D [4.5] E 0.9	底部片。平底。高台は短く「ハ」 字状に開く。	底部回転ヘラ削り。	長石灰色粒子針状鉱物 灰色 普通	P16, P.L.39, 10% 東部 覆土中
2	壺 須恵器	B (1.4) D [11.3] E 1.2	底部片。平底。高台は「ハ」字状 に開く。	底部回転ヘラ削り。	長石灰色粒子針状鉱物 灰黄色 普通	P17, P.L.39, 10% 東部 覆土中
3	蓋 須恵器	B (2.9) F 2.6 G 1.3	天井部へつまみ片。中央部が突出 した扁平なつまみが付く。天井部 は丸みを帯びる。	天井部回転ヘラ削り。	長石灰色粒子針状鉱物 灰黄色 普通	P18, P.L.39, 25% 東部 覆土中

第5号溝 (第94・108図)

位置 調査区の東部, C6cからC6f区。

重複関係 第3号溝に掘り込まれ, 第4号溝を掘り込んでいる。

規模と形状 本跡は, 下幅0.2~0.3m, 深さ0.3~0.4m, 長さ11mである。

断面形は, 「U」字状をしており, 底面は皿状である。

方向 C6f区から, 北西方向(N-15°-W)に11mほど直線的に延びる。

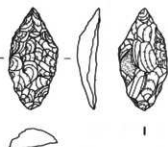
覆土 2層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子多量, 炭化粒子微量
2 褐色 ローム中ブロック微量, ローム小ブロック・ローム粒子中量

遺物 第107図1は, 尖頭器で中央部の覆土上層から出土している。

所見 本跡は第3号溝より古く, 第4号溝より新しい。時期・性格については, 遺構に伴う遺物がないことから不明である。



第107図 第5号溝出土遺物実測図

第5号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第107図1	尖頭器	3.1	2.0	0.8	5.4	頁岩	覆土中	Q2, P.L.39

第6号溝 (第94・108図)

位置 調査区の東部, B3dからC3b区。

規模と形状 第6号溝は, 両端が調査区外へ延びているため, 全容は不明である。確認した部分の規模は, 上幅0.7~1.3m, 下幅0.3~0.7m, 深さ0.2~0.3m, 全長(34)mである。断面形は, 緩やかに立ち上がり, 底面は皿状である。

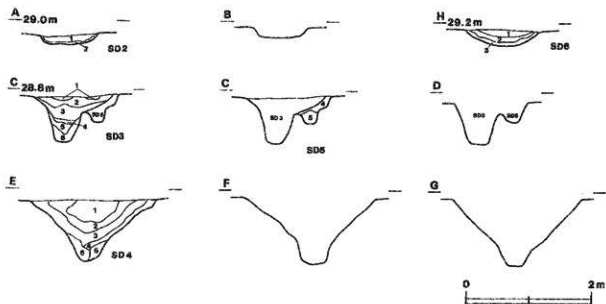
方向 B3d区から南西方向(S-15°-W)に(4)mほど延びてから, 西部へ2m延び, B3e区で南部へ直線的に25mほど延び, さらにC3b区で南西部へ(4)m延びて調査区外に至る。

覆土 3層からなるレンズ状の自然堆積である。

土層解説

- 1 紫褐色 ローム粒子微量、炭化粒子少量
 2 緑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量
 3 暗褐色 ローム大ブロック中層、ローム粒子小量

所見 本跡は、出土遺物もなく、時期・性格については不明である。



第108図 第2・3・4・5・6号満土層・エレベーション実測図

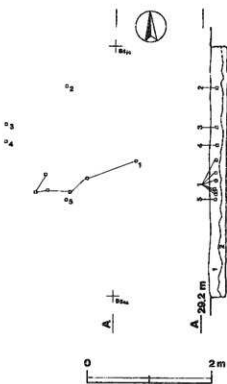
4 遺構外出土遺物

今回の調査では、表土、確認面及び遺構の覆土中から、遺構に伴わない遺物が出土している。ここでは、特徴的な遺物の実測図及び拓影図を掲載し、解説は一覧表等に記載した。

(1) 旧石器時代の遺物 (第109図)

旧石器時代の調査を行った区域は、調査区中央部 (B4j₅~B4j₆) であり、標高は約29mである。表土除去中から剥片等が確認されていたため、同地点を精査したところ、ほぼ確認面からソフトローム上層にかけての比較的浅い所から遺物を確認することができた。遺物は、石核1点、剥片5点である。石器集中地点の範囲は約4m四方で、出土レベルはほぼ同じであり、石材は安山岩、頁岩、チャートである。

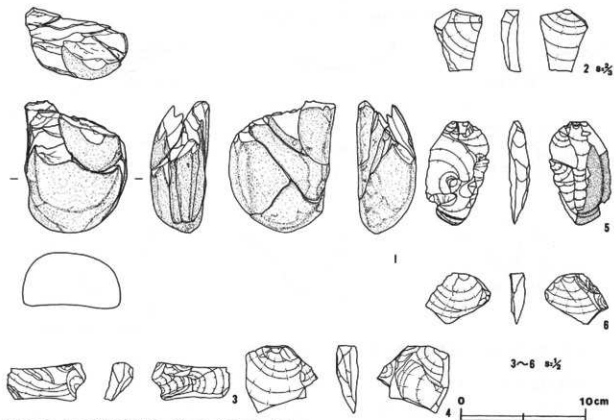
第110図1は、B4j₅区から出土した石核である。8個体の剥片が接合でき、石材は安山岩である。頁石から剥離された剥片の数やどのような製品を製作したのかは不明である。



第109図 旧石器時代調査エリア内遺物出土地点図

土層解説

1 縄色 ローム小ブロック微量、ローム粒子多量 2 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子多量、ローム中・小ブロック中量



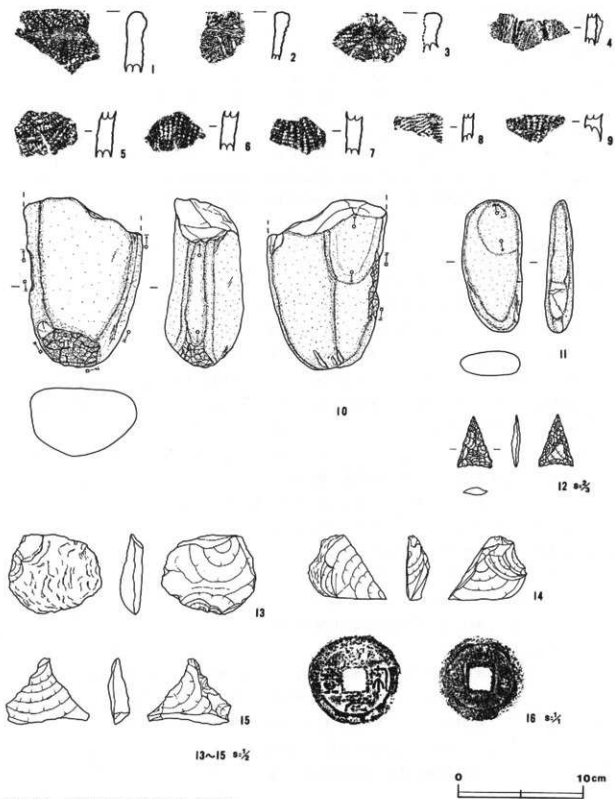
第110図 旧石器時代調査エリア内出土遺物実測図

旧石器時代調査エリア内出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第119図1	石核	10.5	8.2	4.1	428.7	安山岩	B4j3区	Q9, P.L.40
2	剥片	2.5	1.9	0.7	3.0	頁岩	B4j3区	Q10, P.L.39
3	剥片	2.1	4.1	1.1	8.8	チャート	B4j2区	Q11, P.L.39
4	剥片	3.6	3.8	1.1	13.8	チャート	B4j3区	Q12, P.L.39
5	剥片	5.5	3.2	1.1	19.0	チャート	B4j3区	Q13, P.L.39
6	剥片	2.7	3.4	0.8	6.0	チャート	B4j4区	Q14, P.L.39

(2) 縄文時代の遺物

第111図1~9は、縄文土器片の拓影図である。1・2は、口縁部片で、全体に単節の縄文が施され一部磨消が認められる。3は、口縁部の隆帯の部分で一部縄文が横方向に施されている。4~9は剥片片である。4は縦方向に隆帯をもち、半截竹管による連続刺突文が施文されている。いずれも縄文時代中期の土器の範疇にはいるものである。



第111图 遺構外出土遺物実測・拓影图

遺構外出土遺物観察表

国取番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第111回10	磨石	13.5	9.5	5.5	1,011.3	砂岩	表採	Q3, PL10
11	磨石	10.7	4.8	1.9	168.1	砂岩	表採	Q4, PL40
12	石鏝	2.0	1.5	0.3	0.7	チャート	表採	Q5, PL39
13	刺片	4.3	4.9	1.2	26.0	安山岩	表採	Q6
14	刺片	3.1	4.2	1.2	16.9	安山岩	表採	Q7
15	表片	3.5	4.1	1.0	9.8	安山岩	表採	Q8

第111回の16の古銭は表採資料であり、初請年1101年の北宋銭「聖宋元寶」である。

第4節まとめ

後I原遺跡は、旧石器・縄文・平安時代の複合遺跡である。

縄文時代は、出土した尖頭器・石鏝、検出された縄文時代の陥し穴等から、狩猟の場となっていたと考えられる。調査区内からは、集落の存在を窺わせる遺構や遺物を確認することはできなかった。当遺跡が位置する台地上には、多数の遺跡があることから、調査区の近くにも集落の存在を予測することができよう。

平安時代は、幕城であったと考えられる。今回の調査では2基の埋葬施設が確認されたが、本跡の南に隣接する塚塚古墳からも9世紀代の火葬墓が2基確認されている。本跡の第1号埋葬施設は、土師器甕を合わせて蔵骨器とする特異な埋葬方法である。当地において、この時期の火葬墓の調査例は多いとは言えない。水戸市赤塚西団地出土の火葬墓は、須恵器高台付埴と須恵器甕を使用した小型蔵骨器であり、本跡と類似する数少ない例である。第2号埋葬施設は、2つの土師器甕を蔵骨器とし逆位に埋葬している。埋葬時は、底部に何らかの「底」になるものがあつたと推測される。中からは、骨片が確認されている。県内において、蔵骨器を逆位で埋葬する例は、那珂川周辺に見られる埋葬例で22例が報告されている。

後I原遺跡において検出された埋葬施設の資料は、当地への仏教の普及を示す資料であるとともに、当時の埋葬の風習を知るうえでも貴重な資料になるであろう。

また、時期は不明であるが第1号溝の各土層を観察すると、下層部から固く踏み締められた層が認められる。このことから、第1号溝は一時期、通路としての役割りを果たしていたと考えられることもできよう。

註・参考文献

- (1)・吉澤 悟 「茨城県における古代火葬墓の地域性—土浦市立博物館保管の蔵骨器の資料紹介および県内事例の集成から—」『土浦市立博物館紀要』第6号 土浦市立博物館 1995年 3月
- ・市毛美津子 「律令時代における火葬墓と蔵骨器の様相 水戸市内出土資料を中心として」『斐良岐考古』第10号 斐良岐考古同人会 1988年 4月
- ・栃木県立博物館 「第53回企画展図録 東国火葬事始—古代人の生と死—」 1995年 10月

付 章

矢倉遺跡出土炭化材樹種同定分析結果

矢倉遺跡から出土した炭化材の樹種

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

矢倉遺跡では、弥生時代終末の焼失住居跡から、住居構築材と考えられる炭化材が出土している。本地域周辺では、主に古墳時代から奈良・平安時代にかけての焼失住居跡から出土した炭化材について樹種同定がこれまでに行われている。その結果では、遺跡の立地条件や建物の用途・形態等により用材が異なる可能性がある。

本報告では、住居構築材と考えられる炭化材の種類を明らかにし、当該期の用材選択に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、弥生時代終末の2軒の焼失家屋（S I - 15、S I - 22）から出土した、住居構築材と考えられる炭化材10点である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表1に示した。

2. 方法

木口（横断面）・径目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の判断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

10点の炭化材は、針葉樹1種類（モミ属）、広葉樹4種類（コナラ属コナラ亜属クスギ節・クリ・ヤマダワ・ケンボナシ属）に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・モミ属（*Abies*） マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は薄い。樹脂細胞はないが、傷害樹脂道が認められることがある。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅう状末端壁が認められる。分野隙孔はスギ型で1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クスギ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*） ブナ科

環孔材で孔開部は1～3列、孔開外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.） ブナ科

環孔材で孔開部は1～4列、孔開外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

表1 炭化材の樹種同定結果

遺構名	時代・時期	試料番号	用途	樹種
S I - 15	弥生時代終末	49	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		54	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		67	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
S I - 22	弥生時代終末	15	住居構築材	ケンボナシ属
		16	住居構築材	モミ属
		19	住居構築材	ケンボナシ属
		23	住居構築材	ケンボナシ属
		24	住居構築材	ケンボナシ属
		26	住居構築材	ヤマグワ
		27	住居構築材	クリ

・ヤマグワ (*Morus australis* Poirét) クワ科クワ属

環孔材で孔部は1～5列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、環孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ～Ⅲ型、1～6細胞幅、1～50細胞高で、しばしば結晶を含む。

・ケンボナシ属 (*Hovenia*) クロウメモドキ科

環孔材で孔部は1～3列、孔間外でやや急激に管径を減じたのち漸減する。大道管は管壁厚は中層、横断面では楕円形、単独、小道管は管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独および放射方向に2～3個が複合する。道管は単穿孔を有し、環孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ～Ⅱ型、1～5細胞幅、1～50細胞高。

4. 考察

S I - 15は3点全てがクヌギ節であった。一方、S I - 22では7点中に4種類が認められた。この結果から、両住居跡で用材が異なっていた可能性がある。同一集落内で住居によって用材が異なる例は、群馬県渋川市中筋遺跡をはじめ、これまでもいくつかの報告例がある(高橋、1988; 橋本ほか、1993、1996)。中筋遺跡では、建物によって用材が異なる背景に、住居の形態(窪穴・平地)により使用可能な木材の範囲が異なることや、用途(居住・倉庫)等により必要な強度等が異なることが指摘されている(橋本ほか、1996)。今回についても同様の可能性が指摘できるが、建物の形態などの詳細が不明なため断定には至らない。

また、今回の結果は、基本的には落葉広葉樹が主となる樹種構成である。茨城県でこれまでに行ってきた調査結果では、沿海地では常緑広葉樹が多くなる傾向が認められている。茨城町は、海岸に近いが、場所によっては落葉広葉樹を主とする植生がみられたことが推定される。

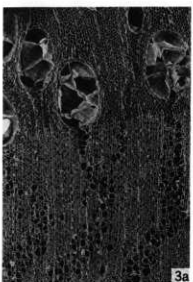
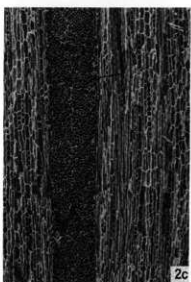
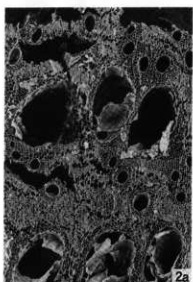
<引用文献>

橋本真紀夫・高橋教・大塚昌彦(1996)群馬県榛名山東麓地域における縄文時代から平安時代の住居構築材の用材、日本文化財科学会第13回人会研究発表要旨集、p. 92-93。

橋本真紀夫・馬場健二・田中義文・高橋教(1993)渋川市中筋遺跡(第7次調査)の自然科学分析調査。渋川市発掘調査報告書34集「中筋遺跡 第7次発掘調査報告書」、p. 40-60、群馬県渋川市教育委員会。

高橋利彦(1988a)中筋遺跡出土炭化材の樹種。渋川市発掘調査報告書第18集「中筋遺跡 第2次発掘調査概要報告書」、p. 42-47、群馬県渋川市教育委員会。

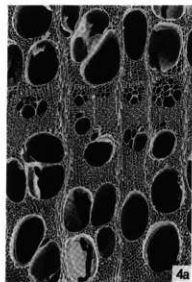
図版1 炭化材(1)



1. モミ属 (SI-22 No.16)
 2. コナラ属コナラ重属クスギ節 (SI-15 No.54)
 3. クリ (SI-22 No.27)
- a : 木口, b : 柁目, c : 板目

200 μ m : a
200 μ m : b, c

図版2 炭化材(2)



4. ヤマグチ (SI-22 No.26)

5. ケンボナシ属 (SI-22 No.24)

a : 木口, b : 柀目, c : 板目

200 μ m : a

200 μ m : b, c